

者だね。」

「そこなんですよ旦那」金造は言葉に力を籠めてさういつた。

「これはしかし、私には一寸考へがあるんですがね。」

「どうしようといふのだ。」

「私に任せて貰ひたいと思ふんです。娘を連れて行つたといふ奴も、大抵は見當が付く積りですから、いづれぢきに探し出して見せますよ。」

「探し出して、その女を連れて来るか。」

「大抵はさういふ寸法に行くでせう。が、兎に角心當りがあるんですから、娘の居所だけはきつと近いうちに探し出します。——連れて行つた奴といふのが、一寸身分のある人でしてね。」

この最後の言葉でも分るやうに、金造は、莊司男爵が銀子を連れて行つたと思つてゐるのである。

それがしかし、全く見當違ひであつたことには、金造が立去つたあとの煙草屋の二階で、例の豊吉老人とお婆さんとが、次のやうに話し話してゐたのだつた。

「金造め、彼奴みたいに目なことをいふ奴もねえ。オレノ食堂ぢア、あんな風なことをいつときアがつて——」

「でも豊さん、こつちぢアまた裏を搔いて、あんな風について金さんを歸してやつたから、いぢアないか。向ふが出鱈目をいふんなら、こつちでも負けずに目を出してやるのさ。」

「まア、兎に角、俺が危いところへ歸つて来たからよかつたんだ。一足遅れると、娘さんはうまうまと連れ出されてしまふところだつたね。」

「ほんとにさうだよ。これからはまア、あゝして結構な旦那がお嬢さんの世話をして下さるといふんだからいゝけれど、こゝでは何しろ人氣が悪いし——」

「全くだ。あの娘さんは、こんなところに暮してゐると、遅かれ早かれ、誰か凶い奴に眼を付けられるやうな娘なんだ。——だが婆さん、あのオレノ食堂の大將は、お嬢さんの顔を見た時に、ひどく吃驚してゐたやうぢアねえか。」

「さういへばね、私もそれには氣付いてゐたよ。」

「前から知つてゐた仲ぢアねえか知ら。」



「さうかも知れないね。まあ、知つてゐたにしろなかつたにしろ、あの旦那なら、きつと親切に娘さんを見てやつて呉れるだらうけれど。」

「違えねえ。俺ア、そこを見込んで、あの大将を頼んで連れて来たのさ。」

いふまでもなく豊吉老人は、中牟田良作を連れて来て、銀子を救ひ出して貰つたのである。

金造の方では何も知らない。彼は間もなく刑事達と別れてしまひ、それから忌々しさうに咬いたのだつた。

「男爵だア何だつていやアがつて、飛んでもねえすつぽかしを喰はせやがつた。——畜生め、手前一人でうまい汁を吸はうつたつて決してそんなことはさせねえから覺えてゐろ——」

### 中牟田良作

中牟田良作が泊つてゐた角筈アパートの一室へ、相良銀子が住むやうになつたのは、その晩からのことである。

今はオレノ食堂に起居してゐる良作が、何かと面倒を見てやつたのだつた。

煙草屋のお婆さんと豊吉老人との會話の中にもあつたやうに、良作は銀子の顔を見た時に、非常に吃驚してしまつた。都築青年が殺された夜のこと、新宿學園の横手で意識を失つて倒れてゐた銀子を救つた彼は、偶然にもこれで二度も銀子を救ふことになつたのである。事件に關しては、これまで殆んど傍觀者以上の立場には出てゐなかつた彼が、それから後、急に熱心になつてその真相を探り出して行つたのも無理はない。彼は、その夜銀子をアパートへ連れて行つた後、部屋をあてがつてやつただけで、何も詳しいことは訊かうとしなかつた。さうしてその翌日も晝のうちには、二三の會話を交したただけで過ぎしてしまつた。

その日は、朝からじとくと雨が降つて、大變に蒸し暑い日であつたけれども、同じ日のうちに良作は、小石川の相良家をひそかに訪ねた。そして午後の八時頃アパートへ歸つて来た。

彼が銀子の部屋のドアを叩くと、窓側の椅子に腰を下ろして、ボンヤリと考へ込んでゐる銀子は、待ち兼ねたやうにしてそれを迎へるのだつた。

「あゝ、行つて来て下さつたのですわね。」

「行つて来ました」良作は濡れたレインコートを無雑作に脱いで、ドカリと腰を下ろしながら、安



心させるやうな調子で答へた。

『うまい工合に、誰にも見付けられずにお父さんとお目にかゝることが出来ましたよ。』

『父はどんな風でございました？』

『最初は、お父さんが前にお目にかゝつた時と較べて、めつきりと憔悴してをられたので、吃驚してしまひました。』

『まあ。』

『あなたが行方不明になられてから、非常に心配をなすつたのです。——妙に不安さうな眼付きをして、私の顔を見るのにも、疑ひ深い、暗い眼付きをしてをられました。世間でいろいろのこと

をいふものだから、誰に對しても、警戒心が先きに立つてをられるのですよ。』

『父に對しては、私、ほんとうに濟まないと思つてをります。義齒のことやなんかからして、どう考へて見ても私が疑はれるやうな立場にも立つてをりますし、それにいろいろと悲しくなつてしまつて、つい、前後の見境もなくあゝして家を飛び出したのですけれど——』

『あなたの氣持は、お父さんが一番よく分つてゐて下さるやうです。娘としては無理もないのだ、

とさういふ風にいつてをられました。——あなたが、自殺しようとするのを通りかゝりの労働者に助けられて、それ以來兎に角無事であるのだからといつて話しますと、お父さんはもう、狂人のやうになつて喜びましてね——』

良作は、相良老人の歡喜の狀を思ひ出してか、ニッコリとしてさういつたので、銀子も嬉しさうな顔だつた。

『きつと、さうだらうと思ひましたの。——私が直接に行かないのを、きつと残念がつてゐたでせうね。』

『一刻も早く會ひたいけれど、とさういつてをりました。それはしかし、あなたが向ふへ行かれたり、お父さんがこゝへ來られたりすると、自然世間へもあなたの生きてゐることが知れてしまつて、うるさいことになるでせうから、當分は往來しない方がいゝですね。』

『私もさう思つてをりますの。父は、何かまだいつてをりましたか。』

『世間の奴は何とでもいへ。銀子さへ生きてゐて呉れゝばいゝんだ。そんな風にいつて非常に元氣づかれた様子でした。僕もそれには同感なんです。』



慰めるやうにしてさういはれると、銀子は忽ち顔を曇らすのだつた。

『でも私、生きてゐて、何かいゝことがあるのでせうか。』

『なくつてどうするんです。僕がお父さんの言葉に同感だといふのは、あなたが生きてゐさへすれば、いづれは事件の真相が判明するといふことなんです。——今のところでは、あなたがもう、とてもひどい悪黨のやうにいはいはれてゐますね？』

『さうですわ』低い聲で、銀子は答へた。『警察でも世間でも、皆んなさういふ風にいつてをりますわ。』

『ところが、その犯人が、きつと別なところから出て来るに決まつてゐるんです。あなたが、こゝで無鐵砲に自殺してしまふと、結局はあなたが犯人の名前を背負つて行くといふことになるし、生きてゐるさへすれば、その時こそ、本當の犯人が出て来るのです。ちつとやそつとのことがあつたところで、人間は自殺するものぢやありません。あれは、心底自分の罪を悔悟した人間か、それとも、非常に卑怯な人間だけがすることですよ。』

良作が、快活に笑つて見せたけれど、銀子は一層悲しさうな眼付きだつた。

『でも私、自分で考へて見ても、世間で私を疑ふのは、本當に無理がないと思ふくらゐですもの。』  
『どうしてです。』

『あの晩の恐ろしいことは、私が何も知らずに眠つてゐる間に起つたので、私としては、人に訊かれた時、どういつて答へることも出来ませんし、それに第一、若し私に、夢遊病者のやうな、二重人格があるのぢやないかと、そんなことまで考へますの。』

『冗談ぢやない。』良作は、顔一ぱいに笑つていつた。『馬鹿なことを考へてはいけません。自分で自分をそんな風に考へる奴があるものですか。』

『仕方がないんですもの。』

『仕方がないなんていはずに、もつと強い氣持でゐるんです。あなたは夢遊病者ぢやありません。麻酔劑のお蔭で、只眠つてゐただけのことなんです。さうして、その眠つてゐる間に、あなたを罪に陥さうとして、あんな風にいろ／＼と企んでやつた奴があるだけなんです。』

『その企んだ人間を見付け出すことが出来るのでせうか。』

『出来まますとも！ 誰がやらなくつたつて、僕がきつとやりとげて見せます。——僕はね、あなた



の顔を見ただけで、不思議とさういふ信念を持てるやうになつたんですよ。一つ、今までにあつたことを、あなたの口から話して貰ひませうか。」

良作は、初めていろ／＼のことを訊ねかけて行つた。銀子も、良作の言葉でだん／＼に力づけられたもの見え、順を追つて話して行つた。それはしかし、讀者諸君も既に大體は御承知になつてゐる事柄が多い。そのうちで只一つ、話が例の義齒を盗まれた夜のことまで進んだ時、銀子は、オレンヂエードに誰が麻酔劑を入れたのだらうと訊ねられてその時微かに動揺した風であつた。

「私、全く見當が付きません。」

前に、須田沼司法主任に訊かれた時と同様に、只さう答へただけであつたが、良作は、その態度に一寸眼を留めて、しかし深くは追究せず、「さうですか、いづれ、そのことも判つて來ますよ」さういつて話を次に進めた。

二人の會話が終つたのは、やがて十時に近い頃である。

「ちア、今夜はこれだけにして置ませう」良作は、立上りがけにいふのだつた。「兎に角ですね、あなたは氣を弱くしてゐてはいけません。僕は、かういふことを探偵するなんて初めてですけれど、

先刻もいつた信念です。あの信念でもつて、きつと最後の解決をつけますから。」

「はい」銀子は首を垂れてさう答へてゐた。

「いゝですね。何もかも僕に任せて置いて下さい。僕自身が探偵は下手でも、友人のうちに、非常に頼みになる奴もあるですし、その男などは、前から今度の事件に興味を有つて、いろ／＼と調べてゐるくらゐなんです。明日はその友人に會つて、それからだん／＼に調べて行きます」良作の、ひよいとかういふ風にして言ひ出したのが、例の箕村駒吉のことである。良作は、果して箕村駒吉に會つて何かの助けを得ることが出來たであらうか。そこには、非常に恐ろしい、第二の殺人事件が起りかけてゐたのを、流石の良作も少しも豫想せずにあつたのであつた。

### 血みどろの洋館

牛込のお濠端に近い高臺に、小ぢんまりとした赤瓦葺の洋館がある。見たところ、二階が一室に階下が三室ぐらゐの大きさであるが、兩隣りともに大きな屋敷の庭になつてゐたため、妙に孤立した感じの家である。



五月八日の午前十時頃、中牟田良作はこの洋館を訪問しようとしてゐた。さうして、お濠端を通つてゐる電車を新見附で降り、スタ／＼と、高臺の方へ登りかけてゐた。

そこは、かなり急な坂である。

森閑とした屋敷町のことではあるし、滅多に行き會ふ人もない。彼は坂を中途まで登つて、そこから右手へ曲らうとした時に、自分の眼の前を行く一人の老婆に目を留めると、ひよいつと小頸を傾けたが、ぢきに背後から近づいて聲をかけた。

『ばあや、ばあやぢやないかね。』

老婆は幾分か耳が遠いらしい。二度三度呼びかけられて、そのうちに漸く振り向いた。

『は、はい、私でございますか。』

『あゝ、矢つ張りさうだつた』良作は半分獨語のやうにいつて『忘れたかいばあや。僕はこなひだばあやの家へ行つたことのある中牟田だよ。——箕村は家にゐるだらうね。』

老婆は一寸考へてゐて、それから漸く思ひ出した風だつた。

『オヤ、さうでございましたか。年が年なものですから、すぐに見忘れてしまひます。——どちら

へでございます。うちの旦那様をお訪ねでございますか。』

『うん。ちよつと用があつてね。——一緒に行かう。お使ひにでも出たところなんだろう?』

『いゝえ、お使ひではございません。昨夜實は、うちの旦那様が、今夜は大切なお客さんが来る。

他人に聞かれたくない話もあるし、お前は一晚だけどこかへ行つて泊つて来いと、かう仰有いましたので、久しぶりで娘のところへ泊つて来たところでございます。——旦那様はゐらつしやるかと

うか……』

老婆は名前をおさよといつて、箕村駒吉が使つてゐる雇ひ婆さんなのである。

歩き出しながら、おさよ婆さんは思ひ出したやうにいつた。

『ですがねえ、うちの旦那様は、まつたく、へんな方でございますよ。』

『どうして?』

『どうしてつて、兎に角變つた方でございますよ。昨夜のことだつて、確かうちへお歸りになつたのは、晩の十時頃だつたかと思ひます。歸つていらつしやると、いきなりあたしを呼びつけて、今晩だけ外へ行つて泊つて来い、とかうだしぬけに仰有るんですものね。——たまには娘のところへ







「ゐないやうだね。」

「……」

その時おさよ婆さんは、黄色く濼んだ瞳をじつと見据ゑて、唇を、ワナワナと顫はせてゐる。

「ばあや、どうしたんだ？」と良作がいふと、

「行つて見て下さいまし」吃り／＼して、やつといつた。

「何かあつたのかね」

「は、はい、薄暗くなつてをりますし、それで、よ、よく分りません。——お勝手の戸が開いてゐました。旦那行つて、そこから見て下さいまし。」

おさよ婆さんは、良作の手をとるやうにして、先に立つて勝手口へ行つたが、そこは曇硝子を嵌めた腰高障子が二枚立てゝあり、そのうちの一枚が一尺五寸ばかり開きかゝつてゐる。

「そこから、覗いて見て下さいまし。」

おさよ婆さんは、急に身を引いてしまつた。そして良作が、片手を硝子障子にかけて、ぬつと顔を突き込んだ。

しい。

「その、水道のところ、血が澤山についてゐます……」

良作は、それもちやんと目に留めてゐたのであつた。水道は、立流し式の流しになつてゐて、トタン板を張りつめてある。さうして、小さな洗物バケツが水道のカーンの下にあつて、それには八分目ばかり水を満してあつたけれども、その水が恰度箱の腸でも洗つたくらゐる赤さに濁つてゐる。

狭いので、中は殆んど一眼で見透すことが出来る。臺所の向うに細長い縁側が續いてゐて、閉めてある雨戸を透かして、戸外の明るみがところ／＼斜めに流れ込んでゐるのであるが、縁側は、突當りが簡単な洋風應接間になつてゐるらしい。

「そちらでございませす。その突當りの客間でございませす。」

おさよ婆さんがいつた時には、もう良作がじつと眼を据ゑてゐて、一言も返事をしなかつた。

その部屋のドアが半開きになつてゐて、ドアの向うに腕が一本、床の絨毯に獅嚙みつくやうな恰好をして伸びてゐるのが、確かにそれと見えたのだつた。

眞晝時に近いのに、電燈が點いてゐるところを見れば、昨夜から點けつ放しになつてゐたものらしい。



たし、トタン板の上には、大きな血の滴りが點々として落ちてゐた。流しの縁へ、ホイツと投げつけたやうになつて引つかうつてゐた一枚のタオルにも、かすかな血の滲みが見えてゐた。明かに、誰かこゝで、自分の手に附いた血潮を洗ひ落して行つたのだつた。

良作は、無言のまゝ靴を脱いで上つて行つた。急ぐといふでもなく、愚圖々々するといふでもなく、ぢきに縁側を渡り切つて、突當りの應接間の扉口へ立つた。

じつと立つて眺めてゐるが、やがて三歩ばかり中へ這入つて、じり／＼とそこへ腰を踞めて、右手を靜かに下へ伸ばした。

勝手口からではドアに隠れて、腕が一本しか見えなかつたのであるが、そこではもう全部が見える。大柄な縦縞のパジャマを身に纏つて兩脚を大の字に踏み擴げて、右腕は、前いつたやうにギユツと伸ばして、左腕だけをくの字に折つて、箕村駒吉が血塗れの死體を横たへてゐたのであつた。折り曲げた左手に片頬をベタリと押しつけるやうにし、顔を絨毯と摺れ／＼に横へ振り向けてゐる。

その額へ、良作は自分の掌をピツタリと押し當てた。次には、死體に蔽ひかぶさるやうに身體

を曲げて、駒吉の半分見開かれた瞳を覗き込んだ。

『駄目だ、冷たくなつてゐる。』

深い息を吐きながら、口のうちに咬くのだった。

日記の断片

『ど、どうでございました。』

おさよ婆さんは、良作が家の中へ這入つた時、自分は勝手口の外に立つてゐて、怖々中を覗き込んでいただけだったのであつたが、そのうちに愈よ不安になつて來たらしく、おづ／＼と縁側に這ひ上がつて來て、ふるへ／＼かう訊いた。

『ウム。』

良作は、靜かに應接間から出て來た。

『ばあや、こゝへはばあやなんか來ない方がいゝ。そつちに茶の間なんかあるだらう。そこの雨戸を開けておくれ。』



縁側の雨戸を二三枚繰らせて、良作は茶の間へ這入るとどつしり坐つた。

「あちらは、あの、どうでございました。敷居ぎはでおさよ婆さんはかういつてゐる。

「落付いてゐなくちやいけないのだよ。」

「は、はい。」

「箕村はね、誰かに殺されてしまつたんだ。」

「え？」

薄々それとは思つてゐながら、おさよ婆さんはベタンと尻を落してしまつた。

「そ、それぢアあの、矢つ張りさうでございましたか。ど、どうしたらいゝんでせう。」

「どうも仕様はありやしない。すつかり息は切れてゐるし、近くの交番へでも行つて知らせるのだ。」

「あたしが、行くのでございますか。」

「無論さうだ。が、それも急いだところで仕方がない。その前にはあや、僕の訊くことを落付いて答へて呉れ。」

良作は、一寸言葉を切つて考へてゐた。

「でね、こゝへ来る前にはあやはいつてゐたね。昨夜はこゝへお客さんが来ることになつてゐて。それではあやが一晩だけ外へ泊りに行つたんだつて。」

「でも、そのお客さんは、誰方だかあたしは存じません。」

「さうだらう、箕村が他には別に何もいはなかつたつて、先刻ばあやもいつてゐたね。——ところで、箕村は、多分、そのお客さんに殺されたらうと思ふんだ。こゝへはばあや、前にも誰かお客さんの来たことはあるのかい。」

「あ、あまりございません。お客さんといへば、旦那様以外には、殆んど誰一人見えたことがございません。」

「僕が来ただけなんだね。——最近にどうだらう、どこから、手紙かなんか来やアしないか。」

「御手紙は、近頃滅多に來たことはございません。」

「さうかい、ぢア、それはそれとして置いて——」良作はそこで又一寸考へながら「ナニかい、ばあやは、最近に箕村のことで、何か變つたところのあるには氣付かなかつたかい。どんな一寸し



たことでもいふんだ、この二三日のうちに、ばあやの氣のついたことで何かへんだと思つたことがあつたらいつてごらん。』

漠然とした質問であるだけに、おさよ婆さんは一寸の間困つてゐる。

『さア、變つたところといつて、別にどうといふこともございませんでしたが……』といつてから、急に思ひ付いたらしくいつた。『さうく、さういへば、一昨日の晩、一寸妙なことを仰有いました。』

『一昨日の晩?』と良作は指を折つて考へた。煙草屋の二階にゐた銀子を良作の救ひ出したのが、恰度その一昨日の晩に當るのである。その時、箕村駒吉がオレノ食堂前から莊司男爵を尾行し始めたこと、及びその途中、島崎刑事に怪しまれた揚句、刑事を新宿驛前で足搦みに倒し、代々木方面へ姿を晦ましてしまつたこと、それらのことがらを、中牟田良作としては知つてゐないが、讀者諸君は恐らく、御記憶になつてをられるであらう。

『一昨日の晩、どんなことを箕村がいつたね。』

『何でも、うちへお歸りになつたのが、大變に遅うございしました。眞夜中の二時頃だつたかと思ひます。玄關へお迎へ致しますと、ぶーんと酒臭い匂ひがしましたから、いつものやうにお酒を召し

上つていらつしやつたのでせうけれど、その時は大變に御機嫌がよくて、ばあや、今夜はナ、お寺詣りをして來たぞ。お寺詣りだつてするものだ。俺は素晴らしい御利益を授つて來たぞ、とそんなことを仰有いました。』

『ふーん、妙なことをいつたものだねえ。』

『私も、妙なことを仰有ると思つたので、御利益つていつたいどんな御利益かつて伺ひました。さうすると、ポケットから、指環を一つ掴み出して、それを片手の指でチン／＼はせて弾きながら、これだ／＼、これがその御利益なんだ。今はまだ、ハッキリと分つてはゐないけれども、この指環がきつと物を言ふ。今に見てゐろ、俺がこの指環を持つて行つてつきつけてやれば、向ふの奴も一も二もなく恐れ入つてしまふ。俺は、そいつからうんと金を絞つてやるんだ、とこんな風に仰有いました。——お寺詣りをして、その指環を貰つておいでになつたのかといつて訊きますと、うん、うん、まア、早い話がそんなところだ。が、ばあや、誰にもこんなことをいつてはならんぞ。さういつて、それからもう何も仰有いません。それでまア。それつきりあたしも忘れてゐたのでございませぬけれど——』『指環は、どんな指環だつたのだね。』



「飾りも何も無い、細い蒲鉾型の金指環でございました。——さういへば、昨日もでございます。旦那様はお晝頃まで朝寝をしていらつしやつて、それから殆んど三時間ばかりも、じつと御自分の部屋で何か考へ込んでをられたやうでございますが、夕方、あたしが晩の御飯の御都合を伺ひに参らうとしますと、「分つた、分つた、これでいゝ。にらんだ眼に狂ひはない」とかういふ風に、何か嬉しさうにして獨語を仰有つてゐるのが聞えました。あたしが這入つて行きますと、「夕飯なんかどうでもいゝ」怒つたやうにかう仰有つて、それから間もなく外出され、先刻も申上げたやうに、夜の十時頃になつてお歸りになり、だしぬけに、あたしを、外へ追出してしまつたのでございます。寺詣りをして貰つて来たといふ指環にこそ、何か重大な祕密が潜んでゐるらしい。」

良作は、猶も二三のことを訊いた後、一旦二階へ上がつて、駒吉の書齋へ這入つて見たが、這入ると一緒に、「ム、これやひどい！」といつて呟いた。

机の抽斗、本箱の抽斗、あらゆる抽斗がひどく亂雑に放り出されて、部屋中が、紙屑屋の店先きのやうになつてゐる。血のあとが少しも附いてゐないところを見ると、犯人は駒吉を殺した後、一旦臺所へ行つて手を洗つて、それから悠々として二階へ上り、かうして何かを探し出さうとしたので

もあらうか。

良作は、亂雑な室内をしばらくの間眺めてゐたが、そのうちに、机の横に落ちてゐた一枚の小さ

五月六日 庄  
刑事につかまりさう  
とふいに妙西院のと  
口蓮心に  
似てゐ  
収獲

な紙片を拾ひ上げた。二寸四方ぐらゐのノートの、切れ端みたいなものであるが、それには肩のところに、五月六日といふ日附が書き込んであり、上のやうな文句が、切れぐに読まれるのだつた。

明かに日記なのである。後に分つたことではあるが、これは犯人が、犯行後に書齋でこの日記を探し出した時に、狼狽してバラ／＼と頁を破つて行くうち、どうかした拍子であつたのだらう。そのうちの一枚を破つてしまつた。そして破れて落ちた斷片を、不覺にも取り残して行つたものなのだつた。

良作には、無論日記の意味が完全には分らない。彼は、それを見詰めて長いこと考へてゐたが、そのうちにハタと横手を打つた。さうして階下へ降りて来た。



「ばあや、分つたよ、箕村がお寺詣りに行つたといふ、そのお寺がどこだか分つたよ。」

「へえ、さうでございますか。」

「でナ、ばあやは交番へ行つて、こゝに起つたことを知らせて来るのだ。」

「旦那様は、こゝにゐて下さいませ。」

「ゐてもいいが、さうさ、ひよつとすると、出掛けて行つてしまふかも知れぬ。——今のところ、係り合ひになつてはゐられないし、あとのところはよろしく頼むぞ。」

ばあやは、一刻もこんな家にはゐられないとばかり、アタフタとそこを出掛けて行く。良作は一旦、死體のある應接間へ取つて返して、何かまだ、熱心に調べてゐたが、最後に死體をもう一度よく見直して見て、少なからずギョツとした風だつた。「ウム」とばかり腕を拱いて考へてゐて、それから急に立つて部屋を出た。さうして、忽ち、この洋館を立去つてしまつた。

巡查が來、署長が來、検事判事達がやつて來たのは、それからずつと後のことである。

係官に對するおさよ婆さんの申立ては、前に良作に向つて答へたのと同様である。——その良作がなくなつてゐたことについて、係官達は一樣に不審さうな顔をしたのであつたが、その時、

死體を調べてゐた警察醫は、突然に大きな聲でいつた。

「や、これア不思議だ。この死體にも、右の耳の下の所に、奇妙な齒の痕がついてゐる。そして血を吸ひ取られてゐるやうだぞ。」

聲を聞きつけた係官達は、誰も彼も、ハツとしたやうに躍り上つた。そして、ドヤ／＼と死體の上に顔を寄せて、その警察醫の指し示した頸筋を見詰めた。

まことに、それこそは、嘗ての夜都築青年の死體に印せられてあつたと寸分違はぬ、あの奇怪な齒型であつたのだつた。

### 意外なる發見

恐怖の齒型事件に關しては、元來が代々幡警察署がその捜査本部に當てられてゐたのであつた。

それで、箕村駒吉殺しは牛込神樂坂署管内に起つたことではあるが、その顛末はやがて、代々幡署へも電話で知らされ、間もなくお馴染の須田沼司法主任島崎刑事等が現場へ急行して來た。

臨檢の模様は省略するが、おさよ婆さんの申立てだの、其の他現場の情況からして、彼等が推



測し得たところは、大體次の如きものである。

一 應接間のテーブルに足高コップが二つ載せてあつて、その一つは空になつてゐたけれども、他の一つにはウキスキイがなみ／＼と注がれたまゝであつた。空でない方はコップを調べたが、細い足のところに、僅かに指紋のあとらしいものが認められたが、他には別に指紋はなかつた。空の方にだけ、駒吉の指紋がベタ／＼とついてゐるところを見ると、駒吉はウキスキイを幾杯か飲み乾し、客の方では、全然それに手をつけなかつたか、それとも注意して指紋をつけないやうにしてゐたかに違ひない。兎に角これは、客が男であるといふことを證明してゐて、その點、前には相良銀子をのみ犯人として目してゐた當局へは、少しく見込違ひをしたかのやうな感じを與へた。しかし客が女でなかつたとはいひ切れない。何故なら、注がれたウキスキイを飲んでゐない。酒を飲まない女に男が無理矢理に酒を勧めることも十分に有り得る。係官の一人はかういふことをいつたが、無論それも、一應は考へて見なくてはならぬところであらう。

二 テーブルの上は、このやうにして酒が注がれまゝコップが覆らずにゐたくらゐるであるが、それでも、格闘はいくらか行はれたらしい。恐らく犯人は、駒吉が對談中油断してゐるところを見澄

まして、ふいに、短刀を振るつて斬りかゝつたのであらう。胸と腹部に各一ヶ所、かなり深い突き傷があり、その他股だの腰だの肘だのに、數ヶ所の傷がついてゐた。前の都築青年は麻酔劑で眠らされて、そのあとで血を吸ひ取られたものであつたが、今度は、さうする暇がなかつたと見えて、先づ短刀を以て突き殺し、それから血を吸ひ取つたらしいのだつた。

三 短刀は、臺所の流し臺の下で發見された。刃渡り四寸あまり白鞘に收めてあつたけれども、抜いて見ると、血がベツタリと喰つ付いてゐた。柄の近くに、請合といふ字が彫り込んであつて、別に、字劃のよく分らない銘に似た文字も彫つてあつたが、他には何も特徴がなくどこの夜店でも買へるやうな安物だつた。犯人は、短刀から足をつけられるといふことが絶対に無いものと安心して、平氣で捨て、行つたものであらう。

四 おさよ婆さんが、最初に勝手口へ廻つた時からして、この勝手口の硝子障子は開いてゐたといふ。立關の方は、内側から挿込錠が下ろしてあつたのだから、犯人は、犯行後立關はそのまゝにして置いて勝手口から出て行つたものであらう。犯人がその夜駒吉を訪ねて來た客であつたか、それとも、その客が歸つた後、他の誰か、忍び込んで來たといふのか、この點は猶十分の吟味を要す



るとして、この勝手口から表へ廻る地面を調べて見たが、そこには、小砂利とコークスの殻とが敷きつめてあつたため、足跡は一向に発見されなかつた。

五 が、しかし足跡が全然なかつたといふのではない。玄關口にたつた一つだけそれがあつた。おさよ婆さんがその前夜玄關を掃いて、大きな塵芥だけをゴミ取りへ取り、その残りの土を玄關の土間の片隅に掃き寄せて置いた。その中に、ボツンと一つ見付けたのである。

この足跡はすぐに寸法を測つて島崎刑事の手帳に詳しい見取圖が取られ、念のために駒吉の穿いてゐる靴と合せて見ると、ピタリと合つてしまつたので、意外にも犯人の足跡ではなく、駒吉のものであるといふことが分つたのだが、その時刑事は、がっかりしながらも、何かふと思ひついたらしく、頻りに首を傾げ／＼してゐた。

六 犯行の時間が何時であつたかといふことについて、おさよ婆さんは、前夜の十時以後のことは何も知らないといふのだし、係官達は、駒吉の家を挟む隣りの屋敷へ赴いて、昨夜何か激しい物音、或は、救ひを求める叫び聲のやうなものを聞かなかつたかと訊ねたけれども、隣家の人々は、庭を遠く隔ててゐるため、何も聞かなかつたといふ返事だつた。犬が、十二時頃に激しく吠え

た、といふことだけが、せめてもの耳寄りな言葉であつた。それは、犯人が現場を立ち去らうとした時か、それとも犯行の最中であつたかも知れない。警察醫の鑑定では、大體、十二時前後であらうといふことであつた。

—— 檢證を終つて、須田沼司法主任等が代々幡署へ引上げて來た時には、その日ももうとつぷりと夜になつてゐる。

『どうもこりや、益々複雑になつて來たね。これぢア、あの銀子といふ娘ばかりを追ひ廻してもゐられない。』

司法主任がいふと、刑事は答へた。

『がしかし、あの娘だつて、何か後暗いところがあるからして、あゝやつて行方を晦ましてゐるんです。兎に角、この上も猶あの娘の行方を探さなくつちアなりませんけれど、僕は實は、意外なことを二つばかり発見してをりますよ。』

『ふーん。』

『その一つは、向うにゐた時は、他の署の奴等もゐることだし、わざと黙つてゐてやつたんです



が、僕は、あの殺された箕村駒吉といふ男を知つてゐますよ。』

『なに、知つてゐるつて？』

『二昨日の晩、報告したでせう。僕が莊司男爵を尾行してゐて、途中で舉動不審な男を見つけたため、そいつを署へ連れて來ようとする、そいつがうまくづらかつてしまつたといふことです。あれです、あの男が、今日行つて見ると、箕村駒吉だつてことが分つたんです。僕は實際、息の根が止まるくらゐ吃驚してしまつたんです。』

島崎刑事の言葉でもつて、司法主任はぐいと膝を乗り出して來た。

『フム、それや面白い。そのづらかつた奴の顔を君が見覚えてゐたんだね。』

『さうなんです。が、ところですよ。これには主任、いろいろの關係してゐる人物があつて、僕自身としては非常に迷つてゐるわけなんです。考へて見るといふと、莊司男爵をあの男が尾行してゐたところを見れば、この二人の間にも無論何かの關係があるし、もう一人、おさよ婆さんのいつてゐた、中牟田良作つていふ男、これも無論關係がありますよ。あの男は、前に、銀子を救つたことがあつて、そのことについて、一度この署へ呼んで調べたことがありますね。』

『さうだ』司法主任は我意を得たりといふやうにして答へた。『僕も、そのことはいはうと思つた。』

前のこともあるし、第一、自分が駒吉の死體を發見して置きながら、警察官が現場へ駆けつけた時にはもうゐなくなつてゐたといふのがどうしても變なところだよ。彼奴を一つ洗つて見るかな。』

『いゝでせう。今は、オレノ食堂つてのをやつてゐるさうですから、そこへ行けばすぐと會ふことが出来ますよ。』

當局としては無理もない。全くもう五里霧中の有様であつて、中牟田良作をまで、どちらかといへば、被疑者のうちの一人に數へようとしてゐるのである。

刑事はしかし、そこでもう一つの重大な發見といふのについて説明した。

『それから主任、あの現場で僕が見附け出した靴跡ですね、あれをどう思つてゐます。』

『どうつて別に……』

『あれはね、實に意外なことになつてゐるんです。いかにも、箕村駒吉の靴跡であつて、犯人のものでないことは確かなんです。けれども、まあ、これを一つ見て下さい。』

刑事は用意して置いたものと見えて、内ポケットから一枚の紙を取り出した。靴跡を、寫眞にし



たものなのである。

その寫眞と、今度は別に、今、現場でとつて來た駒吉の靴跡の見取圖を並べて、刑事は流石に得意さうにいふのだつた。

「較べて見て下さい。僕は、現場でこれを見つけた時、寸法がどうも一致するやうに思つたんです。それで、今署へ歸ると、早速こちらの寫眞を引張り出して來たんですけれど、實によく、二つとも一致してゐるぢやありませんか。一方は、駒吉のもの一方は前に妙雲院の墓地に残されてゐた靴跡ですよ！」

司法主任も、ハツとした風だつた。

「おゝなるほど！」

「合つてませう！」と刑事がいつた。「これは、主任とういふことになるんですか。」

「……？」

「僕の考へではです。これには無論いろ／＼の考へ方もあるけれども、そのうちのひとつとして、かういふことはいへませんか、つまり、妙雲院での殺人の時には、どういふかの理由であの箕村駒吉が殺

人の行はれるのを目撃した。さうして、犯人の顔も目撃した。犯人は、それを恐れて、遂に自分の顔を知つてゐる駒吉を殺した。かういふことにはなりませんか。」

後になつて分る。

島崎刑事は、たつた一歩といふところまで押しつめて行つて、こゝで、また案外な錯誤を犯してゐるのである。

——讀者諸君は、當局の捜査手配がかうして、枝道から枝道へと這入つて行くのをさぞかし、齒痒く思つてをられることであらう。作者はこゝで、中牟田良作があれから後にどうしたか、そのことを語つて行かねばならぬ。

同じ日の午前十一時半、役は既に、牛込からは遠く離れて、小田急電車に乗つてゐた。さうして、間もなく電車を降りると、その近くにある妙雲院を訪ねてゐた。

「こちらに、原口蓮心といふ方がをられますね。一寸お目にかかりたいのですが」とさういつて案内を求めてゐた。

日記の断片からして、駒吉の所謂寺詣りをした妙雲院へ來たのである。



蓮心との會見によつて、いかなる秘密が語られるか。更に又それがもととなつて良作自身、いかなる危難に遭遇せねばならぬか、章を改めて書き續けて行かうと思ふ。

見覚えのある顔

案内を乞うてから暫くして、良作が導かれたのは、寺へ檀家の人達が來た時に使つてでもるらしい、割合に廣々とした部屋だつた。

古ぼけた佛畫の軸をかけた床前や、お經の文句を達筆に書きなぐつた唐紙や、どことなしお寺臭いところはあつたが、部屋に面した縁端には、籐椅子が二つ三つ並べてあつて、勧められるまゝにその椅子に腰を下ろして見ると、墓地の方が見渡されるやうになつてゐて、清々しい初夏の風が部屋いつぱいに流れて來る。

『蓮心さんは、今、本堂の方におゐるのですから、ぢきにこちらへ参りませう。』

寺の下働きをしてゐるらしい女がこんな風について引き込んだあと、良作がじつと墓地の方を眺めてゐると、本堂からは讀經の聲や木魚の音が聞えて來る。法事でもあつて、恐らくは蓮心もその

席に列なつてゐるのであらう。やがて、讀經の聲がバツタリ止むと、間もなく待ち設けてゐた蓮心がやつて來た。

『私が原口でございますけれど——』

『さうですか。突然にお訪ねしたのですけれど、僕は中牟田良作といふものです。』

お互ひに初對面である。

良作は、かういつて挨拶を交してゐる間に、ふつと奇妙な氣持がして來た。

頭には青い剃りの痕を見せて、身には黒い僧服を纏つて、つゝましやかにさし向ひの籐椅子へ腰を下ろした蓮心の姿に、どこか見覚えのあるやうな氣がしたのだつた。良作は、且て浩二殺しの起つた時に、その慘劇を最初に發見したのがこの尼僧であつたといふことを、無論、前から知つてゐたのであつたが、しかし今云つた通りの初對面だつた。その顔なり姿なりを、今までに一度も見つたことの無い筈であつた。それなのに、かうして顔を見合せる否や、どうしても初めて會つた人のやうな氣がしなかつた。

『ハテナ、どこで會つたことがあるのか知ら——』



頭の隅で、頻りにそんなことを考へ始めたのであつたが、蓮心の方では、一向それには氣付かぬ様子だつた。

「何か、御用でございませうか。」

さういつて、臆する風もなく良作の眼のうちを覗き込んで来た。

その言葉付きにも、聲音にも矢張りどこか聞き馴れた調子がある。良作は、又してもひよつと考へ込みながら、しかし、いつまでもそれに拘泥つてゐるわけにはいかなかつた。

「實は——」

といつて、漸く來訪の目的を話し出した。訊きたいことは、澤山にあるやうな氣がしたけれど、

そのうちでも箕村駒吉がこゝへ果して來たことがあるかどうか、それを第一番に訊ねかけて行つた。

「その箕村といふ男は、僕の舊い頃からの友人なのです。最近一寸した事件が起つたので、それについて、あなたに訊いたら何か知ら分ることがあるかも知れないと思つて伺つたのですが——」

いきなり對手を驚かせるのもどうかと思つて、駒吉が殺されたことはわざといはず、そんな風について見た。

「はい、その方なら、確かに一昨日の晩に見えました」蓮心は、何の澁みもなくさう答へた。「夜の八時頃でしたか九時頃でしたか、突然に私を訪ねて見えたのです。——瘦せぎすな、顔色の悪い方ですわね。」

「どんなことをいつて來たのですか。」

「初めには、前にこゝの墓地で起つた殺人事件について、一寸調べたいことがあるからといつて、それをいろいろとお訊ねになつたのですけれど——」

良作として、これは強ち豫想をしてゐないことではなかつた。恐怖の齒型事件について、駒吉

は、あゝして異常の興味を有つてゐたらしかつた。そのために、何かの端緒を獲ようとして、原口蓮心を訪ねて來たのに違ひはなかつた。が、それはそれとして置いて、駒吉がおさよ婆さんに見せたといふ金指環、それこそはきつとこゝの寺で手に入れて行つたものなのだつた。

寺詣りをして授かつて來た御利益といふ謎のやうな冗談——その御利益こそは指環なのだつた。その指環を、駒吉はどういふ風にして手に入れたか？ 同時にまた、それにはどんな祕密が秘められてゐるか？



良作が蓮心に向つて、それからだん／＼に訊ねて見ると、蓮心はその時、慘劇發見當時のことを、詳しく駒吉に話したらしい。さうして駒吉は、その途中で、ふと思ひ付いたやうにして、蓮心自身

がどういふ身の上の女なのか、それを訊ねたものらしい。

「ふーん、あなたの経歴を訊ねたつていふんですね」良作は、半ば獨語のやうにいつて考へ込んでしまつた。「それはしかし、随分妙な質問をしたものです。——例の事件とあなたの経歴と、その間に何かの連絡してゐることもあるのでせうか。」

「さア、それが私にも分らないのです」蓮心の方でも、そのことは妙に思つてゐたらしい。今更ながら、不審さうにしていふのだつた。

「今も申しました通り、私が、あの恐ろしい事件の起つた時のことを、だん／＼に話して参りますと、その間も箕村さんは、何かかう、他のことに氣を奪られてゐたやうで、私のお話しすることを、妙に身を入れて聞いてゐては下さらなかつたのです。フム／＼といつて頷きながら、自分では、全く別なことを考へてゐたやうに見えたのです。——私、少しばかり氣に障つたので、その話の方は、途中からいゝ加減にしてしまひ、ほんのあらましかだけを一通り申上げることにしたのですけれど、

ど、さうするとあの方は、突然に話題を變へてしまつて、私の身の上やなんか、そんなことを大變に熱心な口調でお訊ねになつたといふわけなのです。」

「事件に直接關係した慘劇發見當時のことよりも、あなたの身の上話の方が、餘計に彼の興味を惹いたといふわけですね。」

「さうらしいんです。その話になつてからは、あの方も見違へるばかり熱心になつて、私の顔をじつと睨むやうにして見詰たつきり、根掘り葉掘りして私のことを訊ねられました。」

「益々以て變ですが——それでしかし、あなたの御経歴といふのは、何か特別に變つたこととでもいふものがあるものでせうか。」

「有るには有ります。私は元來、孤兒も同然な身の上なのです。」

「御両親も何も無い、さういふやうな御境遇なのですか。」

「両親は、私がまだ物心のつかない頃、二人共に行方不明になつてしまつたさうです。その頃のことを知つてゐる者といつては、田舎の方に、一時だけ私を育て、呉れた者がをりますけれど、その人とはもう長いこと音信不通でをりますし、それから私には、妹が一人あるとのこととございま



したけれど、その妹も、生きてゐるのやら死んでゐるのやらハッキリしません、別れたのが、ずっと幼い頃のことでしたから。』

良作は、思はずハツとして蓮心の顔を見直した。

蓮心に妹がある、といふ言葉でもつて、先刻から感じてゐた不思議な氣持、この蓮心を前にどこかで見たことのあるやうに思つてゐた氣持、それがふいに強く蘇へつて來たのであつた。

蓮心は、無論、化粧をしてゐなかつた。さうして、頭をくるくるに丸めてゐた。が、さうした痛ましい姿のうちにも、どことなし、若い處女としての美しさを有つてゐた。しづかな額と睫毛の長い黒眼勝ちな瞳と、ふつくらとした頬を保つてゐた。鼻は低い方だつたけれども、すんなりとした丸味を帯んでゐる上唇の少しまくれ返つてゐる小さな口とよくつり合がとれてゐた。肩はなで肩で、腕や脚が健康さうに伸び／＼してゐた。

良作は、かうした蓮心の姿のうちに、相良銀子と著しく似通つてゐる、不思議なものに氣付いたのだつた。

恐らくはかの箕村駒吉も、その點に素早く氣付いたため、蓮心の身の上話を根掘り葉掘りして

訊いて行つたのではなからうか。

『蓮心さん、一寸待つて下さい。——僕も今、あなたのさういふ言葉を聞いて、ひよつと思ひ付いたことがあるんです。——あなたの身の上話を、僕にも一つ話して下さい。』

良作は、思はず膝を乗り出していふのだつた。

### 死人の手紙

『これは皆んな。私が大きくなつてから話して貰つたことなんですけれど——』

良作に問はれるまゝ、かういふ前置きをして、やがて蓮心の語り出した身の上話は、つづめて見るとかうである。

即ち、今からは二十年近くも昔のこと、場所は日本を遠く離れた南米ブラジル、サムパウロ市でこのことであるが、彼女はもと、そこで兩親に捨てられた子供であつたといふのであつた。

サムパウロといへば、そこはブラジルに於ける日本移民の根據地のやうなところであつて、その頃から、もう澤山の日本人が入り込んでゐたものらしい。



或る年の春、それも大變に朝早くのこと、その町に住んでゐた一人の黒人が、日本人部落を少し離れたところにある寂れた教會堂の附近で、この蓮心——當時は、名前を良子といつてゐたものらしいが、その良子を拾つたといつて、近くにある領事館まで連れて來て呉れたのだつた。兩親はどういふ身分の人達であらうか。またどういふ事情から、こんなにも幼い子供を捨兒にしなればならなかつたか。

領事館で調べて見ると、その時の蓮心は、まだ三つか四つの頑是なさで、知らない人の顔を見るといふと、無暗に人見知りをして泣くばかり、その口からは何も訊き出すことが出来なかつたけれど、そのうちに、蓮心が守り袋やうのものを身に着けてゐるのに氣がついて、それを開いて見ると、中から短かい一通の書面と、飾りも何もない、細い蒲鉾型の金指環とを見付け出すことが出来たのだつた。書面には、大體次のやうな文句が書かれてゐる。

『自分らは、事業上の失敗からして、到底子供を育てゝ行くことが出来ないやうな破目になつたので、この子良子、及び妹君子を捨てゝ行くが、幸ひにして二人を拾ひ取つた方があるならば、どうか見殺しにしないで育てゝ呉れるやう。——金指環は、今まで自分ら兩親の指に嵌められてあつ

た婚約當時の指環であるけれども、子供達のために、何も與へる物が無かつたためこれを形見代りに残して置いた。姉の良子には、父の指に嵌めてあつた指環を與へるし、妹の君子には、母の指にあつた指環を與へる。子供達が成人した曉に、若し差し支へがなかつたなら、それが生みの親達の形見の品であることだけを知らせて呉れ。不幸な子供達よ、どうか自分達を恨まずして、すこやかに成人して呉れるやう——』

兩親といふのが、恐らくはこの國へ出稼ぎに來てゐた移民なのであらう。子供達を捨てゝしまつた後、新しい生活を開拓するためどこか別の地方へでも出向いたのか、それとも、將來をはかんで一思ひに自殺でもしてしまつたのかそれはよく分つてゐない。

兎に角世間にはよく有り勝ちな、生活難からの捨兒であつたのだつた。が、そこでかうした遺書の文面からでも分るやうに、拾はれた蓮心の方はよいとして、妹がもう一人捨てられてゐる筈である。その妹といふのどうしたか。

蓮心を連れて來た黒人の話によると、蓮心はその時、前にいつた教會堂の裏手に當る小徑の上を、一人つきり、ヨチ／＼と歩いてゐたのであつて、それを見つけた時には、妹らしいものは見



えなかつたといふ。領事館では早速人を派して調べたのであつたが、するといふと、意外にも次の事實が判明した。

即ち、教會堂の表口、蓮心がウロついてゐた裏手とは反對の側に、空になつた乳母車が一臺置いてあつたのだつた。

蓮心の年頃から判断して見て、その妹といふのが、まだ非常に幼い、或は生れてから間もない赤ん坊だといふことがよく分る。乳母車には、明かにその赤ん坊が寝かされてゐたのである。そして、その赤ん坊と一緒に眠つてゐた蓮心の方は、眼が覺めて見ると母親がそばにゐなかつたのでヨチヨチとそこを離れて歩き出し、たうとう裏の小徑まで迷ひ出してしまつたのである。

——その蓮心が、前に述べたやうにして、そこへ来た黒人に拾はれたと同じ時刻、一方では、別の誰か、教會堂の表口を通りかゝつたのであらう。さうして、乳母車に寝かされてゐた赤ん坊を見付け、そのまゝ拾ひ取つて行つたのであらう。

周圍の情況、前後の關係、大體はさうした推測が成立つ。領事館側でも、やがて同じやうな結論に達したのだつた。

その後、領事館では、かうして捨兒をした兩親の身許を、多少とも手を廻して調べたらしいが、これは一向にハッキリしない。

『そんな譯で、それから私、全く一人ぼつちになつてしまつたのです』話して來た蓮心は、そこで淋しげな微笑を浮べていふのだつた。『幸にして私を引き取つて育てようといふ人があつて、間もなく私は領事館の手を離れたらしいのですけれど、その育ての親もあまり善良な人ではなく、私が十五になつた年の暮れ、その人はブラジルを見限つて日本へ歸り、歸ると一緒に、私を支那人に賣り渡してしまはうと致しました——お妾になれつていふんです。それには、まだ随分といろ／＼のお話もありますけれど、兎に角私には、それがとても恐ろしい嫌なことでしたので、到頭、育ての親の家も逃げ出してしまひ、揚句の果てが、或る偶然な動機からして、かうした尼寺へ入るやうなこゝになつたのです。』

『ちア、いまだに御兩親のことは分らないのですね。——原口といふ苗字はどういふのですか。』  
『育ての親の苗字なんです。生みの親の方は、無論苗字も何も分つてゐません。』  
何の關係もない者が聞いても、相當に興味を惹かれさうな、數奇を極めた身の上なのである。



良作は、一語も漏らすまじとして聞き入つてゐたのであつたが、やがて愈よ指環のことを訊ねて見た。蓮心の話からして、大體の見當はいつてゐる。箕村駒吉が、それを蓮心の手から借りて行つたのではあるまいか。とさういつて念を押して見た。

「え、さうなんです」蓮心は半ば不安げにして答へるのだつた。「實は私、そのことは私からも申上げて、あなたのお考へを話して載かうと思つてゐたんです。箕村さんは、その指環を、是非貸して呉れ、決して紛くなしたりなどはしないからと仰有つて、大切な形見でもございますし随分、困つたやうな氣持がしたのですけれど、つい、お貸ししてしまつたのです。」

「その時に、何か意味のありさうな、或は、約束めいたことをいつては行きませんでしたか。」

「それがです。箕村さんは、その指環を賣してあげさへすればいゝことを探り出して来てやるから、とこんなやうにいはいはれました。——先刻あなたも、私の身の上話について、何か心當りのあるやうなことをいはれましたし、私も、何だか胸がドキドキして來てゐるのです。——ひよつとして、箕村さんにしてもあなたにしても、私の兩親を御存じなのではございませぬか。」

言はず語らず、蓮心も何かがあることを感付いて、眼を輝かせてゐるのであつた。

『さア——』

良作は一寸思案してゐた。

相良銀子が蓮心に似てゐることからして、二人が姉妹であることは大體のところ確からしい。それを、無論打開けてしまつたところで差し支へないが、しかし、駒吉はいつたい、指環を持つて行つてどうするつもりであつたのだらう。そしてまた何のために殺されたのだらう。

『御兩親のことまでは、どうも何ともいへませんけれど——』

いひかけて見て、ひよつと思ひ出すのは、相良老人のことである、相良老人は、銀子を自分の娘だといつてゐる。が、蓮心の話したところによれば、實は本當の親子でなく、彼女等が捨兒にされた時、妹の方を拾つたのが相良老人で、それ以來を老人は、生みの親と少しも違はないやうにして銀子を育て、來た、とさう考へるのが至當であつた。それはそれとして置いてよいのであるが、しかし、さうした銀子に關聯して、あの恐ろしい齒型事件は、どういふ譯で起つたのだらう。

『兩親のことでないとしますと、ではあの妹のことではございませぬか』蓮心も流石にそこへ圖星を指す。



「え、實は——」

「妹が、あの、ゐるのでございますか。」

「をります。」

「ど、どこにです。」

ハツと胸を轟かせて、蓮心が良作の顔を覗き込んだ時、そこへは、蓮心の朋輩らしい一人の尼がやつて来た。

「原口さん、速達ですよ。」

「え！」

「今来たのですよ。こゝへ置いて行きますから——」

會社の事務所でも使ひさうな茶色つばい安封筒に切手をベタ／＼と貼りつけた速達便である。蓮心は、手にとつただけで見ようとせず、そのまゝ前の會話を続けようとする。途端に良作は、「オヤ？」といった。

「一寸、その封筒を見せて下さい。」

「これですか。」

何気なく蓮心が渡して寄こした封筒は、表に、へんにギコチない恰好の文字で、型通り蓮心の宛名が書いてあつただけれど、裏には、同じ筆跡で「箕村駒吉拜」さう書いてあるのだつた。

「蓮心さん、これは可妖しい。」

「どうしてです。」

「これは、箕村からあなた宛てに寄來した手紙のやうですね。——筆蹟が違ひます。そして第一、こゝへ今頃、箕村からの速達の來る譯がありません。」

「……………」

「速達便といへば、こゝは郊外であるとしても、多分、郵便局へこの速達便が托されてから、三時間以内にこゝへ着いたものなんです。今から三時間前といへば、餘裕を充分に見て、今日の正午頃になりますね。——その頃に、箕村は、さうです、その頃に箕村は、こんな手紙なんか出せませんでした。——早くその手紙を讀んで見て下さい。」

良作がサツと顔色を變へてゐるので、蓮心も思はず吊り込まれてしまつたらしい。指先をかす



かに顔はせて封を切つた。さうして、素早く視線を走らせた。

『どんなことが書いてあります。』

『指環のことです。』

『指環を？』

『指環をお返しするから、今夜の八時、丸の内の東京ビルディング入口まで来て欲しい。ゆつくりとお話しの出来る部屋を用意して置くが、なるべく人目にかゝらないやうにして、とさういふ風に書いてあります。』

良作は、ウムといつて頷きながら、

『それであなたは、行くつもりですか。』

『え。』

良作の言葉に、何がなし妙な響きが籠つてゐたので、蓮心は、オド／＼したやうに答へてゐる。

良作は、そこで到頭いつてしまつた。

『蓮心さん、行くのはいゝです。しかし、箕村に會へると思つてはいけませんよ。』

『どういふわけですか。』

『わけは、さうです、何もかもいつてしまひませう。箕村は、昨夜の十二時頃に殺されてしまつたんです。』

『え！』

『今から三時間前に、その箕村が手紙を出せる筈がないといつた意味がお分りでせう。その頃にはもう、すっかり冷たくなつてゐたんですから。』

『それはしかし——』

『しかし何もありません。僕が、この眼で箕村の殺されてゐるのを見て來たのです。——その手紙は、箕村の名前を騙つて寄來したもので、——多分、その手紙を寄來した奴こそ、實に——、恐ろしい奴なんです。——指環は、箕村が殺された時に奪はれてゐます。若し、その指環を、奴が本當に持つて來るやうなら、奴が、犯人に違ひありません。——いや指環を持つてゐなくつても、さうした手紙を寄來しただけで、奴が犯人だといふことは分つてゐます。』

『ど、どうしたらいゝんでせう。』



良作は、じつと腕を拱いて考へ込んだ。さうして、キツパリとした口調でいつた。  
「行くんです。」

「どこへですか。」

「手紙でいつて寄來した通りに、東京ビルディングの入口へ行くんです。あなたがいつて奴の正體を見現すのです。無論、僕はそつとあなたを護衛して行きます。」

思はぬ待伏せ

良作は、それから後蓮心に向つて、彼がこれまで恐怖の齒型事件に關して調べて來た事柄を詳しく話した。

銀子が、蓮心の妹であるらしいといふことも打明けた。

そして最後に、今後八時に東京ビルディングへ行つてからどうするか、いろいろにして相談し合つた。  
「では、いゝですね。あなたも萬事抜かりなくやつて下さい。奴に會つたら、いろいろの詳しい事

情を知つてゐるやうな顔を見ると、奴も用心するでせうし、それにどんな恐ろしいことをするかも知れません。あなたは、何も知らないやうな顔をして先方のいふなりになつてゐるのです。——危ないと思へば、すぐに僕が飛び出して行きますから。」

「承知しました。きつとうまく行き遂げて見せます。私には、そのあとで、妹に會へるのが楽しみです。」

蓮心の身の上話から始まつて、思はず長い時間を費したため、別れしなにさういつて置いて妙雲院の門を出たのが夕方近く——。良作の最初の考へでは、それから一旦角筈ホテルへ取つて返して、この日の出來事を細大洩らさず、銀子に話してやる積りであつたけれども、時間はもう、ぼつぼつ迫つてゐるのであるし、銀子に會へば、自然話しが長くなると考へたので、わざと角筈ホテルの前は素通りにし、その代り、途中から公衆電話を掛けた。

「あなたの吃驚するやうなことが二つも三つも起つてゐます。他所へ廻らねばなりませんから、歸つてから詳しくお話しますけれど……」

さういつて電話を切つて外へ出ると、箕村駒吉が殺されたことについては、無論、銀子も吃驚す



ることであらうけれども、それよりか、銀子に姉のあるといふことの方が、餘計に吃驚するだらうなどと考へた。それにしても、今までは眞實の父親だと思つてゐた相良老人が、育ての親であると思つたなら、これは或は彼女を悲しませることも知れない。打明けた方がよいものか、それとも、そのことだけは何とかして胡魔化して置いた方がよいものか。一寸思案にもてあましながら、いつの間にかオレノ食堂間近へ來てゐる。

あたりは、だん／＼に夜店が出來かゝつて來てゐる頃で、人の流れも相當に激しい。表通りから、オレノ食堂のある横町へ曲つて、ものゝ七八間も行つたかと思ふと、その時、

「旦那！」

横合から、さういつて呼びかける者があつた。

前に、銀子を陰匿つてゐて呉れた豊吉老人である。

「やあ。」

「今、お歸りですかい。」

「とつつあんは？」

「あつしですかい。あつしは今、食堂へ行つて腹を拵らへて來たところですがね、旦那、氣を付けなくつちアいけませんぜ。」

「何故だい。」

「今、あつしがひよつと氣がついて來たんです。いゝとここでお目にかゝれたつていふ譯ですが、オレノ食堂の前に、變な奴が二三人ゐます。あつしと同じやうに、汚ねえ服装をしてゐますが、見ると、妙にかう、食堂の中を覗いてゐたり、それから、あつちこつち、キヨロ／＼見廻してゐるやがるんです。旦那に何か恨みでもある奴があつて、そいつらが押しかけて來てゐるんぢやねえですかね。」

「恨みなんか受ける筈がないのだがね。」

「それならいゝんですが、兎も角、氣をつけて行つた方がようござんす。」

良作は、あと二時間と経たないうちに、殺人魔の正體を掴むことが出来るのだと、そればかりを一心に考へてゐたので、豊吉老人が折角かういつて呉れたのにも拘らず、少しも氣が付かなかつたのである。老人と別れて、ぢきにオレノ食堂の前までやつて來ると、



「オイ！」

突然に肩へ手をかけられた。

「君は、中牟田良作君だね。」

「さうだ。君はしかし誰だね？」

振向いて見ると、どこかで見たやうな氣もするが、すぐに思ひ出せない顔である。豊吉老人がいつた通り、確かに小汚い労働者風の服装をしてゐて、言葉だけがへんに横柄な男であつた。

「中牟田なら、待つてゐたのだ。一緒に一寸行つて貰はう。」

「どこへ行くんだね。」

「代々幡署だ。逃げるよと君、爲にならんよ。」

別に、弱い筋はなかつたけれど、ドキリとしたことには、それが代々幡署から来て、じつと良作の歸宅を待つてゐた刑事なのだつた。

「君は今日、牛込の方の殺人事件、つまり、箕村駒吉殺しの現場へ行き合せてゐたのぢやなかつたかね。」

「行つてゐたよ。」

「それでしかし、警察から係りの者が現場へ駆け付けた時、君は既にどこかへ身を晦ましてゐたね。」

「晦ました譯ぢやない、急に思ひ付いたことがあつたので、すぐと他所へ廻つたのだ。」

「さうか。よろしい。兎も角も辯明はあとで聞くとして、一應本署へ行つて貰はう。——逃げようとしても、こゝへは僕一人が來てゐる譯ではないのだからね。」

刑事が、顎をしゃくるやうにして、ぐるりとそこを見廻したので、良作も漸く氣が付いた。同じやうに、眼付きの鋭い男達が、確かに四五人はそこにゐる。良作の態度を、キツと見据ゑて、いつでも飛びかゝつて來れるやうな氣勢を見せてゐるのであつた。

いふまでもなく、代々幡署では、中牟田良作にも怪しいところが多分にあると睨んでゐた。加ふるに、數日前、島崎刑事が箕村駒吉を同じ新宿から代々幡署へ同行しようとした時、駒吉のために計られて、残念にも遁走されたことがあつた。そのために、今日は、不必要なくらゐるに大袈裟な準備をして、良作を連れに來たのであつた。



事情を知らない當局としては、これも止むを得ないことであつたらうけれども、良作は、思はず舌打ちをしてしまった。

『行けといふなら行つてもいいが、今は、一寸急がしいのだ。あとで、僕の方から出頭してはいけないのかね。』

『殺人現場からふいになくなったやうな君のことだ。また、なくなるといけなから、すぐに行つて貰はうね。』

『さうか。で、行つても長くはゐられないよ。せいぐ二十分』

『それで済むか済まないか、行つて見れば分るだらう。』

『二十分以内に、歸して貰はないと困るんだ。若し、向うであまり長くなると、大變なことになつてしまふ。』

『どうしてだね。』

『今夜八時に、事件の眞犯人が顔を出すのだ。』

良作は、本氣になつてさういつただけけれど、最初から、或る先入主に支配されてゐたこの皮肉

な刑事には、これが途方もなく面白い冗談のやうに聞えたらしい。

『ハツハ、、、』と大きな口を開いて笑つた。

『なか／＼面白いことをいふね。』

『ナニ、面白い！』良作も、たうとうムツとしていつた。

『面白いよ。逃げ口上にしちあズバ抜けてゐる。ま、兎に角、一緒に行つて貰はう。』

『逃げ口上ではない。』

『ハツハ、、、さうかい。逃げ口上でないとなれば、引かれ者の小唄とでもいふところかな。』

『ナ、ナニ？』

『怒るナ。かうやつて多勢ゐるのだから、怒つたところで仕方があるまい。さア、手を貸してやらう。出掛け給へ。』

腕を伸ばして、良作の手首を捕へようとする、良作は強くそれを振り拂つた。同時に、刑事の片一方の手が、ピシーリと音を立て、良作の頬へ飛んで來た。

『やつたナ。』



『抵抗するからだ。』

『ウヌ？』胸の奥底に、こゝで輕はずみなことをしてはいけないといふ考へがチラリくと見えてはるた。が、荒々しい憤怒が全身を火のやうに駆け廻るのをどうしようもなかつた。

良作が、刑事に向つてその巨大な恰幅をキツと向け直し、胸倉を取らうとして手を伸ばした時には、ぐるりにゐた勞働者風の刑事達が、一度に、バツと土を蹴つて飛びかゝつて來た時であつた。良作を、真中に包んだ刑事の固まりが、見る／＼オレノ食堂の入口までよろけて行つて、バリ／＼と音を立てゝその硝子戸をぶち毀してしまつた。忽ちまた、刑事が蝗のやうに飛び散つて、それと一緒に、一人の刑事の手繰り出した捕縄が、生物のやうに良作の袖に絡みついて行つた。

『畜生！』

良作は、齒を喰ひ縛つて叫んだけれどもどうすることも出来ない。近づいて來るのを一人二人、ドタンバタンと投げ飛ばしてゐるうちに、だん／＼身動きが出来なくなつてしまつた。

『駄目だ。八時には、眞犯人が出る！』

『出鱈目をいへ。——君、車だ、タクシーを一つ捉まへて呉れ給へ』刑事は同僚に呼びかけた。

『離せ、抵抗はしない。いふことがある。』

『いふことは、本署へ行つてからでいゝ。タクシーを早く、君頼むぞ。』

十五分の後、良作は、到頭、代々幡署まで連れて行かれた。さうして、署へ着くも一緒に、いきなり、薄暗い留置所へ投げ込まれた。

『貴様、こゝで二三時間穏和しくしてゐろ。氣が鎮まつてからいひたいだけのことを聞いてやる。』  
『頼む。そんなことをいはないで、すぐに話を聞いて呉れ。八時だ。八時に、東京ビルディングの入口へ、眞犯人がやつて來るのだ！』

『くだい！ 同じことは、幾度いつたつて同じことだ。ちつとの間靜かにしてゐろ！』

刑事はさういひ捨てたまゝ、愉快さうにその廊下を立去つて行く。間の悪い時には仕方がない、その時代々幡署には、流石に話しの分る筈の須田沼司法主任と島崎刑事とが、恰度警視廳へ打合せのために向いてゐて、事件に關する直接の主腦者はゐなかつた。

『出して呉れえ、出して呉れえ！』

留置所から聞えて來る良作の叫び聲を耳にしながら、刑事の一人は、それでも早速に電話を掛け



て、警視廳にゐる須田沼司法主任を呼び出したのだつた。  
 「ハア、今、漸く中牟田を連れて来たところなんです。確かに怪しい奴です。同行を拒みましたが、無理矢理に連れて来ようとはしますと、なか／＼腕力の強い奴で、激しい抵抗を致しました。——さうなんです。今、留置所の方へ入れてあるんです。妙なことをいつてね。今夜の八時に、眞犯人が東京驛とかどことかへ来るつていつてゐますが、勿論出鱈目です。ハア、承知しました。お歸りになるまでそのまゝに置きます。——九時頃ですつて、さうですか、その頃にお歸りなら、奴もすつかり觀念して、穏和しくなつてゐるでせう——」

島 崎 刑 事

留置所は、それほど嚴重な作りではないけれども、ドアにはガツチリと錠が下ろしてあるし、窓には鐵の格子が植ゑてある。そこへ入れられてから、タップリ一時間は過ぎてしまつた。

「出して呉れえ、出して呉れえ！」

その間、咽喉から血の出るほどにも叫び續けた良作は、次第に望みを失つて來た。

蓮心に會見を申込んで來た奴は何者なのか、兎にも角にも、其奴こそ駒吉殺しの眞犯人、その眞犯人が夜の八時には東京ビルディングの入口へ來るのだ。腕時計を見ると、もう七時半にならうとしてゐる。八時までは剩すところ三十分しかない。その三十分の間にはどうにでもして東京ビルディングへ駆け付けたい。自分がその時刻に先方へ行き着けなかつたが最後、折角あゝして蓮心と打合せて置いたことは無駄になる。第一、それでは永久に眞犯人の正體を看破れぬことになるのではないか……

三分、四分、時間は刻々として過ぎて行く。看視の巡查が、留置所の窓から見るところにゐるけれども良作がいくら頼んだところで出しては呉れない。二度ばかり窓口まで近づいて來て、靜かにしろといつて怒鳴つたまゝ、冷やかに見張りを續けてゐる。良作は、人力を以てしては、も早如何ともすることが出來ぬやうに思つた。只、奇蹟だけを待ち望むよりほかなくなつてしまつた。

——午後七時三十五分。

代々幡署へひよつくりと歸つて來たのが島崎刑事である。

「やあ。」



前に良作を引つ張つて来た刑事の一人は、早速に島崎刑事を迎へていつた。

『案外早かつたぢやないか。さつきの電話だと、九時頃に歸るとかいふ話だつたが。』

『うん』島崎刑事は、軽く頷きながら、叫び續けてゐる良作の聲を聞きつけたらしく、その方へ一寸耳を澄まして、『打合せが長引いたのでね、主任の方はまだすぐには歸つて来られさうもない。僕だけ一足先に歸つたんだが、——何だい、留置所の方で、無暗に吠え立てゝゐる奴があるぢやないか。』

『あれだよ。主任にも電話を掛けて話して置いたが、例の中牟田つて奴を連れて来てあるんだ。往生際の悪い奴で、さつきからあゝして暴れてゐるのだ。』

『何か泥でも吐いたかね。』

『暴れるだけ暴れさして置いて、それから調べて見たらと思つてゐるよ。奴はネ、何しろ出鱈目をいつてゐる仕方がない。』

『どんなことをいつてゐるんだ。』

『今夜の八時に眞犯人が出るから、そいつを捕まへに行きたいつていふやうなことをいつてゐるんだ。』

だ。

『こゝを出して貰ひたいための口實だね。』

『多分さうだらう。君一つ行つて會つて見るか。』

島崎刑事は一寸思案して、それから留置所へ出掛けて行つた。

良作は、窓の鐵格子に獅噛みついて、今は噎れてヒュー〜といふやうな聲を出しながら、相變らず懸命に叫んでゐる。

こちらから、黙つてその様子を眺めてゐた島崎刑事は、ふいに同僚の方を振り向いた。

『君！』

『なんだ！』

『あの男は、案外正直さうな男ぢやないか。』

『さう見えるかね。』

『うん、何だかそんなやうな氣がするよ。まア待つて居給へ、僕が一つ訊いて見よう。』

所謂、刑事の第六感といふのであらう。島崎刑事は、この時、良作が必死になつてそこから出し



て貰ひたがつてゐる有様に、何かしら眞剣なものを感じたのだつた。

良作は、島崎刑事が窓口へ近づいたので、

『お願ひだ。亂暴はせん。君、出して呉れ！』

といつて哀願した。

『出してやらんこともない』刑事は靜かに答へた。『君はしかし、何か特別に言ひ度いことでもあるのかね。』

『あと、十五分ばかりしかない。八時だ。八時に、眞犯人が東京ビルディングの入口へ来るんだ。』

『眞犯人が来るんだつて、ふん、どうしてだい、どうして君に、そんなことが分つてるんだい。』

『分ることがあるから分つてるんだ。僕は今日、原口蓮心に會つて來た。そして、今の事實を知つて來た。』

『原口蓮心といへば、さうか、前の都築殺しの時に、最初に死體を發見した尼さんだね。——それに會つて來たといふのは、なるほど、まんざらの出鱈目でもなささうだナ。』

『出鱈目ぢアない！ 證據には、さうだ、これを見て呉れたまへ。』

良作は、もつと前に氣がついて、それを見せればよかつたかも知れない。彼はポケットを探つて、例の蓮心宛てに寄來された手紙を取り出し、窓越しに刑事の手へ押しつけた。

『箕村の名を騙つてあるんだ。——もう時間がないのだから、早く読んで見て呉れ給へ。』

島崎刑事は、文面を一通り讀み終はると、封筒の表をじつと見てゐた。さうして、急に同僚の方を振り向いた。

『これア君、頗る妙な手紙だぜ！』

『え、どうして？』

『ほらね、スタンプの時間が、今日の正午から一時までの間になつてゐる。——箕村の名前にはなつてゐるが、奴の殺されたのは昨夜のことだし、だとすればどうも變ぢアないか。』

素人の良作ですが、既に氣付いてゐた點なのである。

『といふと、矢張りこの男がいつてゐるやうに、誰か、箕村の名前を騙つて寄來した手紙といふことになるんかね。』

『無論、箕村はこの手紙を殺される前に書いて置いた、さうして、今日は誰か、これを局へ持つて



行つて速達にした、とかう考へられないこともないけれども、兎に角妙な手紙なんだし——』  
同僚の手前を氣兼ねしてか、島崎刑事はかういつても一寸思案が定まらぬ様子、暫らく顎へ手を  
やつて考へてゐるが、そのうちに決然たる顔色になつた。

『君、僕は行つて来るぞ。』

『どこへだ、東京ビルディングへか。』

『さうだ、間に合はないかも知れないが、兎に角僕は行つて見る。』

『無駄だらうがナ。』

『いや、さうではない。これだけの手紙があるからには、兎も角、行つて見るだけの値打ちはある  
よ。』

時間が、この時はもう、八時に七分前になつてゐるのである。

島崎刑事は、良作をも一緒に連れて行きたい風であつたが、溢つてゐる同僚の手前それだけはさ  
すが遠慮した。そしてすぐと署の女關へ走り出し、備へつけのオートバイへ乗つて、疾風の如く駆  
け出して行つた。

良作を連れて行かなかつたといふことが、恐らくは刑事の、最も大きな不幸を招く基となつたの  
だつた。

### 斷末魔の叫び

午後八時四十五分。

丸の内といふところは、晝の間はさすが帝都の中心だけあつて、非常に活氣を呈したところであ  
るが、夜になると、がらり様子の變つてしまふところである、日比谷寄りの割合に小さな建物がゴ  
タゴタと並んで、その間にクラブだのレストランなどのあるところや、或は又省線電車に沿つてゐ  
る部分や、さういふ場所は兎も角として、同じ丸の内でも、それがいかにも丸の内らしい特色を發  
揮した大ビルディング街の方へ這入つて見ると、夜は四邊が死んだやうに静かであつて、自動車だ  
けが、時折建物の角からヘッドライトを輝かし、スーツと走つて來て通り過ぎてしまふ。人通りな  
どは、殆んどなくなつてしまふのである。  
『どうもあんまり面白くない芝居だつたね。』



「ほんたうにさ。あんな芝居よりは、これから銀座へでもブラ〜歩いて行つて、カフェーでも廻つた方が面白さうだよ。」

東京ビルディングといふのは、お濠端の帝劇と東京驛との、恰度中間あたりにある建物であるが、そこは前いつたやうにへんに物淋しいところである。その夜、多分帝劇を見物した歸りで、もあらう、ビルディングのすぐ近くを、二人の青年紳士が、こんな風に話し合ひながら、ブラリ〜と通りかゝつたのだつた。

そこは、折から道路の舗装工事をしかけてあつて、そのせるか自動車さへも姿を見せない。二人の紳士は、ステッキを打ち振り〜、間もなく東京ビルディング前を行き過ぎてしまはうとしたのであつたが、その時、言ひ合せたやうに足を停めて、キツと一つところへ目をやつた。

東京ビルディングは、三菱第何號館とかいふ赤煉瓦建ての建物と隣り合つてゐて、その二つの建物の間には、幅三尺位の路地が出来てゐる。今、その路地の通りへ向いた入口からして、何か、ズル、ズル、と這ひ出して來たのだつた。

「何だい、ありア——」

「人間だぞ、確かに——」

いつてゐるうちに、這ひ出して來た人間は、二人の紳士の姿を認めたのであらう。「た、助けて呉れえ！」振り絞るやうにさう叫んで、片手を確乎りと胸へ押しあて、苦しさに起き上がった。さうして、ヨロ〜と舗道の真中までやつて來て、また、バタリとそこへ倒れてしまつた。

「病人が知ら。」

「いや、病人ぢやない。怪我人らしいぞ。」

半分は氣味悪る〜、二人は倒れた男の傍へ近づいて、肩へそつと手をかけた。

「君、君、どうしたんだ。」

「や、やられた！」

「ナニ、やられたつて！」

「け、警視廳へ連れて行つて下さい。……ば、僕は、代々幡署の、島——島崎です……」

意外にも、島崎刑事だつたのである。見ると、刑事の胸を押へた手はべつとりと血に塗れてゐて、胸を深く刺し貫ぬかれてゐるらしい。胸ばかりでなく、顔も物凄く血で彩られてゐるし、腕や



肩のあたり、いたるところ負傷してゐるのであつた。

「警視廳へ、は、早く……。」

顔の筋肉を苦しうに歪めて、刑事は聲も絶えぬにかう叫ぶ。二人の紳士は、狼狽して、刑事の身體を抱き上げようとしたのであるが、この時刑事の方では張り詰めてゐた氣が急にがつくり緩んだと見え、抱き起しても抱き起しても、バタリと前へのめつてしまふ。

「オイ、どうする！ これぢや、とても警視廳までは連れて行けないぞ。」

「仕方がない。向うから来て貰ふやうに、僕が行つて知らせよう！」

紳士の一人は、どつちへ行つたらいいのか戸迷ひして、それでもちきにそこを駆け出して行き、ほんの暫らくして引返して来た。

「どうした。」

「知らせて来た。巡回の警官に會つたので、事情を話して向ふへ電話を掛けて呉れるやうに頼んで来た。」

「すぐ来て呉れるだらうな。見ろ、この男はもう丸つきり氣を失ひさうになつてゐる。息のあるう

ちに來て呉れないと間に合はないぞ。」

痛ましく傷ついた刑事の姿を見下ろして、二人がやきもきと氣を揉んでゐると、一分ばかりして、最初には、巡回の警官が駆けつけて来た。更に四五分ほど経つて、警官からの電話を受け取つた警視廳から、野口捜査課長以下数名の係官が、自動車へ珠數なりになつて乗り込んで来た。

係官のうちには、恰度その時警視廳へ來てゐて、もう少しで代々幡署の方へ歸らうとしてゐた須田沼司法主任も混じつてゐる。主任は、自動車がそこへ停まるのと一緒、ヒラリと舗道へ跳び降りた。さうして、一同を迎へるために近づいて來た、さつきの警官の肩をぎゅつと押へた。

「君、君だね。さつき電話で知らせて寄來したのは。」

「はい、さうです。」

「被害者は、ど、どんな工合だ。確か、代々幡署の島崎だといつたやうだが——」

「いひました。あそこにいる人達が、被害者の口から直接にさう聞いたんださうです。——被害者は、あそこに倒れてゐます。」

どう聞き傳へて集まつて來たのか、そこには十數人の野次馬がやつて來てゐる。司法主任は苛々



しさうに、それを掻き分けて、島崎刑事の倒れてゐるところへ近づいた。

『ミ、水を呉れ！ く、苦しい。ウム、ウム、ウム——』

出血が甚しいため、刑事はこの時、もう斷末魔の苦しみに喘いでゐる。何か譯の分らない叫び聲を挙げたかと思へば、齒をギリ／＼と噛み鳴らして、起き上らうとするのであらう、その鋪道をベリ／＼と爪で引つ掻くのだった。

眞蒼な顔は、半面が血に塗れてゐて、額から脂汗が瀧のやうに流れ落ちてゐる。

司法主任は、その無残な顔を一目見ると、バツタリ膝をついて刑事を抱いた。

『島崎、島崎！ しつかりしろ！』

『く、くるしい！』

『俺だ、須田沼だ。氣を確かにしろ！』

刑事の耳へは、苦しみのうちにも、かすかに須田沼といふ言葉が通じたらしい。臉をカツキリと見開いて、唸るやうに叫んだ。

『お、お、主任！』

『氣が付いたか、島崎！ 傷は浅い、しつかりしろ！』

『残念です。主任、残念です……』

『残念だつて？ ウム、どうした。いひたいことがあるなら、早くいへ！』

『……』

刑事は、唇をヒク／＼と顫らせて、頻りに何事か訴へようとするのであつたが、口は乾き舌はだんだんに硬張つて行くのであらう。容易に思ふことが喋れない。咽喉の奥をぜい／＼と鳴らし、片手を宙に蹴かせながら、それでも漸く次のやうにいつた。

『あ、あそこだ……東京ビルディングだ……原口……原口蓮心……』

『え、ナニ、原口蓮心？ 原口蓮心がどうしたといふのだ？』

『……四階の十一號……齒型事件の眞犯人……』

『ナ、ナニ、齒型事件の眞犯人だつて？』

『……見た、奴の、奴の顔を見た……』

切れ／＼の會話を交してゐる間に、刻一刻氣が遠のいて行くものと見える。刑事はこの時、臉を



だらりと垂れてしまつて、そのまゝ黙り込んでしまはうとする。

『オイ、どうした、島崎、氣を確かに持つて！』

司法主任は耳へ口を寄せて激しくいふ。

『奴は、逃げようとした。そ、その顔を、僕が見た……』

『ウム、それで、奴の正體は何だつた？』

『……』

『いへ、早くいへ、島崎、早く奴の正體をいへ！』

『奴は……奴の正體は、あ、あの……』

何たる無残、何たる悲壯！

島崎刑事は、最後の息の根を振り絞つて、猶も言葉を續けようとする、だが、その言葉が、口の前まで出かゝつてゐながら、どうしても言葉にならぬのだつた。自分自身、どんなにか齒痒いことであつたのだらう。刑事は、片手の指を口のうちへ突つ込み、ガリガリと舌を掻き掻つた。さうして、泣くやうな呻くやうな、どうにも譯の分らぬ言葉を發したかと思ふと、ふいに大きく吐息を洩

らした。

『オ、オイ、島崎！』

司法主任は、抱いてゐた刑事の肩を揺すぶりながら叫びかけたが、もうその聲は聞えぬらしい。斷末魔なのである。

刑事は、洩らした息を、スツツと深く引いたあと、そのまゝいつまで経つても息を吐き出さなくなつた。四肢をピリ／＼と痙攣させ、咽喉のあたりで、ゴクリツと鈍い音を一つさせて、それつきり身體を動かさなくなつた。刑事は、あらん限りの命を悶えて、ガツクリと首を垂れてしまつたのだつた。

### 十一 號 室

須田沼司法主任は、一時の間殆んど放心の體に陥入つてしまつた。

無理もない。彼は島崎刑事がどうしてこんなところへ來てゐたのか、その時はそれさへ譯が分らずにゐるのである。



それから後間もなく、彼は自分の署へ電話をかけて、島崎刑事の悲痛な最後を知らせると同時にこれには向ふでも驚いたのであらう。署員からの狼狽し切つた報告によつて、初めて詳しい事情を知つた。さうして、署員のやり方が悪かつたばかりに、言ひ換へれば署員が中牟田良作の言葉を信じなかつたばかりに自分の片腕とも頼む島崎刑事を、ムザ／＼と殺してしまつたことを知つた。結果に於て、中牟田良作は今度こそ留置所から解放された。そして、即刻事件の起つた東京ビルディングまで来るやうにと、須田沼主任からの命令が傳へられた。

——その良作が現場へやつて来るよりも前、東京ビルディング内ではどういふことが發見されてゐたか。

讀者諸君は、無論もう御推察になつてをられるであらう。島崎刑事が息を引取つた後、最初にそのことを、言ひ出したのは野口捜査課長であつた。

『四階の十一號室へ行つて見るんだ。きつと何か有るに違ひない！』

島崎刑事の死體は、二三人の者が付き添つて番をしてゐることになり、その他の者は、ゾロ／＼と課長のあとをついて行つた。

島崎刑事が這ひ出して來た路地へ踏み込んで行くと、そこらあたりに、血の滴りが點々として見える。ビルディングの裏側に鐵製の非常梯子があつて、刑事の一人が懐中電燈で照らして見ると、その梯子にもずつと血の痕が見えるのだつた。

『ウム、こゝを降りて來たんだナ』捜査課長は頷いた。さうして、ビルディングの地階に當たつてぼんやりと燈火の射してゐる窓を指差し、部下の一人に向つていつた。『君、君はあそこへ行つて見給へ。ビルディングの留守居番がゐるやうだから、様子を詳しく訊ねて來るのだ。僕らは、この裏梯子から登つて行くから。』

吩咐けられた刑事は、すぐに留守居番の部屋へ行く。課長は、足もとを注意しだん／＼に上へ登つて行つたが、やがて四階の張出しになつた床へ達すると、『案の定だ！』といつて呟いた。

そこには、非常梯子へ出るやうになつた硝子戸が一枚置いてゐて、その一枚は、硝子が滅茶々に破られてゐる。戸のそばに、靴の泥を拭ふマットが一枚置いてあつたが、それも端の方が歪んで闕の上へ乗りかゝつてゐるし、島崎刑事のものらしい薄鼠色のソフトが、一方だけ押し開かれてゐる戸の向ふに、投げ捨てられたやうに落ちてゐる。明かにそこで、格闘が演ぜられたのだつた。



代々幡署へ電話をかけて、漸くにして事情を知つた須田沼司法主任が、息を切らしながら、一同のあとを追ひかけて来たのは、捜査課長が四階入口から始まつて、廊下や各部屋の戸締りなどを注意しいく、恰度、十一號といふ番號札のかゝつた部屋の前まで来た時である。

司法主任は、課長に追ひすがりながら、今聞いて来たことを逐一話した。課長は、身動きもせず

に耳を傾けた。

『さうか。ぢア、この部屋で、犯人と原口蓮心が會つたのだナ。』

『だらうと思ひます。兎も角、中を調べて見ませう。』

ドアには錠がかゝつてゐなかつたのを幸ひ、入口で電燈のスイッチを捻つて中へ這入ると、そこ

は見ても無残な有様である。

大抵は豫想してゐたことであつたけれども、そこには、原口蓮心が、俯伏せになつて倒れてゐる。蓮心は、地味な鼠色のコートを、僧服の上に纏つてゐたが、そのコートは二ヶ所ばかり切り裂かれてゐて、その裂け口の附近にどす黒く血潮が滲み出してゐた。青々と刺られた頭をぐつと伸ばして、ペタリと頬を床につけてゐる、その上側になつた耳の附根を見ると、又しても奇妙な印しがついて

ゐるのだつた。

例の齒型である。

今までと變つて、そこには齒型だけ残されてゐて、血を吸ひ取つた痕がないのであつたが、恐らくこれは、犯人がゆるくとさうしたことをしてゐる暇がなく、血を吸ひ取らうとしただけで、途中で止めてしまつたのであらう。

捜査課長も司法主任も、思はず顔を見合せてしまつた。

『課長、留守居番の男を連れて来ました。名前は、春山重吉といふ男です。』

部屋の入口へは、その時かういつて、一人の老人が連れられて来た。

『よし、こゝへ入れろ!』

課長はいつた。さうして、おづ／＼と室の中へ這入つて来る老人を、ぢろりと鋭く眺めやつた。

『私は、何んにも存じません。——實は、毎晩早く寢てしまひますので、今の今まで、ぐつすりと

眠り込んでをりました。』

何事も訊かぬ先きから、かういつてゐる老人の態度には、只もの恐ろしさに脅え切つてゐて、微







こに起つた事柄だけは、大體筋道が分つたやうな氣がするぢやないか。」

『さうですナ』司法主任は、蓮心の死體を調べてゐる係官の方を一寸見やつて、考へ深く口を開いた。『私は何しろ残念です。死んだ島崎君が、あの間に言ひ残した言葉からして見ると、島崎君は確かに眞犯人の顔を見届けてゐたのですからね。』

『全くだ。僕もそのことは、考へて見ると残念でたまらん。死んだ當人にして見ても、眞犯人の名を告げられないで、そのまま息を引取つたのが、何ともいへず口惜しかつたらう。——僕の思ふには、島崎君は犯人の顔を見たために、あゝして殺されてしまつたのだね。』

『無論さうでせう。ぢきに中牟田良作といふ男が來ますから、その男に訊けば、もう少し詳しいことが分るでせうけれど、兎に角島崎君はこゝへやつて來ると、ぢきに犯人と原口蓮心とがこの十一號室で會見してゐることを探り出し、そつと、この部屋へ忍び寄つたものに違ひありません。電話で聞いたところによると、島崎君が向ふを出たのは、もうぼつ／＼八時になる頃だつたさうです。だから、彼が來た時には、恐らく八時を五六分あまりも過ぎてゐたのでせう。その時はもう、犯人が原口蓮心を殺してゐたのかも知れません。』

『さうだね。或は、さういふことにもなるんだらう。——島崎君が來た時には、こゝの十一號室へ二人が這入つてゐて、そのために、部屋の電燈なども點けられてゐた。島崎君は、その明るみを目あてにして、多分、裏梯子からこゝへ登つて來たのだ。——被害者の頸筋に、今度は齒型だけがついてゐて、血を吸ひ取つた痕のないところを見ると、犯人の方では、島崎刑事のやつて來たのに氣付いたため、狼狽して、部屋を飛び出したのかも知れない。——兎に角二人は、裏梯子へ出る戸口のところで格闘を始め、そこで島崎君があれだけの傷を負つてしまつたのだ。』

島崎刑事が倒れたのを見澄まして、犯人が逃げ去つてしまつたあと、刑事は、一刻も早く警視廳へ急を告げようとして、長い／＼鐵の梯子を、よろめきながら下つたらしい。犯人のためにやられた傷は、あの通り、ところ嫌はずにつけられてゐたし、出血も随分甚しかつた。四階から地上まで降りて、更に表通りまで這ひ出して行くのは、餘程氣丈なものでなくては出來さうにない。須田沼司法主任は、痛ましい部下の最後を思ひ出して、急に暗然たる面貌になつたが、やがて氣を取り直して、現場の檢證を手傳ひ始めた。

蓮心の穿いてゐた草履が片一方だけ、部屋の片隅に投げ飛ばされてゐたし、これも明かに蓮心の



所持品である、小さな茶色の手提袋が、古椅子の脚にひつかゝつて落ちてゐたが、いくら探しても犯人の遺留品らしいものは何もない。司法主任は、生前の島崎刑事が、犯人の足跡を氣にしてゐたことを思ひ出して、どこかにそれらしいものはないかと思つて探したが、床が固いためどこにもさうした痕がなかつた。

犯人のやり方が、少くとも蓮心を殺すためには細心の用意を備へて來たものと見え、實に巧妙を極めてゐるのである。

島崎刑事が、確かに犯人の顔を見届けてゐながら、遂にその名前を告げ得られずして死んだことは、捜査上、何といふ大きな打撃であらう。係官達は、繰返し／＼そのことをいつて、頻りに残念がつてゐたのであるが、一方、事件發生と同時に、ビルディング附近へ張られた非常線からは、それらしい怪しい者がまだ一人も見付からないといふ報告があつた。

あれだけのひどい負傷をした島崎刑事が、それでも息のあるうちに係官達が出張して來たのであるから、その時はまだ、犯人が現場を逃走してからいくらかも時間は経つてゐない。その僅かの時間の喰ひ違ひで、到頭大魚を逸した一同はギリギリと齒を喰ひ縛つて口惜しがつてゐる。

調べるだけのことは、もう大體調べ上げてしまつた時、そこへは中牟田良作が、漸くにしてやつて來た。

一眼でその場の様子を見てしまつた良作は、唇をキツと結んだまゝ。黙々として部屋へ這入つた。さうして、蓮心の死顔を暫らくじつと眺めてゐて、初めて捜査課長と須田沼司法主任の方を向いた。

主任は、言ひ憎さうにして、署員のやり損ひを詫び、それから追々に、良作がどうして今夜のことを豫知してゐたのか訊ねて行つた。

「箕村が殺されたのを發見してからのことです。僕は第一に、妙雲院を訪ねて行きました——」

良作は、例の日記の斷片があつたことから話し始めて、妙雲院で蓮心と會つて話してゐるところへ、問題の速達便が來たまでを話した。そしてしかし、その中で、蓮心が相良銀子の實の姉でありそれに關して何かの祕密があるらしいことを、わざとこの時は話さなかつた。

凡てを、落ちなく話した方が、捜査上都合のいゝことは知つてゐるのではある。だが、その祕密こそは、相良銀子にとつて、どんな迷惑を及ぼすものかも知れない。銀子を、警察の手へ渡さない



やうに、ひそかに隠匿つてもある現在だし、一通りは、銀子なり、或はその父親相良老人に相談して見た上で、初めて事を警察へ知らせせてやつても、決して遅いことはない、そんな風に思案したのであつた。

後になつて考へて見ると、良作がかうして全部の事情を話さなかつたのは、一面に於いて事件の解決を長びかせ、従つて、良作自身も、もろくの危険に身を曝す、その原因となつたものなのである。

良作はしかし、腹の中で次のやうに考へてはゐたのであつた。

『さうだ、兎に角俺は、他の誰よりも、事件の真相を發くために、一番重い責任を背負つてゐるのだ。あの手紙がきたとはいへ、蓮心をこの危険な場所へ案内したのは俺だ。やり方によつては、蓮心を殺さないですますことが出来たかも知れない。——蓮心が殺されたのは、恐らくはあの指環いやく、さうではない。指環に關しての彼女の過去、引いては、相良銀子の姉であつたといふことが、禍ひの基となつたのだ。箕村が殺されたのも、その秘密を彼が探り知つたため、犯人に警戒された揚句であらうし、して見れば、この間の事情こそ、迂濶には口外出来ないものだ。寧ろ、そ

の中心點については、何も知らぬやうな顔をしてゐて、犯人を油断させた方がいゝかも知れない。

——兎に角俺は、獨力ででも、殺人魔の首つ骨を押へつけてやるぞ！』  
良作は、武者震ひのやうなものを身内に感じて、固く決心したのであつた。

銃

聲

恐るべき怪殺人魔！

事件の最初から數へて見て、この恐るべき殺人魔の兇手に斃れたものは、いつたいもう、幾人になつてゐるのであらうか。

第一の犠牲者都築青年から始まつて、駒吉に至るまでが三人である。これに、原口蓮心と島崎刑事との二人を加へると、都合五人の犠牲者があつたことになる。

島崎刑事に最後の一撃を加へた後、恐らく犯人は、この東京といふ大都會の喧噪のうちに紛れ込み、一方には中牟田良作、他方には警察官達が、齒を噛み鳴らし、地團駄踏んで口惜しがつてゐる有様を、冷たく笑ひながら眺めてゐることであらう。



——その夜、東京ビルディングでの現場 検証が終つてから、中牟田良作は、係官達と一緒に一旦警視廳まで引き揚げた。さうしてそこでは、前に彼が箕村駒吉の殺されてゐたのを発見した時の顛末について、差支へのないだけを陳述し、更にまた、箕村駒吉がどういふ男であるか、それについて次のやうな答辯をした。

『箕村は、僕が田舎の中學校時代の友人なのです。中學卒業後彼が東京で、クリスチャンになり、その後また、教會の牧師にさへなつたといふことは聞いてゐましたが、僕は田舎にずっと引込んでゐて、文通なども殆んどせず、従つて彼に關する詳しいことは何も知らずにゐりました。一度、箕村が自殺しかけたといふやうな記事が新聞に出たことがあり、その時は僕も、かなり驚かされたものでしたが、その原因については、何一つ知つてをりません。——長い間音信不通であつた我々が最近に於て、どうして繁々と交際ふやうになつたかといへば、それは僕が田舎を見限つて上京した時、銀座で偶然に彼と出會つてからのことなのです。交際はしてゐながらも、箕村は彼自身の境遇については殆んど語つて呉れたことがなく、どこか變つた暮し方をしてゐることだけは、僕にも薄々と想像出來たのですが、その他のことは、あまりよく分りませんでした。彼は、無論もう教會

などには出入しなくなつてをり、そればかりか、どうしてか非常な大金を所持してゐて、金のあるに任せ、毎日酒びたりになつて暮してゐるやうな有様でした。そして、その金のことなどについても、僕が一寸でも訊ねると、非常に厭な顔をしたものです。前の自殺事件についても、そのことだけは訊かないで呉れ、常にそんな風についてをりました。』

係官側、殊に野口捜査課長であるとか、須田沼司法主任であるとかは、箕村駒吉がどうして今度の恐怖の齒型事件に興味を有ち、何やかや策動してゐたのかを知り度い様子であつたけれども、これには良作も答へることが出來なかつた。良作としても、駒吉が前から事件に何か知ら關係を有ち、それがために原口蓮心から指環などを借り出して來て、眞犯人と思はれる男と會見の段取りをつけ、揚句の果てに殺されてしまつたことは知つてゐる、だがその根本ともいふべき點、即ち、駒吉がどういふ経緯から事件に關係し始めたのか、その點がどうもハッキリと分らずにゐたのであつた。

良作が、歸宅することを許されて、警視廳の立關を降りて來たのは、もう時間が大分遅くなつてゐて、十一時近くのことである。彼は、これから角筈アパートへ行つて、今夜の驚くべき事件を銀



子に話してやらうかなどと考へたが、ふとまた思ひ返してタクシーを呼んだ。さうして、小石川の  
高臺に、相良老人の邸を訪れた。

が行つて見ると、時刻が時刻でもあるせるか、相良邸の表門はピッタリと閉められてゐて、門柱  
の呼鈴を二三度押したが、中からは容易に人の出て来る氣配がない。

するとこの時、良作は、ふつと妙な氣持がして來た。さうやつて門の前に立つてゐる、そのすぐ  
近所に誰か人がゐて、ちつと自分の舉動を眺めてゐる、さういつたやうな氣持がしたのであつた。

「彼奴だ！」

何故とも知らず、良作は直感した。さうして、ふいに振向いて四邊の暗闇を透して見た。

と、果して良作の眼に映じたのが、彼のゐる場所からは七八間あまり左手へ離れて、そこにイん  
でゐる黒い影ん法師のやうな男である。

「誰だ！」

良作はキツとなつて叫んだけれど、向ふではそれより前に、バタ／＼とそこを走り出してゐる。  
「待て、こら！」

良作も、バツと大地を蹴つて駆け出した。さうして、相良邸の塀がそこから十五間ばかり行くと  
細い路地に沿つて右手へ曲るやうになつてゐる。その曲り角まで追ひかけて行つた。が見るといふ  
と、その路地は袋小路のやうになつてゐて、闇の中ながらも、どうにか向ふの端まで見通すこと  
が出来る。そこには人つ子一人ゐないのであつた。

「變だナ、確かにこの路地へ逃げ込んで行つた筈だが——」

四邊に注意しいく、良作が袋小路の行き詰りまで行つて行くと、その時氣のついたことがあつ  
た。右手に當る相良邸の塀が、どうした設計上の誤りなのか、表から入り込むに從つてだん／＼低  
くなつて行き、終ひには、塀の下に築き上げてある土手を攀ち登りさへすれば、ボンと身輕に飛び  
越えられさうになつてゐることである。

暗いので、そこに足跡があるかどうかは分らない。だが良作は、幾度も腰を屈めて、土手の傾斜  
面を調べて見たり、また塀の高さを目測したあとで、急ぎ足に表門へ引返して來た。さうして、例  
の呼鈴を消魂ましく押した。

書生がそこへ出て來るまでは、ほんの二分か三分の時間であつたのだらう。良作はしかし、非常



に苛々しい氣持で待つてゐたので、書生の顔を見ると一緒に、開けられた潜りの方から、いきなり中へ飛び込んでしまつた。

「あッ、君はいつたい何だ！」

書生は呆氣にとられて叫んだが、それでもちぎきに、見覚えのある良作の顔に氣付いたらしい。

「や、誰かと思つたら中牟田さんですね。」

「ウム」良作は面倒臭さうに頷いて、「君、相良さんはをられるだらうナ。」

「ハッ、おるで、す。」

「至急お目にかゝりたいことがあるんだ。」

「え、でも——」

「でも、どうかしたのか。」

「御病氣で、今夜は宵の口からお寢みになつてゐるんですがね。」

「誰が、——相良さんがか。」

「さうです。」

病氣だといふ相良老人を呼び起すのは氣の毒でもある。だが良作は、さういつてをられない場合なのを思ひ出した。

「さうか。それにしても、是非お目にかゝらなくちやならん。話したいことも澤山あるし、第一、今この邸の中へは、怪しい奴が忍び込んでゐる！」

「え？」

「今、見て来たんだ、向ふの袋小路の行き詰りのところから這入つたのだから、奥庭の方へ逃げ込んでゐるのかも知れない。君は、他の連中を叩き起して、奥庭の方を調べるんだ。僕は、さうだ、僕も相良さんに會ふのはあとにして、一緒にそちらへ行つて見よう。」

書生の腕を引立てるやうにして、良作は奥庭へ廻らうとするのだけれども、書生は半信半疑の面貌で、一旦邸内にと返して、懐中電燈を持ち出して來てから、漸く先きに立つて歩き出した。

良作としては、焦りに焦つた氣持でゐながら、勝手を知らぬ他人の邸で、どうにも仕方がなかつたのである。

立關の前を左手に外れて、そこにあつた枝折戸の掛金を外し、七八間も行くともう奥庭である。



そこは、この物語の冒頭に於ても述べた通り、曾ての日、銀子と都築面年とが結婚前の楽しい語らひをしてゐたヴェランダから、晝間はずつと一目に見渡せる筈の庭でもあるが、今は、覺束なげな常夜燈が建物の近くに二つばかり點いてゐるだけで、あとはもう、到底見透しの利かぬ闇である。良作と書生とは、懐中電燈の光を手頼りに、泉水の向ふや築山の蔭や、茂り合つてゐる立木の下などを探し歩いたが、一向にそれらしいものを見付け出すことが出来ない。

「何もゐないぢやありませんか。」

「ゐないやうだけどね、まア、もう少し調べて見よう。」

良作が、ふと思ひ付いて、先刻の低い塀の内側のところへ行つて見ると、不明瞭ながらその塀の根元だけに、足跡らしいものが二つ三つ残つてゐて、しかしその足跡は、塀のこちらの芝生へ來ると、もうすつかりと消えてゐるのだつた。

「あなたのいふことが確かだとすれば、その男は一旦塀の中へ飛び込んでも、あなたが表門の方へ廻つて行つた間に、再びこゝから塀を乗り越し、どこかへ逃げて行つたのぢやないでせうか。」  
書生のかういつてゐるのは一應道理である。

良作も、仕方なしのやうに頷いて、庭を横切り、先刻の枝折戸のところまで歸つて來た。  
途端に、建物の奥に當つて、バーンといふ一發の銃聲が響いたのだつた。

### 相良老人の危難

良作と書生とが、ハツとして聴耳を立てゝゐるうちに、續いて聞えて來たのは、

「オイ、誰か來て呉れえ！ 誰か來て呉れえ！」

といふ叫び聲である。

咄嗟の間に、二人はバツと身を躍らして玄關の方へ駈けてゐた。

「君、あれア確か、相良さんの聲だつたぞ！」

「そ、さうです。寢室らしいです。あなたも、は、早く一緒に來て下さい。」

靴を脱ぎ捨てゝゐるだけの餘裕さへない。二人は玄關かうバラ／＼と奥へ走り込んだ。さうして相良老人の寢室だといふ、頑丈な檜板のドアがついた部屋の前まで行つた。

その時に、部屋の中では戸棚か何かガラ／＼といつて倒れる音や、ドシンバタンと激しく格闘



してゐるやうな音がしてゐて、その合間々に、

『オイ、誰か、助けて呉れえ！』相良老人の悲痛な叫び聲が起つてゐる。

ドアには嚴重な錠が下ろしてあると見えて、押せども突けども動かないので、良作と書生とは、自分達の身體をモロにドアへ叩きつけた。

バーン、バーン、銃聲がまた二三發響く。

その騒ぎで、邸内にある他の女中や書生達も、漸く眼を覺ましたと見え、その時には廊下をバタバタと走つて同じところへ集まつたのだが、良作達が、それでもどうにかしてドアを破り、漸く部屋の中へ踏み込んだ時には、そこが鼻をつまゝれても分らぬやうな闇の中で何が何やら見當がつかない。良作は『スキツチを探せ、電燈を點けろ！』

と大聲に叫んだ。さうしてその聲に氣がついた書生の一人が、漸く壁際スキツチを押した。

と、忽ちそこに照らし出されたのは、テーブルは覆り、戸棚は前のめりに崩れ落ちて、殆んど足の踏み場もない位に亂雑を極めた室内の有様である。室の一隅にある寢臺の根元に、相良老人はベツタリと腰を下ろしたまゝ、放心したやうに眼を睜り、ハツ／＼と息を切らしてゐるのであつた。

『相良さん、どうなすつたのです。中牟田です、僕は中牟田です。』

良作は、早速老人の肩へ手をかけて、さう聲を掛けたけれども、老人は、すぐには口も利けない様子、暫くの間、苦しうな息を吐き續けてゐたが、そのうちに低い聲で呻くやうにいつた。

『私にも分らない。誰か、突然に部屋の中へ這入つて来て、この私を撃ち殺さうとしたんです。』

その時氣がついたことではあるが、かういつてゐる老人の顔を横から見ると、耳のところから血がたら／＼と垂れ下がつて来てゐて、それは耳朶を爪か何かで引き裂かれたものらしい。着てゐる寢巻は、袖口や腋の下がベリ／＼と裂かれ、露出した胸や手の甲にも、何かで引ツ搔かれたやうな傷痕が、三つも四つも残つてゐる。餘程激しい格闘があつたのであらう。良作は、女中の方を振り向いて『水を！』といつた。さうして女中がアタフタと持つて来た水を老人の口へ含ませると、

『相良さん、氣分は、どうです。僕が分りますか、中牟田ですよ。』

いひながら、そつと老人を抱き起し、寢臺の上へ腰かけさせてやつた。

『あ、有難う。大丈夫です。怪我は、殆んどしてゐません』老人はだん／＼元氣が恢復するらしく良作の手を握りしめるやうにしながら、『よく、来て下さつた。私は、すんでのことにやられてしま



ふところでしたよ。」

「誰か人が来たといふのは、どこから這入つて来たのですか。」

「分りません。寝てる間に、ふつと眼が覺めて見ると、どうしても誰か、部屋の中にあるやうな氣持なのです。誰だといつて、怒鳴つて見ると、その時ふいに奴の方から躍りかゝつて来て、私は、咄嗟の間に、枕元に置いてあつた護身用のピストルを取り出したんです。ところが、そのピストルを挽ぎ取られてしまつて——」

ピストルを撃つたのは、忍び込んで来た怪人物であるらしい。老人は、敵に武器を奪はれたにも怯まずに、一生懸命抵抗してゐると、そこへ良作達が駆けつけて呉れたといふのであつた。

老人の言葉を聽いてゐる間に、良作は幾度となく部屋の中を見廻してゐた。それはもう、最初に部屋の電燈が點けられた時から、絶えず不審に思つてゐたことでもあるが、部屋には老人が只一人のただけである。老人のいふ怪しい人物が、恐らくは良作自身、先刻表で見た影ん坊師の男なのであらう。だが、彼はいつたい、どうしてこの部屋へ這入ることが出来たか、また、いつの間に逃げ出すことが出来たか、良作と書生とが、部屋の前まで来た時には、まだ中で、格闘の行はれてゐた

最中であつた。して見れば、その時には、怪漢が確かにこの部屋にゐたのであつて、それから後、良作達がドアを押し破らうとして苦心してゐる間に、素早く逃げ去つたものと見なければならぬ。だがそれは、果して普通の人間に出来る業であらうか。

老人の方は、一寸の間そのまゝにして置き、良作が寢臺の向ふにある窓の工合などを調べて見ると、その窓には、嚴重といふほどではないが、皆、挿込錠が嵌め込んであつて、怪漢がそこを開けて逃げ去つた形跡はない。とすれば、怪漢の逃げた口はたつた一つ、即ち、良作達が押し破つて這入つて来たドアだけになるのであるが、それもしかし、どういふ隙を窺つて逃げたのであらう。無理にこち付けて考へて見ると、良作達がそこへ這入つた時、部屋の中は眞暗であつた。さうして電燈の點けられるまでには少しばかりの間があつた。従つて怪漢は、その僅かの間を利用して、同じドアから逃げ出したものとも考へられる。即ち、怪漢は、ドアが外から破られるまで内側の壁の根元にも潜んでゐて、一同がドヤ／＼と中へ踏み込んで来た時、それと入れ違ひに、スリと廊下へ抜け出して、そのまゝ、逃げ去つたものとも考へられるが、それにしても、廊下には、その廊下を折れ曲がつた向ふにある玄關の明るみが、微かながら射し込んでゐるし、殊更らその時には女



中や書生達がまだ部屋の中へは這入り切れずに、廊下に立つてガヤガヤと騒いでゐた時なのであるから、逃げ出した怪漢の姿を、誰か一人ぐらゐは見てもよい筈である。それについて良作は、居合せた誰彼に訊いて見たが、誰も氣が付かなかつたと答へるばかり。結局怪漢は、烟のやうに消え失せてしまつたのだつた。

良作は、さつきの書生に耳打ちして、邸内をもう一度詳しく探して貰ふことにした。そしてこの間に、老人はすつかりと落付きを取戻して、自分から、醫者を呼ぶことを女中に命じ、良作に向つては、あんまり取り亂した姿でもあるし、別室で改めてお會ひするから、暫く待つて呉れるやうにといつた。

良作は、考へ／＼應接室の方へ案内され、椅子へドツカリと腰を下ろすと、

「分らない、變だ、どうしても變だ！」

口のうちに吐きながら、じつと考へ込んでゐたのであつた。

崖つぶちの慘劇

老人自身もいつてゐた通りに、老人の負傷程度は、さう大したものではなかつた。前にも銀子が氣を失つたまゝ擔ぎ込まれた時に呼ばれた、藤本といふ醫師が來てから暫くすると、老人は身體のそこら中に手當の痕を見せて應接室へやつて來た。耳朶の傷が一番大きかつたと見えて、そこを顎や頭の方へかけて繃帯してゐる。それがかなり痛ましかつた。

「起きてゐてもいゝんですか。」

「いゝですよ。醫師のいふところでは、四五日もすれば癒つてしまふ程度ださうです。」

聲にも案外元氣があつて、良作は漸く安心することが出來た。この時部屋へは書生が來て、邸内を殘る隈なく搜索したが、それらしい者を見付けられなかつたといつて報告して行く。そのあとで老人は、深い溜息をホツと洩らした。

「中牟田さん、これア、いつたい、どうしたといふことでせうナ。」

「いゝア。」

良作も、どこから話して行つていゝのか分らない。最初には先づ、自分が表門で怪しい人影を見たことから説明してやつた。



「大體のところはですね。その怪しい奴は、僕等が庭の方を探してゐた、その間に邸内へ忍び込み、さうして御老人の寢室へ行つたものと思はれるんです。あの時に、彼奴がどんな工合にして逃げる事が出来たか、その點はまだ十分に調べて見る必要がありますが、僕の見るところでは、犯人はこの家の事情に、よほどよく通じた奴に違ひないんですよ。」

「さうですか知ら？」

「何故といつて、我々が庭の方へ行つてゐたその僅かの間を利用して、御老人の寢室へ這入るといふことだつて、普通の者には到底出来ないことなんですし、殊に逃げ方の鮮さつたらないんです。内部の事情に、よほど通じた奴でないか、とてもかうは行きますまい。——奴が御老人の部屋へ這入つて来た時、顔を見ることは出来なかつたのですか。」

「出来ませんでした。中が、眞暗になつてゐたものだから。」

「電燈は、その前から消してあつたのですか。」

「私が自分で消して置いたのです。今夜は、日が暮れると間もなく、妙に氣分が悪かつたので、寢室へ閉ぢ籠つて寝ながら小説本などを讀んでゐたのですか、もう二時間ばかり前でせうか、どうや

ら眠くなつて来たので、その時に、枕元の臺ランプを消して、ウトウトと眠り込んでゐたのです。大きな電燈の方は無論、その前から消してありました——」

老人はその時のことを一つ／＼思ひ出すやうに説明して、それから言葉を續けていつた。

「しかし中牟田さん、あなたはその怪しい奴が、邸内の事情に通じてゐる奴だといはれましたね。」

「實をいふと、この家では、前にも妙な事件がありました。つまり、銀子が寝てゐる間に、義齒を盗まれたことがありましたので、それから考へて見て、私自身も、あなたと同じことを考へてゐるわけです。邸内の様子を詳しく知つてゐる者だとすると、いつたい誰なのでせう。書生でせうか、女中でせうか。」

書生であるとも女中であるとも、さういふことは全く見當がついてゐない。良作は、兎に角、其奴こそは齒型事件の眞犯人であらうといふこと、及び、それについては、まだいろ／＼と老人に話したいことがあつたので、今夜はこんな遅くに訪ねて来たのだと説明した。

良作がそれから後話して行つたことは、要するに、前数章に互つて述べて来た事柄、即ち、箕村駒吉殺しから始まつて、島崎刑事殉職に至るまでの顛末である。



それを聞いてゐるうちに、老人は、深い驚きに衝たれたらしい。箕村駒吉が殺されたといふことだけは、流石に夕刊新聞を読んで知つてゐるといつたが、その他のことは何一つ知つてはゐない様子で、中でも、老人の顔に、最もひどい驚愕の色が現れたのは、良作が妙雲院へ行つて、原口蓮心が銀子の姉であるらしい事實を探り出して来た、それを話して聞かせた時であつた。

老人はその時「え？」といつて叫んだまゝ、暫くは呆然として良作の顔を見守つてゐた。さうして、何かいふかと思つたのが何もいへずに、ガツクリと顎を落したまゝ、いつまでも何か考へてゐた。老人の顔に、煩悶、懊惱、焦慮、困惑、不安、さういつたもろくの感情が纏れ合つた、一種異様な表情が脂汗と共に湧いて出るのを見て、良作は腹の中では氣の毒なことだと思ひながら、猶も先きを話し續けた。

「なるほど、さうだつたのですか。」

老人が漸くにして顔を上げたのは、良作が大體一通りのことを話し終へて、そのあと二三分あまり、じつと押し黙つて哀れな老人の姿を見守つてゐた時である。

老人は、激しい興奮に襲はれたあとの、妙に氣抜けしたやうな調子でもつて、「なあるほど、なあるほど」幾度もそれを繰り返すのだつた。

「驚かれたでせう？」

「驚きました。何といつていゝか、全く意外なことばかりです。」

「かういふことをお話しするのは、お氣の毒だとも思つたのですが、原口蓮心の話はいかゞでした。」

「何ともかともいひやうがありません。かうなれば、お隠しする必要もありませんが、實をいふとあなたが推測なすつた通り、銀子は、ほんたうは私の娘ではないのです。捨兒を拾つて育てた娘なんです。」

良作が、第一に確かめて置き度いと思つたことを、老人は、訊かれるまでもなく打明けた。

それによると、老人はその頃南米へ行つてゐた。さうして、その頃はまだ生きてゐた妻君との間に子供がなく、平生から子供を欲しいと思つてゐたところへ、或る朝、例の教會堂の前を通りかゝつて、そこに捨てられてあつた銀子を見付け早速自宅へ連れ戻つたといふのであつた。

「銀子に姉があつたといふことは、私も今聞くのが初めてです。が、その蓮心といふ尼さんがさう



いつてゐるのなら、確かにそれに違ひないでせう。私としては、その時に、今でもよく覚えてゐますが、そこにあつた乳母車の中であの銀子が只一人きり、無心にスヤ／＼と眠つてゐるのを見つけたので、もう一人の姉が一緒に捨てられてゐるなどといふことは少しも思はず、赤ん坊の眼を覺まさないやうにして、そつと抱いて來たのでした。それから二十年近く、今の今まで、自分の娘として育て上げて來て、娘は勿論のこと、この私ですらも、今では血肉を分けた子供と同じに思つてゐます。——今になつて、あれが捨兒であつたことが知れやうとは夢にも思つてゐませんでした。——娘にも、今更らそのことを知らせるのは可哀相ですし、いつたいどうしたらいいでせう。」

老人のいふ言葉に無理はない。良作は、つい先刻までは、銀子にも、このことを話してやらうなどと思つてゐたが、折角、眞の父親と思ひ込んでゐる相良老人を、殊更ら、その姉である原口蓮心が死んでしまつた今、養父だといつて打明けるのも悪いことだと氣が付いた。警察へも、そのことだけは話さずに置いてよかつたと思つた。

「兎に角——」老人はおづく／＼した調子でいふ。「兎に角、今のあなたのお話を伺つて見ると、この事件には、銀子と原口蓮心とが姉妹であつたといふことが、何か重大な關係を有つてゐるやうに見える。えませんが、私としては、どうも娘が可哀相で、捨兒であつたこととか、従つて、あれには、私以外に生みの両親があるといふこととか、さういふことを知らせたくありません。その點、あなたのお考へはどうでせうか。」

「さア、そこなんです」良作は答へた。「僕にしても、その點は同じやうに思つてゐます。無論、警察の方へなどは、場合によつて全部話さなくてはならぬかも知れませんが、少くとも銀子さんは、此の際、何も話さずに置きませう。それよりか僕は、獨力ででも、この事件の祕密をあばき、眞犯人を探し出さうと思つてゐるのですよ。」

「え、あなたが！」

「一つには、箕村が僕の友人だつたのですし、原口蓮心を殺したのも、僕のやり方が下手だつたからです。」

老人は、何もいはなかつた。只、黙つたまゝ不安らしく良作の瞳を見詰めてゐた。

老人は、流石に疲勞したと見えて、それから間もなく別室へ引取り、そこで眠りについた様子であつたが、良作は、そのあとでもう一度邸内を調べ廻つた。といつて、怪漢は、どこをどう逃げ去



つたものか、矢張り足跡を辿ることが出来ない。

彼は、もう真夜中を過ぎてしまつた午前三時頃に相良邸を辭した。そして、タクシーを見付けて新宿へ歸らうと思ひ、相良邸前から、神坂町の電車通りへ出ようとした。

途中には、片側が相良邸と同じやうな宏壯な邸宅になつてゐて、片側が、二丈あまりの石垣になつた、崖つぶちを通るところがある。神坂町といふのが、その名前からでも分る通りに、坂の中途に屯してゐる一廓であるので、自然、さうした起伏を生じてゐるのである。恰度良作がその崖つぶちまでやつて来た時、彼は、突然に「呀ッ！」といふ悲鳴をあげた。

何者とも知れず、背後からキラリと短刀を光らして、良作の胸中を、グサツと突いたものがあつたのだつた。

「ナ、何をする！」氣丈にも良作は叫んで、振り向きざまに、對手に掴みかゝらうとしたのであつたが、向ふでは、最初の一突きが急所を外れたと見ると、振り向いた良作の胸を目がけて、又、ぐつと短刀を突き出して来た。

「ウ、ウヌ！」良作は危く身を躲しながら、しかしすぐには近づいて行くことが出来なかつた。

見ると、闇の中にも、對手が黒い覆面をしてゐて、腰を屈め、頭を低く下げて、じつと隙を窺つてゐるのが分る。

これこそは、明かに、先刻見た怪漢なのである。

「畜生、貴様だナ！」良作はいつたが、向ふでは一言も喋らない。身構へしながら、ぢり、ぢり、近づいて来る。

良作は、氣だけ確乎りしてゐても、さうして睨み合つてゐる間に、今、刺された脊中からの傷が、骨を削るほどにも痛んで来て、頭の芯へずーんと響き、そのために、眼が眩みさうになるのを感じた。

「ウ、ウヌ、誰だ、貴様は誰だ！」盲滅法に、こちらから飛びかゝつて行かうとすると、向ふでは、ススツと後退りした。そして、すぐに、バツといふ火花が見え、同時に鋭い銃聲が起つた。短刀ではいけないと思つたものか、ピストルを出してゐたのである。タジ／＼となつて身を反らし、それから、本能的に地べたへ身を伏せようとすると、その時良作は、危い崖の縁まで来てゐたのだつた。さうして、身を伏せる拍子に、片足をひよいと踏み外してしまつたのだつた。



バーンといふピストルの音。同時に、一生懸命で踏み止まらうとしながら、それでも到頭怖へ切れずに、上半身で大きく輪を描き、崖の石垣に沿つて墜落して行く中牟田良作。  
大きな音を立て、落ちると一緒に、良作は、「ムン」と微かな呻き聲を立てた。が、そのまゝ、手足をビリ／＼と戦かせて、終ひには、クツタリとなつてしまつた。

怪 しい 銀 子

良作を襲つた覆面の男は、いふまでもなくかの殺人魔、齒型事件の眞犯人である。良作は、殺人魔の正體を突き止めるべく、ああやつてだん／＼に探索の歩を進めて來てゐた。探索の目的が果してどの邊まで達せられてゐるか、それについて良作自身は、まだ殆んど五里霧中の状態であつたともいへるのであるが、ところを換へて、これを犯人の側から考へて見た時、良作こそは、最も恐ろしい敵であつたのに違ひはない。  
良作が崖の下へ墜ちたのを見て、怪物は、ホツと胸を撫で下ろしたらしい。彼は、注意しいしい崖つぶちのところまで近づいて、ずつと下を見下ろしてゐたのであつたが、そのうちに、ドキツ

としたやうに振り向いた。

この時、彳亍でゐる怪物の背後に當つて、何か知ら人の足音のやうな、或は、暖れた咽喉の奥の叫び聲のやうな、非常にへんな物音がしたからである。

怪物は、その物音のもとを確かめようとして、しばらくは闇の中を見透かしてゐた。さうして、突然、呀ッ！といふやうな叫び聲を立て、クルリと踵を廻らすと一緒に、やみくもに右手の方へ走り去つてしまつた。

「お嬢さん、追ひかけませうか。」

あとは、ほんの僅かの間、しーんとしてゐるが、ふいにかういふ聲が聞えたかと思ふと、そこへ姿を現したのが、意外にも相良銀子と豊吉といふ老人との二人である。

二人はいつたい、どうしてこんなところへやつて來たのか。

「あいつ、へんな覆面なんかしてやがつて、全く怪しい奴ですね。——こんな時分に、何をしてるやがつたのでせう。」

老人は、胡散臭ささうにしてかういつたが、銀子の方は、只黙つて今の怪物が走り去つたあと



ばかり見送つてゐて、容易には返事をしやうにない。

やがて二人は、崖の縁へ近づいて、言ひ合したやうに下を覗いた。暗いので、最初は何も分らなかつた風であるが、それでも銀子の方が先に見付けて、豊吉老人の腕へギユツとばかり獅噛みついた。

『小父さん、あれ、なんでせう？』

『あれつてどれです。』

『ほら、ほら、あそこるところに、何か黒いものが寝長まつてゐるぢやないの。——腕のやうなものも見えるし、脚のやうなところも見えるわ。人間だわ、人間だわ、きつとあれば人間だわ。』  
老人は、銀子の指差す方へ首を伸ばし、しきりにキヨロ／＼してゐるが漸くそれと分つたらしい。

『あ、なるほど！』頓狂なほどの聲でさう叫んだ。『確かに人間ですよ。』

『どうしませう？』

『行つて見ませう。——先刻あいつは、ちつとこゝんとところに立つてゐて、私達が背後から見てる

るのも知らずに、一生懸命で下を覗いてゐて、そのうちに、突然逃げ出してしまひましたつけ。あいつの怪しい態度といひ、あそこに倒れてゐる人間といひ、こいつはお嬢さん、どうして只事ぢやありません。

銀子も豊吉老人も、今更らしく振り向いて、怪人物の逃げ去つた闇の中を透かして見た。

崖の上の路は、前いつたやうに、神坂町の電車通りへ出られるやうになつてゐるが、今銀子達の立つてゐるところから、十七八間あまり、電車通りと反対の方向へ進んで行くと、そこからは路が二つに分れてゐて、その一方の狭い方が崖下へ行くやうになつてゐる。やがて二人は、その路を傳はつて下へ降り、さつき立つてゐた場所の、恰度真下のところへ出ることが出来た。

そこは、何かの古い建物を取り拂つたあとと見えて、あまり廣くはないけれども、草の茫々と生えた空地である。

空地の隅まで、二人は怖はながら歩いて行つた。さうして、黒い人影の倒れてゐたところまで達すると、最初は豊吉老人が手を出して、それをそつと抱き起さうとしたのであつたが途端に、『呀ッ！』



二人の唇からは、大きな驚愕の叫びが迸り出た。

『中牟田の旦那だ！』

『中牟田さんだ！』

二人は初めてそれと氣付いたのである。

『こ、こりア大變だ、お嬢さん——』

老人は、どもりながらさういつて、誰かの助けを求めかのやう、アタフタと四邊を見廻したが老人にも増して狼狽したのは、寧ろ銀子の方であつたかも知れない。

『どうしませう、どうしませう、私、どうしませう。』

おろ／＼聲でさういつたまま、彼女はベタリと膝をついてしまった。

調べて見ると、良作は背中を血でベツトリと濡らしてゐるが、身體にはまだ暖か味があるし、脈搏も、細々ながら續いてゐる。

『旦那、旦那！』

豊吉老人は、手荒く良作の肩を揺すぶつた。さうしてその時、漸く良作も正氣づいたらしい。『ム

ムムムツ』といふやうな呻き聲を立て、僅かに眼を見開いた。

見ると幸ひにも傷は背後に受けた短刀の傷が一ヶ所だけで、ピストルの弾丸のあたつた形跡はなかつた。只、墜落した拍子に後頭部か何かをひどく打ち、そのために氣を失つてゐるものと見える。

出血の相當にあつたのが、この際何よりも危険なことである。

『旦那、確乎りして下さい、豊吉です！』

『ウム。』

『それに、相良のお嬢さんも來てゐます！』

『ウム。』

微かに頷いたには頷いたけれども、良作は再び眼を閉ぢてしまつて、ぐつたりと老人の肩へ凭れかゝつてしまつた。

『これア弱つたですナお嬢さん。』

『随分、ひどい怪我をしてゐらつしやるわね。』



『この近所に、お嬢さんの御存じの病院があるでせう。そこへ兎に角連れて行かうぢやありませんか。』

『え、え、さう——さうしませうか。』

後になつて豊吉老人の語つたところによると、この時老人は、初めて銀子の様子に、何か變つたところのあるのに氣付いたといふ。良作の出血が甚しくて、手當てが一刻遅れれば一刻だけ、それだけ死の危険に瀕しつゝあることを、銀子とても無論知つてゐたのに相違ない。さうして、他の誰よりも、それを心配してゐたのに相違ない。ところが彼女は、老人に病院のことをいひ出された時、明かに何か他のことに考へを奪はれてゐた様子で、ひどく氣の無ささうな、まるで機械的に物をいつてゐるやうな、非常にボンヤリとした返事をしたのであつた。しかし、銀子は間もなく我を取り返したらしい。急に甲斐甲斐しい態度になつた。さうして、老人に手傳つて良作の身體を半分は自分でも抱くやうにし、その附近にある、相良家のかゝりつけの醫者、藤本醫院の玄關までどうにかかうにか辿りついたのだつた。

X

X

X

院長藤本醫學博士は、非常に吃驚した風であつた。

無理もない、それまでは表面上行方不明のまゝになつてゐた相良銀子が深夜に突然、しかも怪我人を抱きかゝへて、診療を乞ひに來たからである。

が、流石は商賣柄、これには何かの事情があると睨んだのであらう。博士は初め何事も訊ねず、良作をすぐに手術臺へ連れ込んで、まだ寢ぼけ眼をこすりこすりしてゐる看護婦を二人、鋭く叱咤しながら手術にかゝつた。

出血の多かつたことは兎も角として、良作の傷が左肩甲骨のところを、深さ骨膜に達するまで刺されただけで、内臓には、少しも支障を來してゐなかつたことが、この際としては、何より幸運なところである。

夜が白々と明けかゝつて來る頃、手術はもう完全に終つた。同時に、良作の身體は階下十五號といふ病室へ移されてしまつた。

『お嬢さん、これはいつたいたどうしたことです。』

與へられた催眠劑のお蔭で、良作がスヤ／＼と眠つてしまふのを見ると、その時藤本博士は、初



めてかういつて銀子に訊いた。

『ハイ、いろいろと深い事情があつたものですから——』銀子は眼を伏せながら答へてゐた。『しかし先生、そのことはもう、あまり深く訊ねないで下さいまし。私は今まで、或る所にじつと身を隠してゐたのでございます。さうして、そこに怪我をしてをられる、中牟田さんのお世話になつてゐたのでございます。』

銀子がそれから話し出したところによると、彼等が今晚、突然にも中牟田良作が危害を加へられたところへ出會したわけは大體次の通りの次第である。

即ち、それはあゝやつて中牟田良作が代々幡署へ引つ張られて行つた直後のこと、オレノ食堂の前でさうした騒ぎのあつたことを、第一に聞き込んだのが豊吉老人であつた。老人は、すぐに角筈アバアトへ駈け付けて、このことを銀子にも知らせた後、いろいろと二人で心配してゐた。

が、待てども、良作がそこへ歸つて來なかつたのは、その間に東京ビルディングで連心殺し、續いてまた、相良邸の不思議な事件、さうした事柄が矢繼早やに起つて、良作が、一々それに關係してゐたからである。銀子の方では、それを少しも知らなかつたので、良作は相變らず代々幡

署に留置されてゐるものとばかり思ひ込み、時がだん／＼に過ぎて行くにつれ、心配で心配で堪まらなくなつた。良作が捕縛されて行つたわけをあれかこれかと臆測しながら、銀子と老人とは、遂に午前二時頃まで、じつと良作の歸りを待つてゐたが、その時になると、銀子はふと、父親の相良老人に相談したらと思ひついた。——思ひつくといふと、夜の明けるのも待ち切れず、豊吉老人共すぐと自動車で小石川までやつて來たのであつたが、折悪しく自動車は、神坂町の坂を上りかけたところでパンクしてしまひ、仕方なしに、二人はそこから相良邸まで歩いて來た。

それが恰度、中牟田良作が覆面の男に襲はれた、あの時刻に當つてゐたものらしい。二人は、崖のところまで來た時に、その前面に怪しい男が立つてゐるのを認めた。

『お嬢さんが、その時に非常に吃驚なすつてしまつて、よろよろと私の方へよろけかゝりながら、呀ッといふやうな聲を立てられたのです。さうして、それだもんだから、怪しい奴の方でも氣が付いて、急に逃げ出してしまつたんです。』

豊吉老人は、銀子の言葉を最後のところで引取つて、こんな風に説明を付け足した。

『何しろね、私達ア、そこに倒れてゐたのがまさか中牟田の旦那だア思はなかつたんです。恰度



まア、いゝところへ私達が來會したやうなものです、先生、怪我人の方はどうでせう。生命に別條があるつていふやうなことはないでせうか。』

病院から相良邸へ電話がかけられ、その結果、これも昨夜のまゝ顔に繃帯をした相良老人が、アタフタとそこへやつて來たのは、それから間もなくの後である。

『え、何ですつて？ 銀子が來てゐるんですつて？ さうして中牟田さんが怪我をしてゐるんですつて？』

相良老人は、最初電話口でそれを知らされた時、殆んど自分の耳を信ぜられぬかのやう、幾度もさういつて同じことを訊き返したが、病院へやつて來た時には、極度の不安に脅えてゐた。久しぶりで最愛の銀子と顔を見合し、それにも心を衝たれたのであらう。だが老人は、廊下で銀子の出迎へを受け、それから良作の寢かされてゐる病室へ這入ると、

『おゝ！』

咽喉の奥から絞り出すやうにさう叫んで、よろゝと良作のベッドへ走り寄つたのだつた。

毒

蛇

中牟田良作が、かうして銀子達の世話になり、藤本醫院へ連れられて來たまでの経緯を、漸く知ることの出來たのは、それから四日経つた後のことである。

負傷の程度は、前いつた通り、さう大したものではなかつた。ところが、墜落した時に身體の打ちどころが悪かつたと見え、良作は、二日ばかりの間殆んど身動きすることも出來なかつたし、一方には貧血のため、衰弱が案外甚だしく、藤本博士が、その間絶對の安靜を保たせるため、怪我人に向つての會話を一切嚴禁してしまつたのである。

銀子と豊吉とが、殆んど寢食を忘れて盡した看護の甲斐は、やがて三日目の晩方から現れ始め、四日目の朝、良作は見違へるばかり元氣附くことが出來た。さうして藤本博士の許可を得た銀子達は、そこで初めて前後の事情を話してやつた。

『奇蹟ですね。あなたがその時に恰度そこへやつて來て、捨てて置けば死んでしまふ私の命を救つて呉れたのは——』



聞き終へた時、良作は感慨深さうにさういつたが、それから今度は、自分がどうしてあんな目に遭はされたのか、それを手短かに物語つた。さうしてふつと思ひ付いたやうに、病室の中をくるりくるりと見廻した。

「ところで銀子さん。あなたはこのことについて、警察の方へ何か知らせてやりましたか。」

「いゝえ」銀子は、急に當惑して首を振つた。「まだ實は、何も知らせてはありません。」

「どうして知らせなかつたのです。」

「ハイ、それはあの、警察の人やなんか来て、いろく〜と騒ぎ立てられますと、御身體にも障るだらうと考へましたし——」

「さうすると、僕が怪我をしたつていふことは、病院以外、どこへも知らせてないといふ譯ですね。」

良作は、その時、格別の氣も付かなかつたらしい。彼はそのまんま何か考へ込んで、じつと押し黙つてしまつたのだが、夕方、銀子は、入浴のために三十分の間、病室を出てゐた。さうしてこの時に、豊吉老人の方から、妙におづ〜とした調子で話しかけて來た。

「旦那——」

「なんだ。君にはいろく〜と世話になつて濟まないね。」

「ハイ、そのことはもう、何もお禮などいはないで下さいまし。それよりか實は、私は旦那と口が利けるやうになつたら、早速申上げたいと思つてゐたことがございますので——」

「ふーん、どういふことだね？」

「今朝方も、旦那と相良のお嬢さんとが話し合つてゐたことでございます。旦那がかうして怪我をなすつたといふことを、何故お嬢さんが警察へお届けにならないのか、私には、その點がよく呑み込めないのです、旦那と御相談したいと思つてゐたところなんです。——別に、氣にするほどのことではないかも知れません。お嬢さんはあゝやつて、一旦は今度の事件の眞犯人だといふ嫌疑をかけられた方でもあるし、現在も、なるべくは世間へ姿を現はさずにいるたいといふところなのです、従つてここへ警察の人達がやつて來るのを、ひどくお嫌ひになつてゐることは分ります。けれども私には、何だかどうも變なのです。」

老人は、肚の中にいひたいことが澤山にあつて、それをどういつて言ひ現はしたらいいものか、



少なからず迷つてゐる風である。

『實はねえ旦那、新聞を私は見ましたよ』老人は、取つて付けたやうにいひ出すのだつた。

『新聞といへば、さうか、僕はもう長いこと新聞を読まずにゐる。新聞にはどんなことが出てゐるのだね。』

『それがもう、とても大變なのでございます。あの日旦那が、箕村駒吉といふ旦那のお友達の家を訪ねておいでになつたことから始まつてその箕村といふ人が殺されたことも、東京ビルディングで、原口蓮心といふ尼さんや、代々幡署の島崎刑事が殺されたことも皆んな詳しく出てをります。その記事の中に、旦那がどんなやうなことを遊ばしたか、それも大體は書いてありますので、お嬢さんにしろ私にしろ、このことはもう旦那から話して戴くまでもなく、大概分つてゐる積りなのでございますが、ところでさうした記事の終りのところが、旦那の行方不明になつたことを知らせて「中牟田良作こそは、最も怪しむべき人物ではないかと」そんなやうに結んだ奴も見えるのです。私は、旦那がさういふ風に噂されてゐるのも心外だし、それで一刻も早く旦那がこゝにゐるといふことを、警察へ知らせたらよからうと思つたのです。——お嬢さんの方では、それをしかし、どう

しても諾いては呉れません。萬事祕密にして置いた方がいゝ、さういふ風にばかり仰有つてゐます。』

良作には、豊吉老人のいはうとしてゐることが、漸く薄々と呑み込めて來た。

『なるほどね、それアどうも變なことだが、しかし銀子さんとしては、警察の人に會ふといふことが、つくづく厭になつてゐるのだよ。』

『それは、無論さうでもございませう、しかし私は、例へば旦那のことを警察の方へ知らせてやつたところで、お嬢さんの名前を無理に持ち出さなくてもいゝのですし、お嬢さんだけは、全然關係が無かつたやうにし、角筈アバアトなり、又は何處かへ再び身を隠して戴いて、その上で警察へ知らせたらよからうと思つたのですが、それを申上げると、お嬢さんは、すつかり御機嫌が悪くなり、終ひは、まるで泣き聲のやうになつて「どうかさういふことをしないで呉れ」さういつてお頼みになるのでございしました。』

『銀子さんのお父さんも見えただらう、相良さんは、どういふ風にいつてをられたのだね。』

『ハイ、そのこともまた、是非お耳に入れて置きたいのでございますけれど、相良さんも大變に旦那



那のことを心配して、今日はまだ見えませんけれど、一日に一度はきつとお見えになります。——その相良さんが、矢張りお嬢さんと同じ意見で、警察へは何事も知らせない方がいゝ、さう仰有つてをられます。』

極めて深い意味があるやうでもあるし、また、別にどうしたといふこともない、その場の成行きで、ついさうなつてしまつたといふやうな、殆んど無意味なことのやうにも見える。二人の話は、恰度その時、噂をしてゐた相良老人が、良作の見舞ひにやつて来たため、曖昧な謎の片影を見せたなりで、プツリと尻切れ蜻蛉になつてしまつた。

相良老人は、この時もう顔の縋帯を取り外してゐたが、耳朶のところにはガーゼを押し當て、それを膏藥で止めてゐたし、手の甲には、何かで引つ搔かれたやうな赤い傷痕を残してゐる。二人は、暫らくの間、あの夜相良邸へ忍び込んだ怪人物のことを話した。それとなく良作が訊ねて見ると、相良邸では、そのこともまだ警察へは届けてゐない様子である。

『何しろ、銀子の奴がいふのでしてナ、あの晩の事を届けるとすれば、自然中牟田さんのこともいはねばならず、まア、もう暫らくの間、そのまゝに秘密を保つて置いて呉れ、銀子がさういふ

風に頼みますので、ついそのまゝになつてをりますわい。』

相良老人は、幾分気が咎めたと見える。辯解するやうにさういつて、あとへ、『あはムムム』わざとらしい笑ひを付け加へたのだつた。

相良老人の歸つて行つたのが、夜の七時頃である。

九時頃になると、銀子はこの四日間の看病疲れが出たといつて、その夜は別室でゆつくりと寝ることになり、病室へは、良作と豊吉老人とが寝たのであつたが、良作の恢復した様子を見ると、老人は急に気が緩んだらしい。ベッドの上へ乗ると一緒に、忽ち肩を搔き出した。

病室の外の廊下には、入院患者や看護婦達のスリッパの音が、時折りバタリバタリと聞えてゐたが、それもやがて鎮まつてしまひ、醫院内は、だん／＼静かになつて行く。

恰度玄關の大時計が十一時を打つて、その餘韻が、妙に長く響いた時である。良作は、まだ十分に寝付かれなかつたので、ひよいと眼を開いて豊吉老人の方を見ようとした時、ガバと床を蹴つて起きようとした。

良作の寝てゐたベッドは、窓の方に片寄せてあり、手を伸ばすと、すぐに窓硝子の棧へ指先きを



觸れることが出来るやうになつてゐる。その窓が僅かに一寸ばかり開きかゝつてゐて、然もその隙間から、光つた重味のある繩のやうなものが、びよいと躍り込んで来たのである。さうしてその繩が、良作のベッドへドサリと落ちると、急に鎌首を持ち上げて、良作の顔を目掛け、スル／＼と這つて来たのである。

身體の痛いのも忘つてしまつて、良作は、咄嗟にベッドから滑り落ち、猶も自分を追ひかけて来る毒蛇を、一生懸命で拂ひ退けようとしたのであつた。

白 影 法 師

蛇は、あまり長いものではなく、三尺そこ／＼の長さしかなかつたけれど、全體としてはマムシのやうに灰色を帯びてゐて、然もマムシよりもつと猛惡な面構へをし、頭のところ、匙のやうに平つたく膨れたやつであつた。

後に分つたことではあるが、琉球邊に棲むハブといふ毒蛇である。蛟まれたが最後、一番いゝ場合で廢人になる、さういふ猛毒を有つた蛇なのである。

良作は、こんな小さな蟲けらに、自分が追ひ廻されてゐることを、ふと莫迦らしいやうには思ひながらも、矢張り蛟みつかれては大變なので、あちらへ廻りこちらへ廻り、狭い病室の中を懸命に逃げて歩いてゐた。

良作の隣りで寝てゐた豊吉老人も、その騒ぎで漸く眼を覺ました。

『オヤ、どうしたんです？』

『蛇だ、蛇がゐるんだ。』

『え、蛇ですつて。——蛇がどうしたんですか。』

『誰か窓のところから投げ込んだのだ。そら、そら、そこへ這つて行く——』

豊吉老人は、まるで寢とぼけたやうな顔をして、眼をこすり／＼室の中を見廻したが、良作にいはれた通り、そこにハブがゐるのを見付けると、急に正氣になつて跳ね起きた。

『コン畜生！』

老人は、火鉢にさしてあつた十能を掴むといきなり床へ飛び下りた。そして、明かに攻撃の態度をとつて老人の方へ襲ひかゝるハブに向つて、力一杯十能を振り廻した。十能は小さいし、ハブは



敏捷だし、それがなかく、容易なことでは片が付かない。老人は息をハツハツとはずませて、それでも漸くのことでもハブを室の片隅へ追ひ詰め、そこで最後の一撃を喰はすことが出来た。

「畜生、ひどい骨を折らせやがった」老人は、ハブの頭を二度も三度も叩き潰してから、ホツとしたやうに良作の方を振り向いた。「しかし旦那、こいつは確かに毒蛇ですよ。いつたい、誰がこんな悪戯をしやがったんです。」

「誰だか分らん。僕の寝てる枕元から、びよいと投げ込んだ奴があるんだ。」

「枕元つていふとあれですね——」

ベッドに近い窓が、さつきまゝ一寸ばかり開きかゝつてゐたので、豊吉老人もすぐとそれに目を付けたのである。良作は、身體がまだ充分でないので、ベッドの端に腰かけたまゝ、殺されて生しく横たはつてゐるハブを見るときもなしに見守つてゐたが、老人は忌々しうに、

「何にしてもひどい奴だ。人の寝てるるところへ、いきなり蛇を投げ込むなんて。」

と呟いた。さうして開きかゝつてゐた窓へ近づきさま、片手でガラリとばかり引き開けた。

途端に、窓の外では、バタバタといふ足音を立て、窓からは眞向ひに當る庭の木立へ、素早

く逃げ込んだものがある。

「のましたぜ、旦那！」

老人は、ドキリとして良作の方を振り向いた。

「ウム」と良作も答へた。そして、ベッドから立上つて窓のところへ来た。

「あそこです。あそこに、大きなハツ手の藪がありますね、あそこへ確かに逃げ込んでゐますよ。行つて見ませうか。」

「危いかも知れないが——」

「ナーニ、大丈夫です。旦那はこゝで見えてゐて下さい。あつしが行つて、掴まへて來ます——」

良作がそれを止める暇もなく、老人は、スリッパのまゝ、窓から飛び下りた。さうして流石に用心しながら、ハツ手の藪へ近づいて行つた。

庭は、窓に近いところだけが、ぼーつとした薄ら明りの中に浮んでゐるが、その向ふは、今いつたハツ手だの終だの百日紅だのの植込みになつてゐて、その黒い陰影のなかへ、老人の姿が呑み込まれてしまふと、そこには誰もゐないやうな静けさである。老人は、一度ハツ手の蔭をくると



廻つて、木立のこちら側へボンヤリとした輪廓だけを現したが、その時は、まだ誰も見付けることが出来なかつたらしい。やがて彼は、庭の隅つこにある棕櫚の木の下から、再び闇の中へ紛れ込んだ。さうして、そのまゝ暫らくは音も立てなかつた。

「ウヌ！」

ふいに、唸るやうな老人の聲が聞えて、それから、續いて、バタ／＼といふ激しく人の駈け廻る聲が起つて來た。そしてその時良作は、自分もそこへ行かうかと考へ、窓へ這ひ上りかけてゐた。

木立の中の騒ぎは、しかし、さう長くは續かなかつた。僅かに五秒か十秒かの間、ピリ／＼と、何かの布が引き裂けるやうな音がしたり、何かがむしやりに怒鳴る老人の聲がしたかと思ふと、そこからは突然に、白い影ん法師が躍り出して來て、病院の建物が、右手の方で鍵の手なりに突き出してゐる、その角を目がけてヒラ／＼舞ふやうに走り去つてしまつた。少し遅れて、

「畜生、畜生！」

連呼しながら、同じくそこへ走り出した豊吉老人は、この時漸く窓を這ひ下りて、庭の中ほどまで進んでゐた良作のところへ、息を切らし切らし駈けて來た。

「どうした？」

「逃がしたんです。石に躓いて轉んだので、その間に奴を逃がしたんです。どつちへ行つたか見ませんでしたか。」

良作は、白い影ん法師が逃げ去つた方を指で差し示したけれど、老人がすぐとそれを追ひかけて行きさうになるのを、ぐつと腕を捉へて引止めた。

「よせ。危い。」

「大丈夫です。」

「いや、危い。いつでも僕を狙つてゐる奴だ。——どんなことをするかも知れない。」

良作は、實際さう思つてゐたのである。それが前の夜に相良邸からの歸途自分を襲つた怪犯人だと、さう決めてゐたのである。

老人はしかし、激しく良作の手を振り離した。

「危ありません。旦那、あいつは女です。」

「え、女だつて？」



「暗くつて、顔はよく分りません。けれども、一度は確かに組み付いたので、女だつてことが分りました、捻ぢ伏せようとした拍子に、奴の袖がち切れたので、それで逃がしてしまつたんです——」

老人は、それまで片手に攔んでゐた、白い布片を差し出して見せた。

「これです、奴の袖から引きち切つて来たのは——」

良作は、その切れつ端しを無言のまゝ受け取つて、病室の前まで引き返し、窓の明りで見かう見調べ出したが、その時一緒に蹤いて来た豊吉老人は、良作の肩越しにそれを覗き込んでゐて忽ちサツと顔色を變へた。

「旦那、そいつは、相良のお嬢さんの寢巻ですよ！」

切れつ端しは、細い赤い線が格子型に入つたタオル地の、女ものらしい寢巻の片袖なのである。

「ナニ、これが銀子さんの寢巻だつて？」

「さうです、確かにさうです。あつしア、お嬢さんがこちらへ来て旦那の看病をなさることになつた時、角筭アパートから、お嬢さんの身の廻りのものを運んだんです。さうしてその時に、これと同

じ縞柄の寢巻があつたのを、確かに見た覚えがあるんです。」

良作と老人とは、さういひ終つてから、長いこと顔を見合して突つ立つてゐた。

二人共、妙に勇氣が挫けてしまひ、口を利くことさへ出来なくなつてしまつた。

### 再度の失踪

その夜良作は、病室のベッドへ戻つてから一睡もせず考へ續けた。

窓を開けた時に、木立の中へ逃げ込んで行つたのは、今や明かに銀子だつた。が、それはそれとして置いて、では銀子は、何故そんなことをしたのであらう、それが良作にはどうもハッキリと呑み込めなかつた。分りさうでゐてよく分らず、霧の中を透して何かを見極めようとする、それと同じやうな焦燥かしさを感じた。

極く簡単に考へた場合、それは無論難作なく片附きさうな問題だつた。銀子が良作のベッドへ蛇を投げ込んだ、とさう考へてもよい筈だつた。けれども、良作の知つてゐる相良銀子は、決してそんなことをする女ではなかつた。非常に優しい、寧ろ非現代的なほどにも弱々しいところのある銀



子だつた。蛇を投げ込んだ者が、あの恐ろしい殺人魔であるといふことが確かであるとするれば、銀子以外に蛇を投げ込んだ誰かがをり、銀子は何かの偶然でもつて恰度その場に居合せたといふだけのことであらうか。若しさうとすれば、それこそは此の際最も都合のいゝ解釋でもあるのだけれど、しかし、それにしてはあの時の銀子の、必死になつて、豊吉老人の腕から逃げ去つて行つた態度はどうだ？——そこに、何よりも怪しい點があるではないか。いやそれよりも、彼女は何故にかうした深夜、用事もなささうな病院の庭へなど出てゐたか。また、どういふ偶然で、蛇の投げ込まれた窓のすぐ下に立つてゐたのか。

考へれば考へるほど、良作には譯が分らなくなつて來るのである。

豊吉老人にとつても、それは同じことであつたらしい。良作がベッドの上でかうした考へごとを續けてゐる間、老人も容易には寢付かれぬ様子で、幾度となく寢返りを打つた。

ふと、良作が氣になつて來たのは、銀子があゝやつて逃げて行つたあと、今はどうしてゐるかといふことがある。

こちらではあの時に、銀子の顔を直接には見なかつた。さうして、あとでそれが銀子だと知れた

ため、急にがっかりとした氣持になつて、そのまゝ病室へ引き揚げてしまつた、が、逃げて行つた當人の方では、恐らく安閑としてゐることが出來ないであらう。顔を見られなかつたことに自信は持てゝも、片袖を挽ぎ取られてゐるからには、やがてそれが證據になるといふことを、無論氣が付いてゐる筈である。氣が付いた場合、彼女としては、當然何らかの手段に出でなければならぬ。その手段といふのが、あゝ、若しかして、あまりにもつきつめた女心の、取返しつかない手段ではないか。

そこまで考へをめぐらして來ると、良作は腹の底がヒヤリとした。そして、ガバと毛布を蹴つて起き直つた。

「旦那、どうしました？」

豊吉老人もハツと眼を開いて、良作の只ならぬ眼のうちを覗き込んだ。

「氣になるんだ、銀子さんのことが——」

「……？」

「見て來て呉れ給へ。心配だ、早く、早く。」



老人は、咄嗟に良作の心配を讀んだらしい。忽ち寢巻の紐を絞め直して、トツカハと病室を出て行つた。

銀子はその夜疲れを癒すために寢んだ別室といふのは、階下の八號室、良作の部屋とは間に五室ばかりを隔てた部屋である。眞夜中なので、そこへ老人の急いで行く蹙音は、良作の耳にもよく聞える。向ふへ行つてから、老人はドアをノックしてゐるのであらう、トン／＼、トン／＼、といふ音が、淋しく廊下を傳はつて響いて來た時、良作は、慄然として身體の血を凍らしてしまつた。今、老人が出て行つた廊下へのドアは、半ば開いたまゝになつてゐる。そこから、思ひがけず、腕が一本、すゝと部屋の中へ差し込まれて來て、入口の壁に取り付けてある。電燈のスイッチを、カチリツと振ぢつたからである。

「呀ッ！」

叫んだ時、部屋の中へは、既に何者か、這入つて來てゐた。そして、その曲者は、良作を目懸けて、ぢり／＼、ぢり／＼、と突き進んでゐた。

良作が、本能的に感じたことは、これこそ銀子ではない、怪殺人魔だといふことである。同時に

また、敵は短劍かピストルか、何かの武器を持つてゐて、豊吉老人がここを出て行つた際を狙ひ、自分を殺しに來たのだといふことである。

五尺、四尺、三尺、次第に敵は近づきながら、それでもすぐには躍りかゝつて來なかつた。前の相良邸からの歸途で失敗し、つい先程の毒蛇でも失敗し、今度こそは、間違ひなく息の根を止めるつもりで、充分に狙ひ定めてゐるのであらう。

が、ピストルならば、すぐにも撃ち放す筈である。良作は、敵が短刀を持つてゐることを知ると、『よし、それならば！』といふ氣になつた。さうして、愈よ、敵の吐く荒い息が、自分の顔へふりかゝるやうになつた時、猛然としてこちらから躍りかゝつて行つた。

瞬間に、敵の方でもぐつと短劍を突き出して、機先を制しようとしたのであらう。良作は、最初に、右の耳が、ヒヤリと冷たいものに觸れたのを感じた。同時に、敵がもう一ぺん腕を縮めて、今度こそは、良作の胸のあたりを突き直さうとする氣配を知つた。

最初の一突きを、良作は、身體をフットボールのやうに丸く蹴めて、いきなり跳びかゝつて行つたため、辛くも耳朶をかすらせただけで濟んだのである。二度目の突きが來ようとした時、脚元で



は、ベッドに近く置いてあつた、丸椅子がカタ／＼と倒れる音がした。二人は、組み合つたまゝ、その丸椅子に足を取られて、ドタリとそこへ倒れたのだつた。

自分が下になつたのか、敵が下になつたのか、それさへもよく覚えがないほどに、激しい格闘となつた時、良作は、敵の短剣を持つ腕を絞めつけようとして、懸命に對手の胸に武者振りつゝいた。敵も、それを防ぎながら、幾度も空を切つて、その右腕を振り廻してゐた。

明かにそれは女ではない。また、白いタオル地の寝巻を着た銀子でもない。

『ウン！』

呻くやうな敵の懸け聲で、横なぐりに拂つた短剣は、二度目に良作の腕を斬つたらしい、冷たいやうな熱いやうな痛みが、サツと右の脇から手首にかけて走つた。さうして二人は、急に兩側へ飛び退いて、互の隙を狙ひ合つた。

『旦那、旦那、どうしたんですか！』

ふいにさういふ聲が聞えて、豊吉老人がそこへ歸つて來たのは、恰度この時のことである。

『スキツチだ、スキツチをひねろ！』

良作は叫んだ。

同時に、老人は、『ワツ！』といふやうな悲鳴を立てた。

老人の歸つて來たことを知ると、怪人は、ふいに踵をめぐらして、ドアから廊下へ、脱兎のやうに飛び出したのである。老人は、入口で、仰向けに打ち倒され、あとからそれを追ひかけようとした良作も、その老人の身體に躓いて、ドタンとばかり倒れてしまつた。

廊下には、向ふの曲り角に電燈が點いてゐる。そのために、この時漸くハッキリと認めただけが、逃げて行く怪人物は、案外背の高い、ヒヨロ／＼した男である。良作が、それをすぐに追ひかけようとは思ひながら、倒れてゐる豊吉老人が、どこかを刺されたものではあるまいかと心配し、肩へ手をかけて抱き起してゐる間に、怪人物は、廊下の角を左へ曲がつて、ドシ／＼と向ふへ逃げて行く。

『どうした、怪我はないか。』

『ありません、大丈夫です。』

良作は、皆まで聞かず駈け出したが、曲り角の向ふへ行つて見ると、廊下は行詰りが庭へ出る硝



子戸になつてゐて、それが黒々と口を開いてゐるのだつた。

怪人物は、恐らく忍び込む時にもそこから忍び込み、前以て逃げ道を用意して置いたのであらう。硝子戸の外は、以然として塗りこめられたやうな闇である。

『あいつですね、いつもの奴は？』

豊吉老人も、あとからついて来てかういつた。

『さうだ。あいつだ』良作は、漸く怪人物を追ふことを断念して、病室の方へ戻りながらいつた。

『蛇を投げ込んだのも、前の晩に僕を殺さうとしたのも、皆んなあいつのやつたことなんだ。——ところで、銀子さんの方はどうだつた。別に變つたこともなかつたやうか？』

『それがです、お嬢さんは、どこを探して見てもありません。——そしてその代りに、お部屋に手紙が一通ありました。』

『ナニ、手紙だつて？』

老人が差し出したのを、奪ふやうにして取つて見ると、表には「中牟田様」走り書きでさう書いてある封書である。

急いで封を切ると、中からは、四五枚のレターペーパーが現れて來た。さうしてそれには、次のやうな文句が細字でぎつしりと認ためてあつた。

中牟田良作様

突然に、又しても姿を隠さねばならなかつた私のことを、どうぞお許し下さいませ。今夜私は、ふとした拍子に、病院の庭で、見ではならない人の姿を見てしまつたのでございます。その人は、いつかの夜、貴郎様を崖の上のところへ刺し殺さうとした、あれと同じ人でございます。また、ずつとく前のこと、私が義齒を盗まれた晩に、家中の者が飲んだオレンヂエードの中へ、何かの催眠剤を入れた人でございます。

突然に、かういふことを申上げたところで、さぞかし御判断にお困りでせう。けれども、私としてはそのことをいふのさへ、やつとく思ひ切つての上のことです。凡てのことを判つて戴くためには、あゝ、何から先きに申上げたらいのでせう。

義齒を盗まれた晩のことは、今日が日まで、まだ誰にもお話したことがございませんでし



た。警察の人達にも訊ねられ、また貴郎様御自身からも訊ねられ、それでも打明ける氣にはなれませんでした。あの晩、私は、オレンヂエードを飲む少し前に、何氣なく、宅の臺所の方へ行つたのです。さうしてそこで、或る非常に意外な人が、瓦斯にかゝつてゐた鐵瓶の湯へ、何かの粉薬を入れるのを見てゐたのです。恰度、女中がそこにはをりませんでした。さうして、その人が一人きりでそこゐたのでした。あゝ、どうしてあんなことをするのだらう、私はさうは思ひながら、その時は、何か知ら悪いところを見たやうに思つて、そつと臺所から引返したのでした。

その夜のうちに、あの不思議な事件の起つたことを、貴郎様も多分詳しく御承知でございませう。家中の者は、私を始め女中までが、前の夜飲んだオレンヂエードのために眠らされてしまひ、その間に、私の前齒二本分の義齒が盗まれたのでございました。オレンヂエードの中に、催眠剤が入つてゐたのだといふことを知つた時、私の驚きがどんなものだったかお察し下さい。前申上げた通り、私は、その催眠剤を入れた人物を知つてをります。さうして、その時になつて、ハツとしてそれを思ひ出しながら、その人物の名前を、私の口からは、どうしてもいふことが出来

ませんでした。

その時代々幡署から來られた須田沼といふ司法主任は、私を大變に怪しく思はれたやうでございました。無理ありません。私は、その人物の名前を打ち明けまいとし、殊更にも曖昧な答辯をしたのですもの、オレンヂエードを飲んだあとで、すぐには眠くならなかつたなどと、そんなことをお答へしたのですけれど、今になつてハッキリ申します。私は確かにあのオレンヂエードで眠らされたのです。さうして然も、その催眠剤を入れた人間を知つてゐるのです。

私は、その日のうちに、父に宛てた書置きを残して、自殺するための家出をしました。一つには、あゝしてだんくりに私の身の上に不幸が重なり、とても生きてゐる氣持がなくなり、一思ひに都築のあとを追はうとしたのでもございすし、一つにはオレンヂエードのことをそれからそれへと訊ねられるやうな心配があり、それであんなことをしたのでございす。

これには、きつと何かの深い事情がある。さうは思ひながら、それを探り知る勇氣さへ持てませんでした。

不思議な偶然で、二度までも貴郎様から救はれることになり。それから後のことは、大體が、



貴郎様も御承知の通りでございます、只一つ、貴郎様は勿論のこと、他の誰一人でも知つてゐないことは、四日前の晩、私が貴郎様の危難に行き合せた、あの時のことでございませう。あの晩、最初に私は、貴郎様に手傷を負はせた怪人物が、崖の上に突つ立つて、じつと下を見下ろしてゐる姿を見たのでした。さうしてその時に、思はず、呀ッと呼んだのでした。顔を見なかつたのでよくは分りませぬ。

けれども、その人物の後姿こそ、確かに、あれと同じ人物だつたではございませぬか。オレンデエードの中へ、そつと催眠劑を仕込んで置いた、あの人物だつたではございませぬか。

私は、もう、氣も顛倒する思ひでございました。せめてものお詫びには、一日も早く、貴郎様を元のやうな御丈夫なお身體にしてあげたいと思ひ、それから後は、懸命になつて看病を續けたのでございましたが、あゝ、何といふ悲しいことだつたのでせう。私は、今夜もまた、あの恐ろしい人物の姿を、庭のうちで見付けてしまひました。

恰度私が、一旦眠りかけたのを不思議に眼覺めて、時計を見るために半身を起した時でございませぬ。私は、別にどういふといふ理由もなく、窓の方へ眼をやつて、そこに、確かに、誰か、

んでゐるやうな氣がしたのでした。考へても見ますれば、あの人物は、今夜私が、貴郎様の部屋で看護についてゐないといふことを知つて、それでも一應はそれを確かめて見るため、そつと、私の部屋を覗きに來たのに違ひありません。私は、そつとベッドから這ひ下りて、カーテンの端をかゝげて見ました。

すると、それが恰度、その人物は、私の部屋を覗いてしまひ、庭を、貴郎様のお部屋の方へ行きかけてゐた時だつたのです。私の部屋は、電燈を點けたまゝにしてありましたので。その明るみが庭へ洩れてゐて、私は、三度、同じ人物の後姿を見たのでした。

私は、ハツとしました。さうして、大急ぎでベッドを抜け出し、氣付かれぬやうに庭へ廻りました。廻つた時には、もう怪しい人物の姿は、貴郎様のお部屋の前を、スルリと横へ逃げ去つた時です。逃げる前に、その人物が、何かを貴郎様のお部屋へ投げ込むのを、私は確かに見届けてゐました。何を投げ込んだのであらう、私がさう思つてお部屋の前へ近づいて行くと、その時も、貴郎様はお眼を覺まし、蛇を打ち殺さうとなすつてゐたのです。——急に窓をガラリと開けられ、私は懸命になつて逃げました。さうして、漸くこゝの部屋までは戻りました。けれども、



遅かれ早かれ、あれが私であつたといふことは、貴郎様にもお分りでせう。そしてまた、いろいろとお訊ねになることでせう。

私は、知つてゐても、あの人物の名前を打ち明けることは出来ません。卑怯だとは知りながら、一先づ身を隠すより他ありません。只、最後に、可哀想な私の願ひが諾き届けられますなら、どうか、中牟田様、これからはもう、この恐ろしい事件から全く手を引いて下さいませ。

貴郎様が探し出さうとしてゐる眞犯人、その眞犯人は、血に餓ゑてゐるのでございます。何がもとでさういふことになつたのか、私には、これこそ全く見當が付きませんけれど、いづれはそれも明かになる時が来るのでございませう。

それは、思つて見るだけでも忌まはしい、私の凶い運命なのに違ひありません。理由が分らずに私は、只、懼れてゐるばかりでございませう。貴郎様も、どうか私の願ひを容れて下さつて、すぐにも事件から手を引いて下さいませう。

言ひ足りないこと、書き足りないことが、まだ澤山にあるやうでございませう、けれども、今にも貴郎様の方から私の部屋へお越しになつて、今夜のわけを訊かれさうな気がして、これ以上詳

しくは書けません。私としては、とても言ひ得ないことまで言つてしまつた氣持がします。こんな手紙を残して置いてもよいものか、それが大變に心配になります、けれども、今日まで貴郎様が盡して下さつた親切や、それに數々経て來られた危難のことを考へるとどうしても黙つてはをられません。

どうぞお願ひです。

これ以上は、何ももうお訊ね下さいますな。

そしてまた、吳々も、事件を追究なさらぬやうに。そのことこそ、一番大切なお願ひなのでございませうから。

非常に急いで書いたものと見え、終りの方は判讀するのに苦しむほどの筆蹟である。漸く讀み終つた良作は、思はずホツと深い溜息を洩らしたのだつた。

偶然の一致

相良銀子は、遂に再び行方を晦ましてしまつた。



が、さうした銀子が、良作宛てに殘して行つた長い手紙は、果して何を語つてゐるのであらうか。殊にまた、その手紙の中に書かれてゐる不思議な文句、即ち、「私の知つてゐる或る非常に意外なる人物」とは、いつたい誰のことをいつてゐるのであるか。兎にも角にも讀者諸君は、銀子がこれまでにどこか曖昧な態度を示して來た、この理由を臆氣ながら御推察になつたに違ひない。同時に、かくして長い間黒い祕密の帷に隠されて來た恐怖の齒型事件真相も、も早速からずして明かになるといふことを感じてをられるに違ひない。

かの恐るべき人物——都築浩二を殺し、箕村駒吉を殺し、更にまた原口蓮心までも殺してしまつた怪殺人魔は、正體果して何者であるか。

物語は今や、漸くそれを説き明すべき段取りとはなつたのであるが、作者はこゝで、久しく閑却してゐた警察當局の活動について、少しく筆を費さなければならぬやうに思ふ。警察、殊に代々幡警察署としては、齒型事件の眞犯人を檢舉すべく、その後も極力、捜査手配を急がせてゐる筈なのだつた。

事件の真相について當局がどの邊までそれを探り得てゐたか、それは讀者諸君も既に御承知の通

りである。當局では、中牟田良作が妙雲院へ行つて、原口蓮心と相良銀子とが姉妹であり、然も、銀子が相良泰之輔老人にとつて、ほんとうの娘ではなかつたといふことを探り出して來てゐた、それを少しも知らなかつた。また、あの夜東京ビルディングでの蓮心殺し、及び島崎刑事殺しが起つてから、中牟田良作がどこへどう姿を消してしまつたのか、そのことも一向分らずにゐた。

良作がふいとどこかへ行つてしまつたことについて、當局としては、最も狼狽してゐたのである。彼等は、關東ビルディングでの事件があつたすぐ翌日、良作を再度呼び出して何かと相談したり訊問したりしようとした。ところが、その時には、良作が藤本醫院の一室に身を横たへ、昏々として生死不明の境を彷徨してゐた時なのである。銀子も相良老人も、何故かそのことを警察へは知らせずに置いた。そして警察では、皆目見當が付かないまゝに、新宿オレノ食堂の附近に網を張つて、いつかは良作が歸るであらう、それを待ち構へるより他は無かつた。

いかに峻敏なる警察官がゐるにしても、これでは殆んど手の下しやうのなかつたのが無理もない。當局では、後に述べるやうにして、中牟田良作が再び姿を現すまで、毎日毎夜の捜査協議を續けながら、一向に手配を進捗させることが出来なかつたのであるが、こゝに只一つだけ探り出した、流



石の中牟田良作でさへも知らなかつたやうな新事實がある。

それは、この物語の前半に於て、かなり奇妙な活躍をして来た、かの莊司昌明男爵についての件であるが、代々幡警察署では、事件が紛糾に紛糾を重ねて行く一方に於て、莊司男爵に關しても、常に監視の目を怠らずにゐたのであつた。さうして或る日のこと男爵邸の豫子をそれとなく見張りに行つた刑事の一人は、偶然にも金造といふ男を捕へたのだつた。

金造は、表向き職業周旋人といふものをやつてゐて、内實はもぐり女術が本職の男である。彼は、嘗ての日、新宿新井町の煙草店に、銀子が隠匿まはれてゐるのを發見し、それを種にして多額の懸賞金を獲ようとしたのだつた。そしてその時は、一寸油断をしてゐる間に、銀子が良作の手に救はれて角筭アパートへ連れて行かれたため、それを莊司男爵のしたことだと思ひ込んだのであつた。その日、金造がウカ／＼と、莊司男爵のところへやつて来て、到頭刑事に捕まるやうなことになるたといふのは、所謂自業自得といふものであらう。

金造は、その時、男爵が邸外へ姿を現すのを、随分長いこと待つてゐた。さうして、愈よ男爵がこれは何氣なく外出するつもりであつたのだらう、ぶらりと門の外へ出て来たのを、いきなり次

のやうにいつて喰つてかゝつた。

『御前、御前はこのあひだ、あつしにひどい鹽辛を嘗めさしましたね。今日はあつしア、そのことで文句を言ひに来たんですが、御前はあの銀子といふ女を、どこへ隠してしまひました？』

『ナ、ナニをいふんだ、私が、あの銀子さんをどうしたといふのだ。』

『白ばつくれちアいけません。あつしアあの時に、銀子さんを警察の手へ渡してやつて、その代りに、懸賞金の一萬圓といふものを貰はうとしたんです。そいつを御前は、あつしをまんまと出し抜いてしまひ、あつしが交番へ巡査を連れに行つてゐる間に、娘をどこかへ連れて行つてしまつたぢアありませんか。』

『いや、いや、私は知らん。私は只、あれが問題の銀子といふ娘だといふことを、君に知らせてやつただけで、そのまゝ歸つてしまつたんだ。』

『御冗談——。ぬけ／＼とどんなうまいことを仰有つてもあつしアちゃんを知つてゐるんですからね。何もあつしはあの娘をこゝへ出して貰ひたいつていふわけぢアねえです。あの娘を見付けたなアあつしだけれども、それが銀子といふ娘だつていふことを知つてゐたのは、他でもねえ御前様な



んです。あつしはね、只さうやつて御前がああ娘をどこかへ隠してしまひ、それを黙つてゐようつていふ肚なら、別に他のこたア望みやアしません。あつしに熱いお湯を吞まして呉れた代りとして少しばかり纏つた金を戴けりア結構なんです。いかゞでせうかね御前、あつしがそのことを警察へでも行つて告げて出ると、どんなことになるものでせうね。』

男爵は、事實銀子の行方を知らないのであるが變に絡んで出た金造の態度で、頗る弱らされたものらしい。そこで、猶も數回の押問答をしてゐると、その事實は、前に述べて置いた代々幡署の刑事がいつの間にか二人の立話をしてゐる横手へ來てゐて、有合せた牛乳配達の車の蔭へ身を潜め、ちつと二人の會話を聞いてゐたのだつた。さうしていきなり、金造を捕まへたのだつた。

金造が代々幡署へ連れて來られてからの取調べは、對手が對手であるだけに、頗る峻烈を極めたものであつた。さうして當局は、銀子が新宿附近に身を潜めてゐたといふ事實を、この時始めて知つたのだつた。

銀子が新宿にゐたとすれば、同じ新宿にオレノ食堂を出してゐた中牟田良作が、何故あんなにも事件に熱中してゐたか、そのわけが大體當局としても見當が附く。

『さうだ、これア確かに、銀子をさうやつて煙草屋から連れ去つたといふのが、あの中牟田のやつた仕事に違ひない。』

須田沼司法主任は、すぐとそのことを思つたのであるが、そこで一方莊司男爵である。男爵について當局では、今まで何か怪しい〜と思ひながら、流石に對手の身分を考へて、直接には手を下しかねてゐたのである。彼等は、時を移さず男爵邸へ赴いた。さうして、今度こそは言ひ逃れをす隙を與へず。全部ありのまゝを語らせてしまつた。

男爵の答辯によつて、漸く分つて來たことといふのが、これも實は讀者諸君が御承知の筈の、嘗て都築浩二が殺された晩にその死體を最初に發見したのが莊司男爵であつたといふことである。

男爵は、流石に自分に都合の悪いやうなことは、なるべく言ふまいとしてゐたが、それでも最初に墓地の中に自動車置いてあるのを見つけた時から話し始めて、途中で問題になつた頭字入りのステッキを置き忘れ、自動車の中が覗かれるやうになるところまで、地べたを這つて行つたのだと詳しく話した。そしてそのあとへ附け加へて、自分がそのステッキを發見され一度訊問を受けた際には、殺人事件などの係り合ひになることが厭だつたので、殊更に出鱈目な嘘を吐いて、その場を



胡麻化してしまつたといつた。

聞くが初めての須田沼司法主任にとつて、これは非常に興味ある事實であつたに違ひない。彼は男爵がかういふことを話す間、傍目もふらずに聞いてゐたのであつたが、そのうちに、ふと思ひ付いたことがあるらしい。あとで彼は、次のやうにいつて訊ねたのだつた。

「……ところで男爵、あなたはその時に、どんな靴を穿いてをられたのですか。」

男爵は、いゝ工合に、その時の靴を覚えてゐた。そしてすぐに、女中に吩咐けて、それを司法主任の前まで持つて來させた。

靴には「銀座不二屋」といふマークが打つてあるし、踵などもまだそれほど磨り切れてをらず、案外新しい品物である。司法主任は、何故かその靴を非常に大切に取扱つて、男爵の許しを得た上で、代々幡署まで持つて歸つた。

約三十分間、自分の一室へ閉ぢ籠つたまゝ、あちらを見たり、こちらを見たり彼が頻りにひねくり廻してゐたものは、嘗て島崎刑事も大切にしてゐた、犯人の靴跡を寫眞にしたものや、或は、妙雲院墓地の現場を、見取圖にとつて置いたものなのである。

やがて彼は、部下の刑事を自分の室へ呼びつけた。そして机の上に並べたいろ／＼の品物を指差した。

「君、僕は今、非常に奇妙なことを發見したよ。」

「へえ、どんなことですか。」

「こゝにある、この莊司男爵の靴なんだ。この靴は、妙雲院にあつた犯人の靴跡とも一致してゐるし、箕村駒吉の家の土間で發見して、それを死んだ島崎君が見取圖にして持つて來て置いた靴跡とも一致してゐるのだ。」

「といふと、どういふことになりますか。」

「どういふことになるんだか、そいつは今は今言へさうもない。君は、これからすぐに銀座へ行つて不二屋といふ靴屋で訊いて來給へ。——莊司男爵の靴を持つて行つて、これと同じ型で同じ大きさの靴を、莊司男爵以外に、誰か他の客へ賣つたことがあるか、さういつて訊いて見るのだ。」

刑事は大急ぎで代々幡署を出て行つた。さうして、二時間と経たないうちに歸つて來た。

「主任、分りました！」



「分つたか、それはよかつた。どんな風だつた？」  
 「實は私は、向ふへ行つてもすぐにそれが分るかどうか、大變に不安に思つて行つたんです。ところが、不二屋では果して私の思つた通りで、同じ型の同じ大きさの靴といつても、相當澤山に賣れるものだし、一々覚えてはゐないといふ返事なんです。尤も、この一足だけは、確かに莊司男爵の邸へ届けたといひましたが。」

「それは分つてゐる。——で、それからあとはどうしたのだ。」

「帳面を出させたりなどして調べましたが、最初はなかく分りません。私も、少なからず失望してしまつたのですが、そのうちに店の番頭が頗る耳寄りなことをいひました。さういへばこれと同じ靴を飾窓の方へ出して置いたが、確か四月の初め頃變に瘦せつこけた眼附の鋭い男で、しかも顎の下に何かの刃物でつけたらしい妙な傷痕のある男が買つて行つたといふんです。——主任、顎の下に傷痕のある男といふのは、あの箕村駒吉といふ男に違ひありませんよ。あの男は、確か一度、自殺しかけたことがあつたといひましたね。」

偶然といへば偶然である。

意外にも、莊司男爵の穿いてゐた靴と、箕村駒吉の穿いてゐた靴と、この二つが全く同じ靴なのだつた。

このことは、事件の當初に遡つて、妙雲院墓地に印せられてゐた、三様の異つた靴跡に對し、どういふ解決を與へるのであらうか。

作者は今、それについて特別な説明を加へる必要がないやうに思ふ。そのことは、自然に分る時が來るのである。

須田沼司法主任は、しかし、そのまゝ靴を眼の前に置、いていつまでも考へ續けてゐたのであつた。

### 第一の犯人

三日四日五日とそれからかなり幾日もの日が経つてしまつた。

この間に、警察當局ではどういふ方面に活躍したか。それについてはこゝで特別に書き誌して置くやうなことがない。前章に述べたやうにして、當局へは莊司男爵の行動についてもかなりの確な



ところが判明してゐたし、その他いろいろの事情が次第に判りかけてゐたのではあつたが、それにしても目下一番大切なことゝいふのは、中牟田良作を見付け出すといふことであつた。さうしてしかも、その肝心な人間は、容易に居所を知らして寄來して呉れないのだつた。自然當局でも、あともう少しで事件も解決されると、さういふことを誰も彼もが考へながら、しかし、それ以上には大して手を伸ばすことが出來ずにゐたのであつた。

須田沼司法主任を初めとして直接事件を擔當してゐた各警察官にとつては、これがどんなに、齒痒ゆいことであつたか知れない。彼等は毎日のやうに協議を續けた。そして其間に、例の銀子が隠匿はれてゐた煙草店のお婆さんを厳しく責めて、その時銀子を連れて行つたのが、果して須田沼司法主任の推察通り、中牟田良作であつたといふことを明かにした。が、今更それが知れたところでどうならう。この時にはもう、銀子が小石川神坂町の藤本醫院へ行つて、怪我をした中牟田良作を看病し、更にまた、例の毒蛇事件の直後で、再度の失踪を遂げてゐたのである。煙草店のお婆さんは無論さうした詳しいことを知つてはゐない。銀子のゐた角筈アパートでも同じことであつたし、オレノ食堂の方ですら、主人の良作がどこにゐるのかを少しも知らず、殆んど閉店同様になつてゐた

のであつた。

新聞では、「當局遂に齒型事件の捜査を斷念か？」といふやうな標題を掲げて、一時はあれほどにも前途有望であつた事件の解決を、かうまで長びかせてゐるといふのは、當局が非常に無能なことの證據であると、さういふ非難を浴せたものもあつた。また同じ警察の部内に於ても、捜査上の意見が區々まち／＼に分れてゐて、その中には中牟田良作が一番怪しい男である、この男こそ案外眞犯人ではあるまいか、とさういふことを言ひ出すものもあつたし、それに對しては皆が皆賛成したまでのことはなくとも、良作こそ、實に怪しからん男である、彼は警察を出し抜いて、何か甘い汗を吸はうとしてゐる、かう考へる者が澤山にあつた。

事情を知らない者の側から見れば、さうした良作に對するいろいろの非難やら臆測やらが、強ち無理でないところもある。當局のうちにあつて、只一人常に良作を辯護する位置に立ち、彼が行方を晦ましてゐる理由を、能ふ限り善意に解釋してゐたのが、いふまでもなく須田沼司法主任であつた。彼は、良作が現れて來て呉れないので、他の誰よりもいら／＼としてゐたのだつた。そしてしかし、良作については、次のやうなことを言ひ／＼してゐたのだつた。



「いや、これには何かきつと、混み入つた事情があるんだ。僕は、刑事島崎君が殺された時に、初めて中牟田といふ男に會つたのだが、事件中ではあの男が、少くとも最も信頼するに足る男だと思つてゐるのだ。我々としては、あの男の言葉を信じなかつたばかりに、島崎君をむざ／＼と殺させてしまつてゐる。彼が行方を晦ましてゐるのは、恐らくさうしなければならぬ事情があつてのことで、彼を非難するのは、決して當を得てゐない。——僕一個の考へを以てすれば、この際我々が極力彼の行方を探すといふのは、ひよつとして、彼の考へてゐるやり方に對して、何か邪魔をするやうなことになるかも知れない、そんな風に思ふ位だ。僕は、それを思ふといふと、實際どうしていゝかも解らなくなるが、兎に角彼は、身を隠すだけの必要があつて、じつと時機を窺つてゐるのだ。島崎君の殺された時に、彼が前以て眞犯人の現れることを知らせて呉れたやうに、彼は適當な時機が來さへすれば、きつと我々の前へ出て來るのだ。さうして、犯人を捕まへるための、絶大な手懸りを提出するのだ。」

須田沼司法主任の考へは、大體に於て當つてゐるといふことが出来る。が、その最後に於て、果して彼は眞犯人を捕まへることが出來たか否か。

——五月二十六日。

それは、銀子が藤本醫院から失踪をした日から數へて、恰度二週間目のことに當る、この日の早朝、須田沼司法主任は、實に喜ぶべき電話を受け取つたのであつた。

「モシ／＼、あなたは須田沼さんですか、僕は中牟田良作ですが、至急お目にかゝりたいと思ひます。小石川の相良邸でお待ちしてをりますが、すぐとお出向きを願へませんか。」

といふ電話なのである。

電話では附け加へて、用件は、到底電話口では話し切れないし、會つた時に何もかも話すからといつた。詳しくは良作の意圖が分らないながらも、司法主任は躍り上るやうにして喜んだ。そして署長共々、即刻自動車に乗り込んで、代々幡署を出かけて行つた。

三十分の後に、相良邸の門前へ着いて見ると、そこでバツタリ顔を合せたのが、同じく警視廳からも自動車でやつて來てゐた、野口捜査課長の一行である。

「やあ、あなたの方へも同じ電話が行つたのですか。」

「ウム、君の方へも行つたのかね。」



お互ひに、そんなやうな挨拶を取交して、すぐに中へ這入つて行くと、玄關には中牟田良作が、只一人きりで一同を待ち受けてゐたのであつた。

良作は、この時、もう怪我のあとがすっかり癒つてゐたと見えて、元々通り、非常にながしりした恰幅だつた。そして、その巾の廣い肩の上へ載つけた顔には、かすかな微笑を浮べてゐた。が、その微笑の蔭に、何か一抹の淋しさうな、暗い愁ひを漂はしてゐたことも否まれぬ。須田沼司法主任が、「やア」といつて眞先きにそこへ近づくと、良作は同じやうに「やア」といつた。

「よく来て下さつたですナ。」

「來るも來ないもあるもんか、僕は、君が姿を消してしまつたので、非常な心配をしてゐたのだよ。」  
「きつとさうだらうと思つてゐたのです。が、それにはいろいろと事情があつたので、兎に角應接室の方へでもお通り下さい。——斷つて置きますが、今日はこゝの邸には、召使ひの者が一人残らずをりませんので、何もお構ひは出來ませんよ。」

「召使ひがゐらないつて。どういふ譯だね。」

「一度に暇を出してしまつたんです。」

何か意味のありさうなことではあつたが、一同はそのまゝ應接室へ導かれた。

「ところで皆さんは、僕が前の東京ビルディングでの事件があつて以來、どうして行方を知らさずゐるたか、そのことを第一にお訊ねになるのでせうね。」

良作は、一同の席が定まるのを待つてさう言ひ出した。そして、あの夜彼が相良老人を訪問しての歸途、意外な犯人の襲撃に出會したことから話し始めて、藤本醫院で起つた毒蛇事件までを、順序よく話して行つた。

「ふーん。」

途中で鼻を鳴らしたのは捜査課長である。彼は、やゝ不服さうにして口を挾んだ。

「なるほど。そんなことがあつたとは、僕はちつとも知らんかつた。——が、君はしかしそれだけのことがあつたつちに、どうして僕の方へ知らせは呉れませんでしたね。」

「銀子さんの手紙があつたからなんです。今、その手紙を讀んでお聞かせしませう。」

良作は、用意して置いたらしい卓上の小型トランプを開いて中から例の手紙を取り出した。

讀んで行く間に、一同の表情がいろ／＼に變つて、或は何か呑み込んだとでもいふやうに、唇



をきつと固く結んだり、または、顎を小刻みに幾度も揺がせたり、捜査課長でさへが、初めの不  
らしい顔付きを、全くどこかへ失くしてしまつたのは、恐らくその文面によつて、なにか納得する  
ことが出来たのであらう。

『で、かういふ譯であつたものですから、僕は深く考へざるを得なかつたのです。』良作は、手紙を  
トランクへ藏ひ込みながら、一同の顔をくるとばかり見廻すのだつた。

『考へた結果、僕は其晩の中に藤本醫院を抜出さうといふ決心をしました。——一つには引續いて  
起るかも知れない何かの危険を避けて、一日も早く怪我を癒してしまふため、一つには、自分の居  
所を、誰にも絶対秘密にして置いた方が、萬事都合がいゝと思つたんです。無論、銀子さんの手紙  
にあつたやうに、犯人を探し出さうといふ仕事が非常に危険なことであるから、それを中止しよう  
といふ意味ではなく、反對に、僕としては最善の手段だと信ずる方法によつて、解決をつけるため  
であつたのです。兎に角僕は、その晩僕の部屋で起つた事件が、起きてゐた看護婦などにも知れた  
様子で、ウカ／＼としてはをられませんでしたから、早速藤本醫院の院長に會つて詳しく事情を話  
しました。そして、その晩のうちに病院を引き拂ひ、その代りには、本所の或る病院へ入れて貰つ

て、専心身體を元々通りにすることにかゝりました。院長藤本博士と豊吉老人以外には、誰も僕の  
居所を知つてゐたものはありません。——この間に僕の最も心配してゐたのは、銀子さんが、若し  
かして再び自殺を企てるやうなことはないか、さういふことであつたのですがそれは幸ひにして銀  
子さんから、その後藤本醫院宛てに手紙が来て、院長がその手紙をひそかに私の方へ届けて呉れま  
したので、大體安心が出来ました。』

良作は、そこでまた別の一通の手紙を出して、それを皆んなの前へ示したが、それには銀子が、  
あゝして突然に行方を晦ましたものゝ、あとでは、良作が又しても犯人の追究に力を注ぎはしない  
かといふことを心配し、追ひかけて、呉々もそれを中止するやうに、とさういふことが書いてあつ  
た。そしてその終りに、自分は、何處かの孤兒院へでも行つて、その嫁母になる考へだからと附  
け加へてあつた。

銀子のごとは、これで兎も角も、ぢきに探り出せるといふ見込みがついたわけである。

良作の説明を聴く一同の瞳は、益々熱心に輝いて來た。そして良作は、一寸の間何か考へ込むや  
うにして、ぢつと眼を瞑ぢてゐるが、やがて再び口を開いた。



「ところで皆さん、僕は、これでもう、大體僕の一身上のことは話し終へたやうに思ふんです。これからは、僕がさうやつて本所の病院へ行つてから、或はまた、病院を出てから今日までに、どんなことをやつて来たのか、その結果をお話ししようと思ふのですが、その前に一つ、皆さんからは非ともお約束をして戴きたいことがあるのです。」

「約束——？ どういふ約束だね？」 捜査課長は、すぐにさう訊ね返した。

「他でもありません。これから僕が話すことは、その詳しい事情を出来るだけ世間へ發表せず、新聞記者などには、なるべく曖昧な説明だけを與へて置いて戴きたいといふことなんです。」

「何故だね。場合によつては、無論それくらゐのことはしてもよいが。」

「理由は、さうやつて僕の探り出した結果といふのが、銀子さんにとつて、あまりに可哀相なものだつたからです。——お約束がない限り、僕は、眞犯人の名前も申上げませんし、全部の事情を聞かぬから葬つてしまひます。」

「といふと、ぢア君は、眞犯人が誰であるかといふことを、既に突き止めてあるのだね。」

「あります。」

一同は、互に顔を見合せた。そして、野口捜査課長が聲に力を籠めていつた。

「よろしい。約束しよう。」

良作の眉根には、かすかに晴れやかな色が浮んだ。

「お約束をして下されば、それに越したことはないんです、僕が、どういふ風にして眞犯人を突きとめたか、そのことは自然とお分かりになるでせうから、こゝでは何も説明致しませう。その代りに、これを皆さん見て下さい。」

トランクから、又しても良作が取り出したのは、一冊の書籍みたいなものである。

受け取つた須田沼司法主任は、それをバラ／＼と繙いて見て怪訝さうにいつた。

「これア君、日記ぢアないか。」

「日記です。齒型事件のうち、第一の犯人が書き残して行つた日記です。」

「ナニ、第一の犯人だつて？」

「さうです、この事件には、僕等が最初考へてゐたのとは非常に違つて、犯人が二人をりました。そして、そのうちの一人がそこにある日記を書いて置いたんです。——僕が一つ、事件に關係のあ



る部分だけを、拾ひ讀みに讀んで行きませう。』

死 の 日 記

その場に並み見る警察官一同の顔には、この時異様な驚きの表情が現れてゐた。

『事件には犯人が二人ある。そしてそのうちの一人が、日記を書き残して行つたのだ。』

さういふ中牟田良作の言葉が、全く思ひ設けぬものであつたからである。無理もない。島崎刑事が殺された時のことだけは別としても、その他の場合には、都築浩二も箕村駒吉も原口蓮心も、その死體には皆一様に奇怪な齒型が付いてゐたし、血を吸ひ取られた痕があつた。當局としては、かうした同一の手口から考へて見て、そこには只一人の犯人しかゐるものと思つてゐたのであつた。

須田沼司法主任は、手にしてゐた日記を良作の方へ戻しながら、

『フーン、それアどうも、實に意外なことを聞くものだ。しかし、その第一の犯人といふ奴は、いつたい何處の何奴なのだ。』

せつかちな口調でさう聞いた。

『日記を讀めば、そのこともよく分る筈です。しかし、名前だけは豫め申して置きませうか。』

『聞かして呉れ。是非聞かして呉れ。僕等は、何よりもそれを知りたいのだ。』

椅子から膝を乗り出すやうにして、野口捜査課長も一緒にいつた。そして良作は、落着いた態度で口を開いた。

『申しませう。第一の犯人、即ち、この日記を残して行つた男の名前は、箕村駒吉といふのです。』

『え、箕村——？』

一同は、大きな聲で叫んでしまつた。そして、暫らくは誰も口を利くことが出来なかつた。五人の被害者のうち、第三番目に殺された箕村駒吉が犯人の一人であらうなどと、彼等はこれまでの間に一度でも考へたことがないのであつた。

『ウム。』

司法主任等は、腕を拱いて唸り聲を立てたし、その間に良作は、日記を開いてあちらこちらを見較べた後、とある頁のところまで來ると、その上欄にあつた日附を「四月十日」さう聲に出して讀



み上げた。

「四月十日といへば——」捜査課長は突然に口を差し挟んでいった。

「それア君、最初の事件が起つた時より、少しばかり前のことだね。」

「さうです」良作は読みかけたまゝの姿勢で答へた。「代々木の妙雲院で最初の殺人の行はれたのは四月廿五日の夜なんです。だからこれは、それよりも約二週間あまり前のことに當るのですが、大體の事情を諒解して載くためには、こゝらから読んで行き度いと思ふのです。読みませうか。」

「読んで呉れ給へ。」

良作は日記を取り直した。瞬間に、部屋の中は肅然として静まり返つた。

その静寂の中で、良作は駒吉の日記を次のやうに読み始めてゐたのであつた。

——四月十日、晴。

朝起きて見ると、三度目の手紙が來てゐる。同じやうに差出人不明の、邦文タイプライターで打つた手紙だ。

不思議な依頼といふより他はない。

「都築浩二を殺して呉れさへすれば、御禮としては貴下の望むだけの金を出す。當方が禮金に於いての違約をすと思はれてはいけないから、取敢ず相當の金額だけを上野公園美術館傍の立枯れた樺の木根元に埋めて置いた。貴下はそれをひそかに取り出して確かめた上で、否や應か、簡單な返事で結構であるから、それを新聞の廣告にして出して欲しい。」

大體が、さういつた文句なのだ。

この不思議な殺人の依頼を、俺はどうしたらいいといふのだらう。

依頼者がどんな人間であるか、俺は全く何も知らない。けれども、この前の手紙にあつたところによれば、其奴は相良家に對して何かの怨みを抱いてゐるといふことだつた。そして、相良銀子と都築浩二とが結婚しようとしてゐる。その矢先きに當つて、都築浩二を殺し、相良家を不幸のどん底に陥入れたいとのことだつた。

相良家に對しては、俺は目下のところ、かなり不愉快な思出を持つてはゐる。だが、それにしても、この正體不明の殺人依頼者に同意して、自分とは何の縁故もない都築浩二を殺すといふの



は、果してどういふものであらうか。

金は欲しい。咽喉から手の出るほどにも欲しいと思ふ。

手紙には、承諾してさへ呉れ、ば、殺人の方法は追つて當方から適當な時機に通知するといふ旨が書き添へてあつた。また、都築浩二の寫眞が一枚同封してあつた。何にしてもこの依頼者は、随分計画的に事を進めてゐるに違ひないのだ。やらうか知ら、やるまいか知ら。

俺は金が欲しいのだ。金といふものに對する俺の執着は、生れついてからのものなのだ。その執着を俺は俺の異常性癖と呼んで置かう。子供の頃からして、俺にはその異常性癖が認められた。或る時は、親父の金を盗み出したし、或る時は友達の家へ遊びに行つてゐて、その友達の家にある金のメダルを盗んで來た。中學校へ入つてからいくらかの自制心が働いて、絶えずこの性癖を矯正することに骨を折つたが、それでも幾度となく盗みを犯し、卒業するまで、そのことがよくも誰にも知られずに來たと思ふくらゐだ。異常性癖は、これを盜癖といつてもよいだらう。俺は、その盜癖のために、どのくらゐ苦しめられたものか知れない。大人になつてから、銀行の窓口で埋高く積まれてある紙幣の束を見ると、俺は全身がブル／＼と顫へるほどの激しい誘惑を

感じた。繁華な店の勘定臺へ間斷なく雨のやうに落ち込んで行く銀貨を見ると、その勘定臺をいきなり引つ攫つて遁げたくなつた。俺は、かうして自分の體内に巢喰つてゐる奇體な執着、これこそはやがて身を亡ぼす惡魔に違ひないと考へて、出來るだけさういふものと關係のない、落着いた職業を選ばねばならぬと決心した。金を取扱ふ凡ての職業が俺には不向きだつた。結局、教會の牧師などになつてしまつたのだ。

が、かうして一切の俗務と關係を絶つたやうな職にゐても、忌ま／＼しいほどに根強くこびりついてゐた異常性癖は、機會さへあればいつでも頭を擡げようとしてゐた。そして遂に、教會の改築費として保管された多額な金を、俺はこつそりと盗み出してしまつた。

ふとしたことからして、それが、あの時教會へ出入りしてゐた相良泰之輔老人に知られて、俺は、到頭破滅がやつて來たと思つた。そして自殺を企てたのだつた。馬鹿らしいことだつた。今から思へばほんとに馬鹿らしいことだつた。が、その時は折角今まで誰にも知らさず秘し隠して來た俺の惡癖が、かうして教會の信者達に知られたからには、もう生きてゐられないやうな氣がしたのだ。自殺しそこなつた時に、事情を知らない世間では、それを變な風に誤解して、俺が何



か失戀でもして、そのために自殺を企てたのだらうといった。對手が、同じく教會へ出入りしてゐる相良銀子であらうなどともいはれた。相良老人がその間に立つて、いろ／＼と奔走したので、自然さういふ噂が立つたのであらう。

俺は教會を退いた。そして、全く自暴自棄になつてしまつた。今ではかうやつて、實に破戒無残な生活をやつてゐるのであるが、その俺に、望むだけの金を與へて殺人をやらせようとする。其奴はいつたい誰なのだらう。思へば、この殺人依頼者こそは、俺のかうした悪癖や、今までにあつたいろいろのことを、かなり詳しく知つてゐる奴に違ひない——。

良作は、一息つくために朗讀を止めた。そして、須田沼司法主任の方を向いていつた。

『もう、大體のところお分りでせう。僕自身も、この日記を見た時には非常に驚きました。箕村がかういふ男であつたといふことを、僕は少しも知らなかつたのです。』

『君は、郷里の中時時代が一緒だつたとかいふ話だね。』

『さうです。しかし、その頃にも彼のかうした性癖については、一向氣付かずにをりました。僕は

上京して來ると、偶然にもその上京した晩に彼と出會して、それから時々往來してゐたのですが、その時も、彼の背後にかうした問題のあることを、夢にも思つてゐませんでした。思ひ合せて見ると、僕が上京して來た時、恰度彼は、この日記にあるやうな不思議な殺人の依頼を受けてゐた時なのです。』

『君が上京した時といふのは何時だつたかね。』

『四月十三日です。日記を讀むと、その日のことも出て來ます。』

一同の瞳は、續けて日記を聞きたいので、熱心に輝いてゐた。そして良作は、再び日記を讀み上げて行つた。

——四月十二日、晴。

昨夜、到頭上野公園へ行つて來た。そしてその歸りに「依頼を承諾す——箕村」といふ廣告を、新聞へ出すやうに手續きして來た。

立枯れた樺の木の前には、多額の金が、しかも金貨で埋めてあつたからだ。黒い土を掘り起



して行く時、俺の心臓はビク／＼と顫へた。そして、肌觸りの冷たい金貨を、両手で確乎りと掴んだ時、氣の遠くなるやうな氣持だつた。今、金貨は燦然として机の上に盛られてゐる。

依頼者が誰であらうと構はない。

俺は、やつつけようと決心したのだ。

廣告は、明日の朝の新聞に出るだらう。

そして、誰だか知らないこの依頼者は、今度と同じやうな方法でもつて、金貨を送つて寄來すのだらう。

酒だ、酒だ、酒を飲むんだ。

どうせ棄鉢な俺ではないか。

——四月十三日、曇。

廣告は果して出た。

が、依頼者からはまだ何ともいつて來ない。

午後からして街へ飛び出し、散々飲み歩いた。飲みさへすれば、恐ろしい殺人を犯さうといふ、この俺の多少残つてゐる良心を麻痺させることが出来るのだ。

飲み歩いてゐるうちに、しかし、思ひ懸けないことがあつた。銀座裏の金獅子といふ酒場だつたが、俺がそこへ入つてゐると、意外にも、寫眞で見覚えのある都築浩二がやつて來たのだ。

都築は、酒場の二階へ上つて行つた。そして俺は、あとからそつと躓いて行つて見た。

二階にゐたのは、莊司といふ男爵の妻君だ。そしてこの女は、都築に對して、何か銀子の中傷したらしく、都築がそれを詰りに來たのだつた。都築は女を罵倒してゐた。そして、奇妙な桃色の封筒をポケットから出して、この手紙こそ、男爵夫人が銀子の中傷するために都築のこへ出した手紙に違ひないといつてゐた。手紙は、都築から女へ投げ付けられ女はこれを蹴飛ばしてしまつた。そして俺は、こつそりとそれを拾つて來たのだ。

見ると、手紙は、邦文タイプライターで打つてあつた。また「相良銀子といふ女こそは、實に怖るべき女である。この女に接近したものは、必ず不幸に見舞はれる。ずつと以前には、この女のために自殺を企ては某教會の牧師があつた。また、前に婚約の間柄であつた或る青年は、婚



約が出来上ると同時に、不慮の災難に遭つて死を遂げた。恐らく、相良銀子には、何かの魔がさしてゐるのであらう。結婚を中止せよ。切に切に中止せよ」さういふ意味の文句が書かれてあつた。

某教會の牧師といふのは俺のことだ、そして、俺があゝの娘に接近したために自殺を企てたといふのは、實に滑稽な間違ひだ。

が、それにしてもこの手紙は、明かに例の依頼者が俺のところへ寄來した手紙と同じものだ。不思議な奴だ。彼奴は、一方に於てはこの俺に都築浩二を殺させようとし、一方に於ては、都築と銀子との結婚を妨害しようとしてゐるのだ。都築のいつてゐるやうに、手紙は果して男爵夫人の手から出されたものだらうか。若しさうだとすれば、俺は男爵夫人に頼まれて、都築を殺さうとしてゐることになるのだが。

何が何だか分らない。

金獅子バアを出てから、路上で偶然に、舊友中牟田良作に會つた。東京で何かやりたいといふので、いきなり上京して來たといふのだが、相變らうの呑氣な男だ。一緒に二人で飲み直した。

別れて歸つてから、バアで拾つて來た手紙と、俺のところへ來てゐた手紙と、二つをよく見比べて見た。確かに同一人の出したものであることが分る。兩者ともタイプライターで打つてあり、然もその一字一字に現れた癖が、全く同じタイプライターで打つたものだといふことを示してゐるのだ。

男爵夫人か、それとも他の人間か。

依頼者の正體を突き止めることが出来れば、何かまだ面白いことになりさうな氣がする。今までのところでは、

- 一、其奴は、相良家に對して怨みを持つてゐる。
  - 二、其奴は極力相良銀子と、都築浩二との結婚を妨げようとしてゐる。
- それだけのことが分つてゐるのだ。

良作は、こゝで日記の頁をバラ／＼と繰つた。

『この間には、あまり重要なことが書いてないのです。毎日々々、酒浸りになつて過ごしてゐるも』



のと見えて、ところへ、日記の全く白紙になつてゐるところもありましたし、彼の起居動作について、殆んど何も書いてありません。』

『手紙の差出人を突き止めてはないのかね。』

野口捜査課長は、それが一番氣になるらしく訊いた。

『ありません。たゞ、大體のところから察して見ると、この四月十三日以後に於ても、彼のところへは、二度ばかり金の送られてゐることが分ります。そして箕村自身は、酒を飲まないでゐる正氣の時だけ、自分のやりかけてゐる仕事、實に恐ろしいことだといふのにひよつと氣付いて、依頼を断らうとしてゐることが分ります。けれども、彼は送られた金を見る度に、又しても決心がぐらついて来て、結局は依頼者のいふなりになつて行つたものらしいのです。——この間に、自動車の運轉を習ひに行つたといふことが、ところへ書いてありますが、これも依頼者からさういふ要求がいつて寄來されたものと見えます。』

『それはどういふ譯なのだね。自動車の運轉を習つたといふのは？』

『犯行が非常に計畫的だつたのです。讀んで行けば分りますが——』

『先きを續けて呉れ給へ。』  
良作が頁を繰つて行つて出したのは、四月廿四日、銀子と浩二との結婚式が擧げられたその前の日の日附であつた。

——四月廿四日、曇。

朝から夕方まで待つてゐた。そして夕方になつて漸く手紙を受け取つた。

殺人の方法を詳しく指圖して寄來したものなのだ。

それは實際驚くべき用意周到さだといふことが出来る。犯行の順序から時刻から、細大洩らさず指定してあるのだ。手紙には先づ、明廿五日の夜、東京會館で新郎新婦の披露宴が行はれた後、彼等は適量の麻醉薬を服用せしめられて、會館前から自動車に乗り込む筈であるから、その自動車をどこか郊外の淋しい場所へ誘き出し、そこで浩二を殺してしまへと書いてあつた。また、自動車を誘き出すことについては、運轉手吉本清造といふ男を、豫め麻醉薬で、ぐつすりとな眠らせて置くつもりであるから、お前自身が自動車を運轉して行くがよいと書いてあつた。



凡ては、前々から慎重に計畫されたことなのだ。萬に一つもやり損ひのないやうに、豫定のプログラムが出来上つてゐるのだ。分らないのは、自動車内に青色の紙で包んだ器具があるから、都築浩二を殺した後、その死體に適當な處置を施して呉れ、そしてそのあとでは、器具を元の形の残らないまでに破壊して、人に見付からぬ場所へ捨て、呉れ、とさういふ文句の書き添へてあつたことだが、これも恐らくは、さうした萬全の計畫のうちの一部分なのであらう。

「しかし、相良銀子については、何等の危害を加へてもいけない。それは最も大切なことである。犯行が終つたらば、銀子はどこか人目に付き易いやうなところまで連れて行つて、そこに打捨て置くがよい。その頃になつても、多分銀子は麻酔から眼覺めまい。眠つたまゝで、誰か人に發見されるやう、適當な手段を講じて貰ひ度い。呉々も、その點遺漏のないやうに」

手紙には、最後にさういふ注意がしてあつた。

明日だ、明日の晩に、俺は愈よ、恐ろしい人殺しをやることになつたのだ。

——四月廿五日、晴。

晝の間に、郊外でどこかいゝ場所を見付けようと思つて家を出た。そして代々木の奥に、妙雲院といふ小さなお寺があり、その墓地へは、うまい工合に自動車を乗り入れることの出来るのを確かめて来た。

場所はこゝがいゝ。代々木の奥とはいつても、新宿からさう遠くない所で、然も都合のよいことには、友人中牟田の住んでゐる角筈アパートまで、歩いてすぐと行かれるのだ。犯行後、氣を失つてゐる銀子の身體を、中牟田のところへ連れて行つてやつて、あの男に何かと面倒を見させてやらう。あの男が事件に關係するやうになれば、後に警察が乗り出して来た時、警察ではきつと中牟田を呼出していろゝと訊問するに違ひない。さうすれば、俺は中牟田の口からして、警察内部の様子を、いくらかでも聞き出すことが出来るのだ。妙雲院から、角筈アパートへ廻つて見ると、恰度中牟田は、どこか外出しようとしてゐるところだつた。歸りは何時頃になるかと訊いたら、夜の十一時頃になるといふ。このことも、矢張り都合がいゝと思つた。それまでには、仕事もきつと片附く筈なのだから。

酒の力を借りて、夕方まで眠ることが出来た。夜の七時、東京會館の前へ行つた。



帝劇前の廣場の方に、それらしい自動車があつたので、近づいて見ると、果して相良家の自動車だつた。運転手が眠つてゐるかどうかといふことが心配だつたが、そつと首を突き出して見ると、運転手は、ぐたりとなつて倒れたまゝ、ぐうぐうと眠つてゐた。萬事は、手紙の中にあつた通りである。運転手は、どこでどういふ風にして飲まれたのか、麻酔薬のために全く正體がなくなつてゐるのだ。

それでもこれからどうしようかと思つて躊躇してゐるうちに、時間がどしどしと経つて行つた。そして、會館のボーイが大聲を上げて、「相良さま、相良さま！」と呼ぶのが聞えて來た。

俺は、居汚なく眠りこけてゐる運転手の身體を踏みつけるやうにし、すぐと自動車へ飛び乗つた。さうして、會館前の車寄せへそれを運轉して行つた。

相良銀子と都築浩二とが乗り込んだ時、この二人は、まだ確かにハッキリと眼を開いてゐた。

そして俺は、車が東京驛へ着く前に、二人が眠りついて呉れなければ、非常に困ると考へた。東京會館と東京驛との間は、眼と鼻との間ぐらゐに近いのだ。

が、萬に一つも狂ひのない殺人依頼者の計畫は、俺の心配したにも拘らず、實に正確なものだ

つた。俺は、車を出来るだけゆつくり走らせて、わざと廻り路をしながら、一旦は東京驛へ向つて行つたのだが、途中で振り向いて見ると、二人共にもう麻酔が利いて、うつらうつらとしてゐるではないか。都築は、クツシヨンに背中を凭せて首を傾けて眠つてゐたし、銀子は、都築の膝につゝ伏して、殆んど氣を失つたやうになつてゐる。二人は會館を出る間際に、麻酔薬を飲まされたに違ひない。が、それにしても恐ろしいほどの抜目なさだ！

妙雲院の墓地へ着いたのは、九時を少し廻つた頃だつた。

俺はそこで、指圖されてゐた青い色の紙包みのことを思ひ出し、運轉臺のあちらこちらを探して見た。そして、すぐにそれを見付け出すことが出來た。

だが、これはまた、何といふ變つた思付きであらう。紙包みの中には、一種のゴム袋みたいなものが入つてゐて、それと一緒に、これで浩二の死體から、血を吸ひ取つて置くやうにといふ短い注意書が添へてあつたのだ。

これは、全く理由の分らないことだ。何がために、血を吸ひ取らねばならないのか。

俺は一時途方に暮れた。が、やがてこれも後になつて、何かの必要がある、言ひ換へれば、恐



らくは犯跡を晦ますために役立つところの、一つの手段であると考へた。そしていはれた通りにしよう決心した。

ゴム袋は、一方の端に金屬製の平べつたい嘴がついてゐて、それを死體の一部分に押し付けるやうになつてゐた。ゴム袋の兩側に、丸い把手のやうなものが附いてゐて、それを押へたり放したりすると、袋の中に眞空が出来て、血を吸ひ取る仕掛けになつてゐるらしい。浩二も銀子も運轉手も、まだ正體なく眠つてゐる。俺は、途中で眼を覺まされることを恐れて、浩二と運轉手との首を順々に絞めた。そして、息の絶えるのを見届けて置いて、甚だ奇怪な作業を始めた。

恐らく今までに、かうした風變りな殺人を、誰一人やつたものはないであらう。

血は、ゴム袋の中へ、ゴボ／＼と音を立て、流れ込んで來た。そして、さういふことをやつてゐる俺の姿を、誰も見てゐる者はなかつた。

浩二の死體を片附けた時、初めて俺は氣が付いたのだが、血を吸ひ取つた痕には、奇妙な、人間の齒で噛みついたやうな齒型が残つた、ゴム袋の嘴が、さういふ型を残したのだ。

夢中になつてやつてゐるうちに、どのくらゐの時間が経つたか分らない。俺は、ふと、恐ろし

くなつて來た。それまで自分のやつたことが、何か目に見えない糸で引つ張り廻され、殆んど機械的にこんなことをやつたのに氣が付いた。良心が眼を覺ましたのだ。俺は、ポケットに忍ばせたジンの瓶を、顛へながら取り出して、一氣にそれを飲み下した。そして銀子を自動車から運び出し、墓地を横切つてさ迷ひ出た。

墓地から、角筈アバートのすぐ近くの、新宿學園までの間を、俺は最も苦心して行つた。人に見付かりはしないかといふ心配があつたし、銀子の身體が軽いには軽いけれども、ぐつすと眠り込んでゐたために、非常に持ち重りがして苦しかったのだ。暗い路ばかりを選びながら、漸くそこへ行き着くまでに、タツプリー一時間以上を費してしまつた。そして、そこまで行くと、もう一足も歩けなくなり、ぐつたりと腰を下ろしてしまつた。

思へば、あの瞬間こそ、最も危険な場合だつたのだ。俺は、やがて氣を取直して、銀子の身體を路の端へ寝かし、用意して置いた紙片を、胸の帯のところへ挟み込んだ。見付け次第に、銀子を小石川の相良邸へ連れて行つて呉れるやうに、そのことを頼んだ紙片なのだ。紙片を置いて立つとうすると、向ふからは、スト／＼といふ聲音が聞えて來た。そして、中牟田がアバートへ歸る



べくやつて来た。

最初に組立て、置いた筋書きが、豫想以上にうまく進んだのだ。俺は、これこそ、悪魔か何か  
が蔭にゐて、凡ての仕事が極めて順調に行くやうに、糸を繰つてゐるのに違ひないと思つた。そ  
して、中牟田に姿を見られない先きに、暗に紛れて遁げて来た。見られたらおしまひだつた。中  
牟田のために自分のやつたことを、やがては看破されるところだつた。

今、俺は、無事にかうやつて自分の家へ歸つてゐる。どういふつもりであつたのだらう。俺は、  
あのゴム袋だけを持つて来てしまつた。依頼者の方では、このゴム袋を、どこか人に知られない  
ところへ、滅茶々に壊して捨て、呉れといふことであつたが――。

何にしても、これで到頭、二人の人間を殺してしまつたことになるのだ。

良作が、猶も先きを讀み続けようとしてゐた時、須田沼司法主任の顔には、何か、初めて分つた  
らしい。満足な納得の色が浮んでゐた。

前から問題になつてゐた靴跡のことが、この時ハッキリと分つたのだつた。

いふまでもなく、妙雲院の墓地にあつた靴跡は、その一つが莊司男爵のものだつた。そしてあと  
の一つが、箕村駒吉のものだつた。二つの靴が全く同じ型のものであつたために、問題は一層紛糾  
して来たのであつた。

これから先きも、どんなに意外な事實が判つて来るかも知れないぞと、警察官達が固唾を嚙んで  
待つてゐる前で、良作は再び頁をはぐつて行つた。

——四月廿六日、晴。

悪夢のやうな一晚が過ぎた。

昨夜俺は人を殺した。そして今日、いつもと變らずに、寢床の上で眼を覚ますことが出来た。

午前中は、じつと家の中に閉ぢ籠つてゐたが、午後になると、どうしても氣が落ち着かなくな  
つた。そして、中牟田良作のところを訪ねて行つた。途中で夕刊を買つて見ると、それには果し  
て昨夜の事件が報道されてゐる。そしてその中に、現場で犯人の遺留品としてステッキを發見し  
たといふことが載つてゐる。俺はそれを讀んで見て、何ともいへず、妙な氣持になつてしまつた。



俺は、ステツキなどを携へて行きはしなかつた。とすれば、あの時墓地へは、俺以外の誰かやつて来たといふことになる。そいつは誰だ！ 誰がいつたいやつて来たのだ！

これは非常に恐ろしいことではあるまいか。俺が銀子を連れてあそこを立去つた後に、誰か来たとはいふのならよいけれども、實は、俺があゝしたことをやつてゐた時、既にそこには誰かゝるて、俺のやることを見てゐたとしたらどうなるのだ。ステツキの主を、俺は是非とも探し出さねばならなくなつた。

角筈アバアトへ行つて見ると、中牟田が恰度、代々幡署から歸つて来たところだつた。案に違はず、彼は銀子を相良邸へ送り届けたのだ。そして事件關係者として警察へ呼ばれ、いろ／＼と訊問を受けて来たのだ。俺は、警察の捜査方針がどういふ方面に進んでゐるか、それを確かめて置きたいと思つたので、中牟田に氣付かれぬやう、何やかや問ひ訂して見たが、警察では、ステツキを最大の懸りとして、目下その方面に極力力を注いでゐるらしいことだけが分つた。目的は違ふが、俺と同じことを考へてゐるのだ。

幸ひにして、中牟田は俺がこの事件の一番重大な役目を勤めてゐることを、全く氣が付けてゐな

いらしい。俺は、いゝ加減にして、中牟田と別れを告げたが、歸らうとした時、ふつと思ひ出したことがあつた。

ステツキの頭文字が「M・S」の二字だつたといふことである。

あの殺人依頼者は、莊司男爵の夫人だつたかも知れないのだ。そして然も「M・S」の二文字は、恰度、莊司昌明男爵の頭文字に當るのだ。

俺は、すぐに莊司男爵邸を訪れて、それとなく男爵夫人の様子を窺つて見た。そして、いろ／＼にいつて、夫人が果してあの依頼者であつたかどうかを確かめようとした。

が、この訪問は、全く失敗だつたらしい。

俺に面會したのは夫人だけだつたが、あの女は、微塵も怪しいところを見せなかつた。俺は、金獅子バアで手に入れた手紙などを突きつけて、うんとやりこめたつもりだつたが、夫人は、飽くまでもその手紙には關係がないと言ひ張つた。顔色にも舉動にも、事實その通りであるらしいことが現れてゐた。

只一つ、ステツキのことだけは、怪しいと思ふ。ステツキの頭文字が莊司男爵の頭文字に相當



することを警察へ知らせて、その上で彼等がどういふ態度を執るのか、それを見極めてやるのも面白いだらう。

歸りに、そのことだけを、代々幡署宛てに密告して置いた。

——四月廿七日、晴。

終日、一步も外へ出ない。

いつも、誰かに、じつと見詰められてゐるやうな気がして、外へ出ることが恐ろしいのだ。金は、約束通り、受取ることが出来た。

——四月廿八日、雨。

新聞で、意外なことが報道されてゐる。

相良銀子が、失踪したといふことなのだ。

そしてそれには、銀子が、この事件の眞犯人であり、銀子が、浩二の死體から血を吸ひ取つた

らしいといふのだ。

馬鹿なことを！

銀子は、前歯を二本分だけ義歯してゐて、その義歯が盗まれたといふやうなことが書いてあるが、その義歯のために、銀子への疑ひがかつたらしい。實に、何ともいへず馬鹿氣なことだが、俺は、しかしこの報道からして、一つのヒントを掴むことが出来た。

例の依頼者は、都築浩二を俺に殺さして置いて、その嫌疑を、銀子にかけさせようとしてゐるのだ。ゴム袋の齒型は、銀子の義歯に似せたものだつたのだ。ゴム袋といへば、あいつはまだ押入れの中に藏ひ込んである。あれを當局へ呈出してやつたら、さぞかし驚くことだらう。

銀子に嫌疑がかつたとして、俺はどういふことをしたらよいのだらう。ゴム袋を呈出するなるといふことは勿論出来ないし、かといつて、じつとこのまゝ黙つてゐることも出来ぬやうな気がする。

知りたいのは、依頼者が、誰であるかといふことだ。さうだ、それを是非探らねばならない。



良作は、こゝでまた日記の頁をかなり飛ばした。

そして五月六日といふ日附のあるところを出した。

『四月廿九日から五月五日までは、全然一行も日記がつけてないのです。この間彼は、多分、依頼者の正體を突き止めるべくいろいろに骨を折つたことと思ひますが——』

『さうかも知れないね』須田沼司法主任は、頷きながら答へた。『何しろ、甚だ意外なことばかりだ。その間に君は、箕村と會つたことはなかつたのかね。』

『二三度あります。』

『その時に彼の態度でどこか變つたやうなところはなかつたらうか。』

『別に氣の付いたことはありません。彼は僕に會つた時、その後は一度でも事件に關しての口を利いたことがありませんし、僕自身も、當時は、何等興味を持つていませんでした。不思議なことか、僕も到頭事件に首を突込んでしまつたのですが、實は僕がほんとうに事件の渦中へ捲き込まれるやうになつたのは、これから讀む、五月六日以後のことなんです。五月六日の分には、最初頁の一部分が缺けてゐたのですが、その缺けた部分だけは、僕が前にふとしたことから手に入れてあり

ます。今、その部分を足して讀んで見ませう。』

缺けてゐた部分、これは良作が嘗て箕村駒吉の殺されてゐた時、その書齋で拾つて來たものなのである。

良作は日記を讀み出した。そして一同は、身動きもせず聞き入つた。

——五月六日、晴。

莊司男爵を尾行してゐると、舉動を怪しまれて刑事につかまりさうになつた。うまい工合に逃げたが、逃げて行くとふいと妙雲院の前へ出てしまつた。さうして、そこでは、原口蓮心が相良銀子に似てゐるといふ、實に意外なことを發見した。これは、非常に大きな收獲なのだ。

俺は、最初久しぶりで中牟田を訪ねるつもりだつたのだ。そしてその途中で莊司男爵の姿を見付けて、それを尾行しようとしてゐたのだ。この俺を、いつの間にか代々幡署の刑事が怪しいと睨んで、警察へ連れて行かうとしたのだが、俺は、刑事の手を逃げてから、妙雲院の前へ出るまでは、まさかそこにさうした、意外な事實が待ち構へてゐるようとは思はなかつた。俺は、原口蓮